

なかす  
**中須遺跡**

産母川河川改修事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書



2015

宮崎市教育委員会

宮崎市文化財調査報告書第102集

なかす  
**中須遺跡**

産母川河川改修事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書

2015

宮崎市教育委員会

## 序 文

本書は平成 23 年度に、産母川河川改修事業にともなって実施された、中須遺跡の発掘調査報告書です。

中須遺跡の所在する阿波岐原町周辺は、弥生時代の石神遺跡や、古墳時代の山崎上ノ原、山崎下ノ原遺跡をはじめとして多くの遺跡が確認されています。そのほか、平安時代にまとめられた『延喜式』にその名が記されている江田神社も鎮座しております、現在でも当地区的歴史を垣間見ることができます。

今回調査をおこなった中須遺跡は、これら遺跡が所在する砂丘の間にある低い土地に位置しており、これまで遺跡の存在があまり知られていない場所でした。しかしながら、今回の調査で、今から 2000 年ほど前の弥生時代の人々の生活の痕跡が確認されました。特に、木でできた柄に取り付けられたまま出土した石斧は、多くの人々の関心を集めています。

遺跡の発掘調査は、その地域の歴史を知る新たな情報を知ることができると同時に、遺跡の破壊にともなう行為です。我々は、常日頃このことを念頭に置きながら発掘調査を実施していかねばなりません。また、調査によって得られた成果を広く皆様に知りていただけるような活動をおこなっていくことも我々の重要な責務の一つです。

本書がその活動の一助となり、多くの方々に、いにしえの人々の暮らしに思いをめぐらせながら、郷土の歴史について深く理解し、守り伝えていく心をより大きく育てていただくなりつかけとなれば幸いです。

平成 27 年 3 月

宮崎市教育長  
二見 俊一

## 例　言

- 1 本書は、宮崎市教育委員会が平成 23 年度に実施した中須遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は平成 23 年 4 月 25 日から平成 23 年 7 月 29 日までの期間実施した。整理作業は平成 24 年 6 月 11 日から平成 24 年 7 月 20 日、平成 25 年 5 月 8 日から平成 25 年 6 月 27 日までの期間実施した。
- 3 調査組織  
調査主体 宮崎市教育委員会  
現地調査  
総括 文化財課長 田村 泰彦  
副総括文化財課長 富永 英典  
事務 主 査 烏枝 誠  
担当 主任技師 西嶋 剛広  
嘱 托 渕内 美智子  
整理作業  
総括 文化財課長 田村 泰彦（平成 24 年度） 文化財課長 橋口 一也（平成 25 年度）  
副総括文化財課長 島田 正浩  
事務 主 査 烏枝 誠（平成 24 年度） 主任技師 秋成 雅博（平成 25 年度）  
担当 主任技師 西嶋 剛広  
嘱 托 渕内 美智子  
前田 美恵子  
佐伯 美佐子
- 4 本書の執筆、編集は西嶋、渕内がおこなった。
- 5 掲載した図面のうち、現場における実測は西嶋、渕内が現場作業員の協力を得ておこなった。遺物の実測は西嶋、渕内、前田、佐伯が整理作業員の協力を得ておこなった。
- 6 現場および出土遺物の写真撮影は西嶋、渕内がおこなった。
- 7 本書の図で示す方位記号はすべて真北を示す。
- 8 本書で使用する遺構略号は以下のとおりである。  
SB：堀立柱建物、SC：土坑、SE：溝状遺構、SH：ピット、SL：周溝状遺構
- 9 本調査で出土した木製品の保存処理・樹種同定、鉄製品の保存処理は外部委託によった。
- 10 本調査における出土遺物、実測図、撮影写真などはすべて宮崎市教育委員会で保管している。これら資料の有効な活用を望む。

## 本文目次

第Ⅰ章 遺跡周辺の環境	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第Ⅱ章 調査に至る経緯と調査の経過	
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査の経過	3
第Ⅲ章 調査の成果	
第1節 調査成果の概要	5
第2節 弥生時代の遺構と遺物	5
第3節 その他の遺構と遺物	53
第Ⅳ章まとめ	
第1節 周溝状遺構について	67
第2節 弥生時代中須遺跡の性格	69

## 挿図目次

第1図 周辺の遺跡	2
第2図 調査区位置図	4
第3図 中須遺跡遺構配置図	6
第4図 溝状遺構配置図	8
第5図 溝状遺構土層断面図	9
第6図 溝状遺構1遺物出土状況図	10
第7図 溝状遺構1柄付石斧出土状況図	11
第8図 溝状遺構1出土遺物実測図①	12
第9図 溝状遺構1出土遺物実測図②	13
第10図 溝状遺構1出土遺物実測図③	14
第11図 溝状遺構1出土遺物実測図④	15
第12図 溝状遺構1出土遺物実測図⑤	16
第13図 溝状遺構1出土遺物実測図⑥	17
第14図 溝状遺構1出土遺物実測図⑦	18
第15図 溝状遺構1出土遺物実測図⑧	19
第16図 溝状遺構1出土遺物実測図⑨	20
第17図 溝状遺構1出土遺物実測図⑩	21
第18図 溝状遺構1出土遺物実測図⑪	22
第19図 溝状遺構2遺物出土状況図	25
第20図 溝状遺構2出土遺物実測図①	26
第21図 溝状遺構2出土遺物実測図②	27
第22図 溝状遺構2出土遺物実測図③	28
第23図 溝状遺構2出土遺物実測図④	29
第24図 溝状遺構3～7出土遺物実測図	31
第25図 周溝状遺構1・2実測図	34
第26図 周溝状遺構1・2出土遺物実測図	35
第27図 周溝状遺構3～5、出土遺物実測図	36
第28図 周溝状遺構6～8実測図	37
第29図 周溝状遺構7・8出土遺物実測図	38
第30図 周溝状遺構9・10実測図	39
第31図 周溝状遺構9出土遺物実測図	40
第32図 周溝状遺構10出土遺物実測図	41
第33図 周溝状遺構11、出土遺物実測図	42
第34図 挖立柱建物1・2実測図	44
第35図 挖立柱建物3実測図	45
第36図 杭列実測図	46
第37図 杭列出土遺物実測図①	47
第38図 杭列出土遺物実測図②	48
第39図 杭列出土遺物実測図③	49
第40図 土坑1～6実測図	51
第41図 土坑2・3出土遺物実測図	52
第42図 溝状遺構5土層断面図、 出土遺物実測図	53
第43図 遺構外出土遺物実測図①	54
第44図 遺構外出土遺物実測図②	55
第45図 遺構外出土遺物実測図③	56
第46図 遺構外出土遺物実測図④	57
第47図 遺構外出土遺物実測図⑤	58

## 表 目 次

第1表 出土土器観察表①	61
第2表 出土土器観察表②	62
第3表 出土土器観察表③	63
第4表 出土土器観察表④	64
第5表 出土石器・鉄器観察表	65
第6表 出土木製品・木材観察表	66

## 図 版 目 次

図版1 調査地遠景	74
図版2 調査区垂直写真	75
図版3 溝状遺構 1 ①	76
図版4 溝状遺構 1 ②	77
図版5 溝状遺構 1 出土木製品・木材	78
図版6 溝状遺構 1 出土木製品①	79
図版7 溝状遺構 1 出土木製品②	80
図版8 溝状遺構 1 出土土器	81
図版9 溝状遺構 2～5	82
図版10 溝状遺構出土遺物	83
図版11 周溝状遺構①	84
図版12 周溝状遺構②	85
図版13 周溝状遺構③	86
図版14 周溝状遺構④	87
図版15 周溝状遺構⑤	88
図版16 周溝状遺構出土遺物	89
図版17 掘立柱建物	90
図版18 杭列	91
図版19 杭列出土木器	92
図版20 土坑①	93
図版21 土坑②	94
図版22 遺構外出土遺物①	95
図版23 遺構外出土遺物②	96

## 第1章 遺跡周辺の環境

### 第1節 地理的環境

中須遺跡は、宮崎市街地北東部の宮崎市阿波岐原町中須ほかに位置する。市街地は、市中心部を流れる大淀川の作用によって形成された沖積地上にあり、海岸沿いには南北に伸びる4本の砂丘列が形成されている。砂丘列は内陸から第1～4砂丘と呼称されており、第1・2砂丘は縄文時代後晩期に、第3・4砂丘は中世以降に形成されたと考えられている。遺跡はこの第1・2砂丘間低地に所在する。また、大淀川河口には第3・4砂丘から伸びる砂嘴が伸びており、その後背地に一つ葉入江が存在している。宮崎市街地には、大淀川のほか市街地北部の丘陵から砂丘列南側を流れ一つ葉入江に注ぐ新別府川や砂丘間低地から流れ出る小河川が複数存在している。遺跡のある第1・2砂丘間低地には低地間を南北に流れる産母川が存在する。

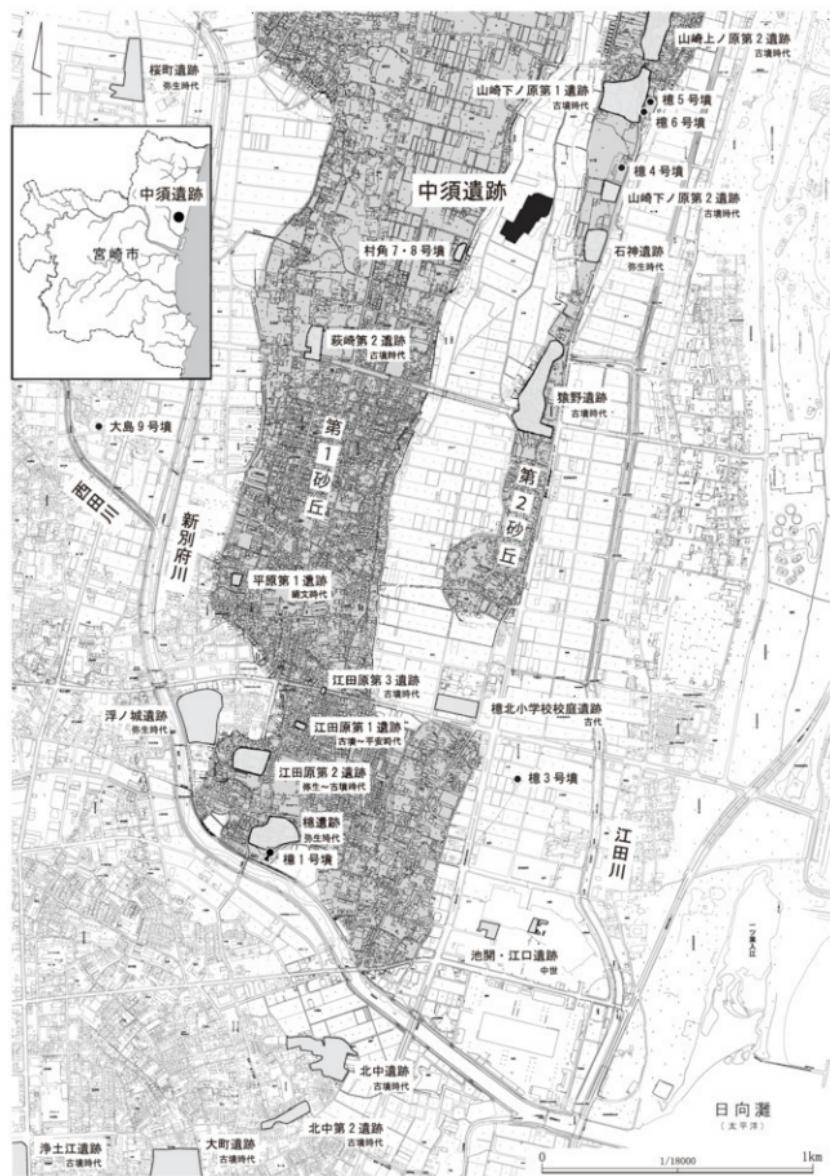
中須遺跡が営まれた弥生時代には、第3・4砂丘列は存在していなかったから、第2砂丘東側が海岸線であり、遺跡の存在する第1・2砂丘間低地は現在の一つ葉入江のような入江状あるいは低湿地のような景観が広がっていたと思われる。現在の地形や調査成果から、中須遺跡は砂丘間低地の中ではやや標高が高く西側の第1砂丘から砂丘間低地に突き出た微高地状地形であったと判断できる。したがって、中須遺跡は海岸線をなす砂丘の後背湿地あるいは入江に近いような低地にあり、周囲からわずかに高まった位置に存在していたということになる。

### 第2節 歴史的環境

中須遺跡が所在する砂丘近辺には、多くの埋蔵文化財が確認されている。調査事例自体は多くないが、そのうち代表的な遺跡について触れておきたい。

周辺で明確な縄文時代遺跡は確認されていないが、第1砂丘列の平原遺跡では市来式土器の出土が伝えられる。弥生時代には遺跡の数が増加し、板付式土器が出土した櫛遺跡、中期の甕棺墓や鉄製品が出土した石神遺跡などがあり、当地に北部九州の弥生文化が及んでいたことを示している。古墳時代になると、第1砂丘の南端に全長52mで木槧を埋葬施設にもつ、前期の櫛1号墳以降、砂丘や砂丘間低地に転々と古墳が築造される。時期が明らかでないものが多いが、村角町で帶金式甲冑が出土していることや、第2砂丘上の山崎上ノ原、下ノ原遺跡で古墳時代中期末から終末期にかけての円墳や土坑墓が確認されていて、古墳時代を通して古墳が連綿と築造されているものと考えられる。集落には、布留式の特徴を持つ甕が出土した猿野遺跡や、移動式カマド、鉄滓、特殊扁壺、韓式系土器など特徴的な遺物が出土した古墳時代中期末から終末期にかけての山崎上ノ原遺跡第1・2遺跡などがある。

古代以降の当地域周辺の様相は明らかでない部分が多いが、周辺は『延喜式』記載の江田（石田）駅推定地であるし、式内社である江田神社や、上記猿野遺跡から出土した古代瓦の存在から、古代において当地周辺が重要な地域であったと考えられる。中世には、第2・3砂丘間の微高地上に、15世紀を中心とする居館跡の池閣・江口遺跡が確認されている。近世については、いくつかの散布地が知られているのみでその様相は不明である。現在では周辺も宅地化や商業施設が多く建ち並び、宮崎市内において近年開発が盛んな地域の一つとなっている。



第1図 周辺の遺跡 (S=1/18000)

## 第II章 調査に至る経緯と調査の経過

### 第1節 調査に至る経緯

平成21年8月10日、宮崎市阿波岐原町中須588ほかについて、河川改修事業にともなう文化財の有無についての照会がなされた。当該地は、周辺に「石神遺跡」や「猿野遺跡」など多くの周知の埋蔵文化財泡蔵地が所在している地域であることから、平成22年10月4日から平成22年10月14日にかけて埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施した。その結果、調査地内において溝状遺構などが確認され、それらにともなって弥生土器をはじめとする遺物が確認された。

そのため、事業者と埋蔵文化財の取り扱いに関する協議を重ねたが、工法等との兼ね合いから、遺跡の破壊を避けることは残念ながら不可能であった。したがって、河川改修事業にともない遺構面まで掘削の及ぶ範囲である約2022m<sup>2</sup>を対象として本発掘調査を実施することになった。現地での発掘調査は、平成23年4月25日から平成23年7月29日までの期間実施した。現地調査終了後の整理作業については平成24年6月11日から平成24年7月20日及び平成25年5月8日から平成25年6月27日までの期間実施した。

### 第2節 調査の経過

調査は、まず重機による表土除去作業から実施した。調査地周辺は調査前において水田や畠地として利用されていたことから、表土はこれらの耕作などにともなう暗褐色の土層であった。その下層からは、一部分において暗褐色、黒褐色の遺物包含層が確認された。調査区西側においては、地山検出高が高く、表土直下で地山層である砂層が検出される状況であり、ごくわずかに地山層が削平されていることが確認された。

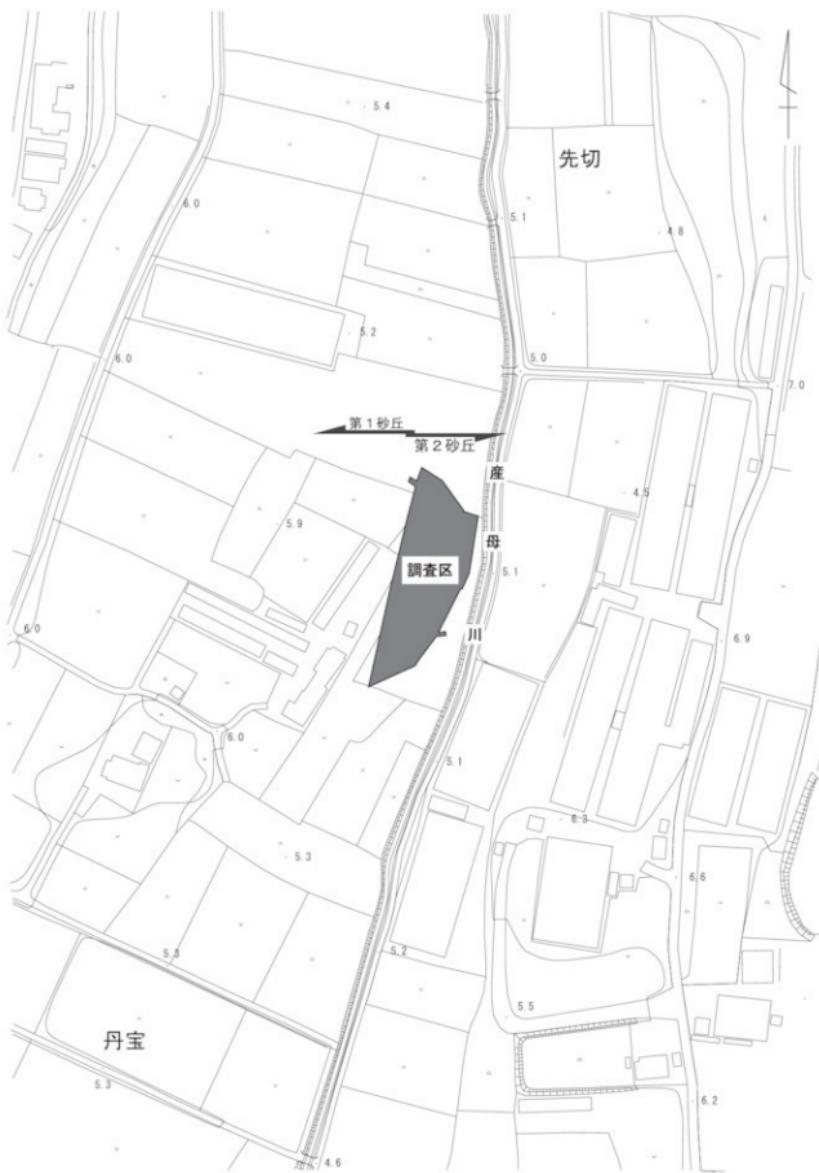
表土除去後には、発掘作業員による包含層掘削作業と、調査区内を精査しての遺構検出作業を実施した結果、溝状遺構、周溝状遺構、杭列、土坑、ピットが確認された。また、遺物包含層からは、弥生土器をはじめとする多くの弥生時代遺物が出土した。

遺構検出作業の終了した遺構から埋土の掘削を開始し、掘削の進んだ遺構から順次記録作業を実施した。記録作業は、調査員の手測りによる実測作業、トータルステーションを用いた遺構実測作業のほか、35mmフィルムカメラを主体とし、中判フィルムカメラ、デジタルカメラを用いた写真撮影作業によりおこなった。加えて、調査地周辺の状況や、調査区全体の様子を記録するために空中写真撮影もおこなった。

また、調査地の測量、遺構実測作業にあたっては、近隣に所在する座標既知点より、調査地内に任意で設定した杭への座標移動作業も実施した。

調査後半には、事業対象地内で発掘調査の対象外とされていた地区についても埋蔵文化財の存在することが予測されたことから、事業者との協議の後、改めて当該地で試掘調査を実施し、埋蔵文化財の存在が確認された箇所について調査区の拡張をおこなった。今回調査区では、多くの木製品が出土したが、特に石斧が着装された木柄は脆弱であったことやその重要性を鑑みて、緊急に保存処理作業をおこなった。

## 第2節 調査の経過



第2図 調査区位置図 (S=1:2000)

## 第Ⅲ章 調査の成果

### 第1節 調査成果の概要

調査は、河川改修にともなって、遺構に影響が及ぼされる部分に調査区を設定しておこなった（第2図）。調査面積は約2022平方メートルである。調査の結果、弥生時代中期を主体とする遺構と、それにもなう遺物が確認された。

遺跡は第1章で述べたとおり、第1砂丘と第2砂丘の間にある砂丘間低地に所在している。調査の結果、調査地の旧地形はこの砂丘間低地の中にあって標高がやや高くなっている箇所であり、調査区内では西側を最高所として南北と東隣を流れる産母川に向かって緩やかに下っている状況であった。このことと現況での周辺の標高を合わせて考えると、調査地は砂丘間低地の中にあって西側の第1砂丘から突き出したような微高地状の地形の先端付近であったものと考えることができる。

確認された遺構は、溝状遺構6条、周溝状遺構11基、掘立柱建物3棟、杭列1基、土坑6基、ピットである（第3図）。遺構は微高地上の平坦面を中心に分布しており、後述のとおり各遺構には計画的な配置の様子をうかがうことができた。これらの遺構や包含層などから多くの遺物が出土した。遺物は弥生土器を中心で、そのほかに石斧、磨製石鏽などの石製品、木製品や加工痕のある木材、鉄製品があり、柄付石斧や本県で初例となる鋸造鉄斧片とみられる鉄製品など注目すべき遺物も確認されている。

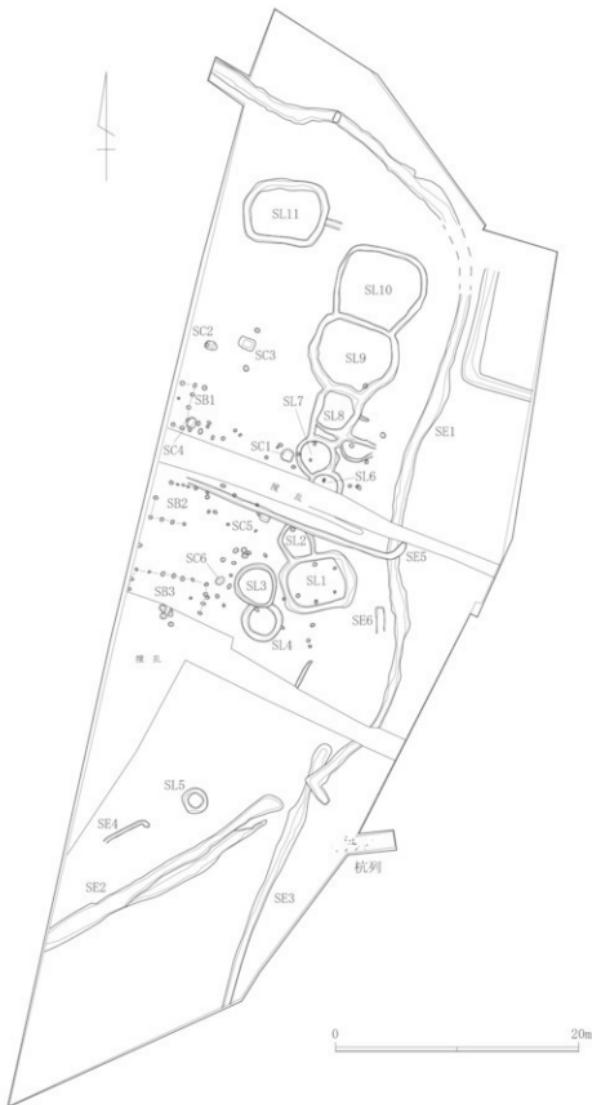
### 第2節 弥生時代の遺構と遺物

#### 溝状遺構

**溝状遺構の配置（第4図）** 確認された6条の溝状遺構のうち、弥生時代に属するものは5条であった。そのうち最も主要なものが、溝状遺構1と2である。2本の溝状遺構は、調査区の中の微高地平坦面上から緩やかに下る傾斜面中に、微高地平坦面を囲むようにして掘削されていた。他の遺構が主に微高地平坦面上に存在すること合わせて考えれば、この溝状遺構1・2は土地の区画を目的として掘削されたものであると判断できる。溝底面の標高は、全体的に同じレベルで約4.4mである。また、溝状遺構1・2は調査区南東側において途切れている部分が存在する。この部分は、溝状遺構1・2によって区画された内と外をつなぐ通路のような場所であったものと考えられる。加えて、この通路の先に杭列が配置されていることは、この通路部分と杭列の役割を考える上で注目できる。

その他の溝状遺構3～6については、他遺構との配置や、地形との関係など積極的に取り上げられる状況を見出せず、また残存状況の悪さなどと相俟ってその配置の意味について述べることができる特徴をつかむことは現段階においてできなかった。

**溝状遺構1（第4、5～18図）** 調査区北側から東西方向に伸びた後、南に向きを変えてやや蛇行しながら伸び、調査区南東側で先端を東側に屈曲させて途切れている。上述のように、溝状遺構2と合わせて土地区画の目的をもって掘削されたものと考えられる。溝状遺構の北端は



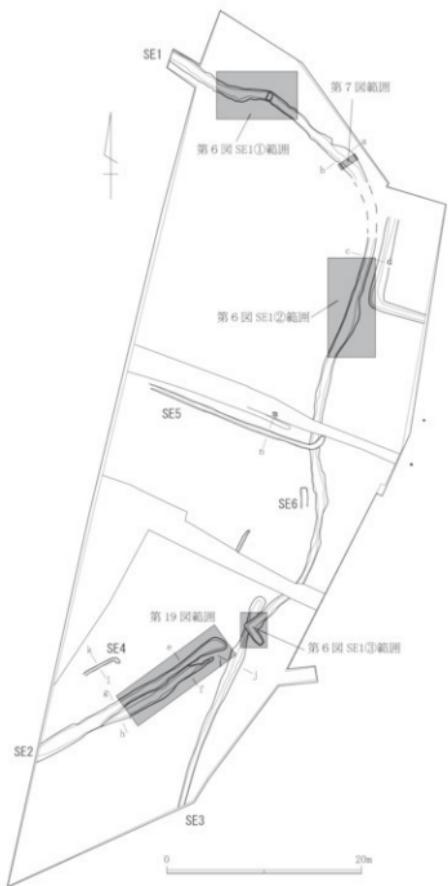
第3図 中須遺跡遺構配置図 (S=1/400)

調査区外に及んでいるため、その全長を知ることはできない。溝の断面形態は、基本的には底面が平坦な逆台形である。しかし、断面図のように、溝の肩口のいずれか一方は壁の途中から緩やかに外方に開きながら立ち上がる形態となっている。肩口が緩やかになっている箇所は、いずれも旧地形で標高の低い側であることや、周辺には溝埋土が流れ出たように薄く堆積していることが観察できる。これらの観察結果からは、溝状遺構1はかつて水が溜まるような状況にあり、溢れた水が標高の低い側に流れていたことがうかがえる。溝肩口が緩やかに湾曲している状況は、この水の作用で標高の低い側の肩口が削られた結果と考えられる。

この溝状遺構で最も注目すべきは、調査区北側付近で確認された状況である。溝状遺構の調査区北側付近では溝がわずかに北に屈曲する箇所がある。その屈曲の頂点部分では地山の一部が幅50cmほど堀り残されており、ちょうど溝を堰き止めたような状態になっている。この堰状の掘り残し部分の西側では、第6図のように多くの木材が集中して出土する状況であったことから、この堰状の掘り残しは水を堰き止めて、そこに木材を貯蔵しておく目的でおこなわれたものと考えられる。木材の集中する部分は他の部分よりもやや深く掘られているが、これは水を多く溜めるための造作と思われる。調査時においても湧水や雨水がこの部分に溜まり、満水になると標高の低い側に水が流れ出る状況が確認された（第6図写真）。他の部分でも木材は出土するが、ここほど集中する状況は認められなかった。

この貯木を目的としたと思われる施設より東に約10m付近で、柄付の石斧が出土した（第7図）。出土状況は溝状遺構の中央付近に、溝の底面からやや浮いた状態で、刃部側を上に向かた状況であった。石斧、柄ともにほぼ完形であることから廃棄されたものとは考えにくく、何らかの理由で人為的にこの場所に置かれていた可能性も考える必要がある。

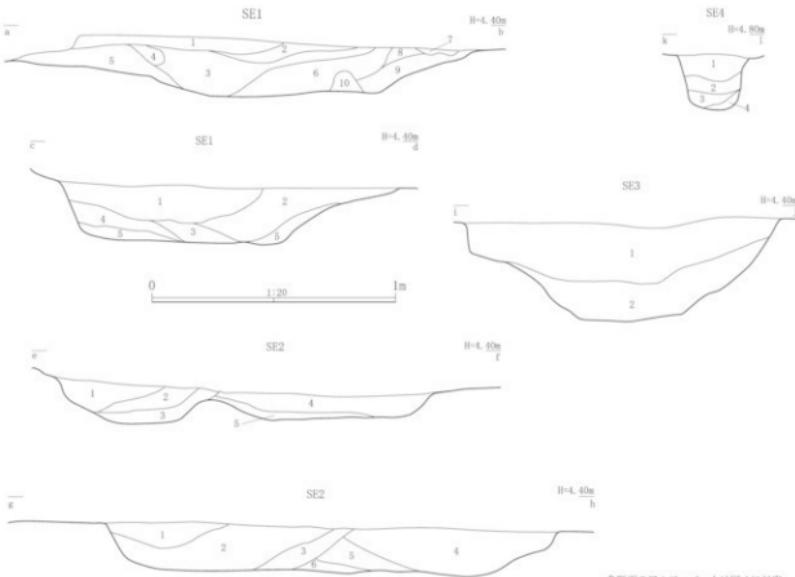
1～12は甕の口縁部から胴部にかけての破片である。1～7は東北部九州系の甕である。外方に屈曲する口縁部形態で、口縁端部の形態はおおむね「コ」の字形である。1、2、4、5、7の口縁部端面中央は、仕上げのヨコナデによりわずかに窪んでいる。7は口縁部がやや長く、屈曲が弱いなど他より若干後出する特徴を持つ。口縁内側の形態は、1、2が緩やかに湾曲しているのに対して、4はわずかに突出した形状である。器壁は全体に厚めだが、4はわずかに薄い。胎土から、1～5、7は宮崎平野部産、6は東北部九州産と考えられる。8は大きく外方に開く形態で、端部付近は上方に搬ね上げられている。端部は丸みを持つ形態である。胴部に最大径をもつ器形で、外面はハケ、内面はミガキによって丁寧に調整がおこなわれている。形態や調整、胎土から、伊予産の搬入土器であると考えられる。9～11は下城式の甕で、いずれも胴部に刻目突帯が貼り付けられている。口縁部付近がそれぞれ異なった特徴を持っており、9は口縁端部が素口縁で、刻目は認められない。10は口縁端部が突帯状のわずかな突出があり、そこに刻目が施されている。11は口縁端部にわずかな突出が認められるが、刻目は施されていない。器形は9がわずかに丸みを帯びた形態で古相を示し、10、11は、下方に向かって幅を狭めながらまっすぐに伸びる形態である。9の刻目突帯の上辺と、11の刻目突帯内面には指オサエ痕跡が明瞭に観察できる。胎土から、豊後産の搬入品と考えられる。12は山ノ口II式の甕である。短く、外方に屈曲する口縁部形態で、胴部に3条の突帯が貼り付けられている。胴部上位には穿孔が認められる。胎土から、大隅産の搬入品と考えられる。13～23は壺の口縁部から胴部にかけての破片である。13～15は須玖系の広口壺である。13、



第4図 溝状遺構配置図 (S=1/500)

15は大きく外に向かって開く口縁部形態で、口縁端部はやや肥厚している。端面中央は仕上げのナデ調整によってわずかに産んでいる。13の頸部と胴部の境界は屈曲がやや緩やかになっている。14も口縁部が外に向かって開くが、13、15と比べて直立気味である。口縁端部はコの字形で端面は平坦である。調整は、14と15の頸部から口縁部外面には縦方向の粗いミガキが施されている。胎土からいずれも宮崎平野部産と判断できる。16は山ノ口式の壺である。口縁部は粘土貼り付けで形成されており、下方に向かって下がる形態である。口縁部上面は平坦で、線刻により浮文表現がなされている。頸部から胴部にかけての屈曲が「く」の字に近い形態で、S字形を特徴とする山ノ口式とやや異なる特徴を持ち、下城式壺の形態に影響を受けたものと思われる。胎土から宮崎平野部産と判断できる。17は須玖系の広口壺である。外に向かって開く口縁部形態で、ややいびつである。口縁端部内面には粘土が貼りつけられて突出部が形成され、鋤先口縁状である。口縁端面には、円形工具による刺突文が施されている。胎土から豊後産の搬入品と考えられる。

18は下城式の壺である。口縁部内面に粘土が貼り付けられ、突出部が形成されている。口縁部上面はおおむね水平で、円形浮文が認められる。口縁端面には半裁竹管文が認められる。胎土から豊後産と考えられる。19、20、22、23は小川原式の壺である。19の口縁端部内面には粘土が貼り付けられ突出部が形成されている。口縁部上面はおおむね平坦で、円形浮文が認められる。口縁端面は幅広で、上下2段の刺突文が施されている。20は肩部の破片で、勾玉状の浮文が認められる。胎土からいずれも豊後産と考えられる。22、23は胴部である。22は丸みの強い器形で肩部付近に3条の突帯が認められる。23はやや縦長の器形で、胴部中位に突帯が認められる。また、上部に浮文が認められるが欠損のため形態は判然としない。両



各断面のアルファベットは図4に対応

## &lt;上層柱記&gt;

## 構造造構1(a-b)

- 1 : 黄灰色土 (Hue2.5Y4/1) 繊り強い。鉄分を含む。
- 2 : 黒色土 (Hue2.5Y2/1) 繊り強い。鉄分を含む。
- 3 : 黑褐色土 (Hue2.5Y2/1) 繊り強い。鉄分、土器片を含む。
- 4 : 黄灰色土 (Hue2.5Y6/2) 繊り強い。
- 5 : 黄灰色土 (Hue2.5Y4/1) 繊り強い。青砂に上層が混じった觸。
- 6 : 黑色土 (Hue2.5Y2/3) 上層と同質土で、部分的に8~10層が混じる。
- 7 : 黑褐色土 (Hue2.5Y2/1) 繊り弱い。粘性やや高。
- 8 : 黄灰色土 (Hue2.5Y6/2) やや粘性有。鉄分を含む。
- 9 : 灰黃色土 (Hue2.5Y6/2) 上層とはほぼ同質土。
- 10 : 灰黃色土 (Hue2.5Y6/2) 上層とはほぼ同質土。

## 構造造構1(c-d)

- 1 : 黄灰色土 (Hue2.5Y2/1) 繊り有。粘性有。黒色の粘土質の砂少量混じる。
- 2 : 黑褐色土 (Hue2.5Y2/1) 繊り弱い。粘性無。青砂ブロックが混じる。
- 3 : 黑褐色土 (Hue2.5Y3/1) 繊り無。粘性無。
- 4 : 黑褐色土 (Hue2.5Y3/1) 繊り無。粘性弱い。2とほぼ同質でやや明るい。
- 5 : 黑褐色土 (Hue2.5Y3/1) 繊り無。粘性無。地山黄土に埋褐色土が混じる。

## 構造造構2(e-f)

- 1 : 黄灰色土 (Hue2.5Y4/1) 繊り有。粘性有。灰白色、黒褐色土ブロック混じる。
- 2 : 黑褐色土 (Hue2.5Y3/1) 繊り有。粘性有。砂混じりの粘質土。
- 3 : 黑褐色土 (Hue2.5Y3/1) 上層とほぼ同質土。若干粘性が高く、色調が暗い。
- 4 : 黑灰色土 (Hue2.5Y4/1) 繊り有。粘性有。
- 5 : 黑灰色土 (Hue2.5Y4/1) 上層とほぼ同質土だが、若干色調が暗い。

## 構造造構2(g-h)

- 1 : 黄灰色土 (Hue2.5Y5/1) 繊り弱い。砂質土に粘質土が混じる。
- 2 : 黑褐色土 (Hue2.5Y3/1) 繊り、粘性有。部分的に鉄分含む。
- 3 : 黑褐色土 (Hue2.5Y3/1) 上層とはほぼ同質土。やや砂質が強い。
- 4 : 黑褐色土 (Hue2.5Y3/1) 上層とはほぼ同質土。2、3より粘性が強い。
- 5 : 灰褐色土 (Hue2.5Y4/1) 繊り有、粘性高い。部分的に黒褐色粘土質含む。
- 6 : 黑褐色土 (Hue2.5Y3/1) 繊り有、粘性高い。

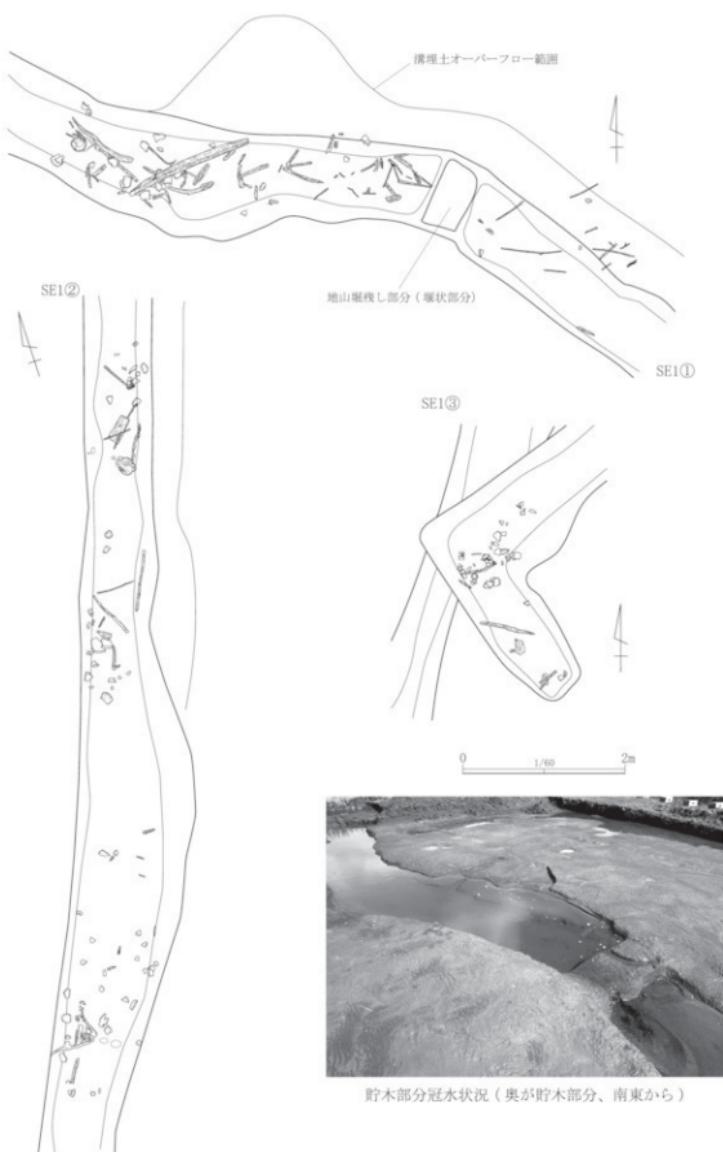
## 構造造構3(i-j)

- 1 : 極灰色土 (Hue2.5Y4/1) 粘性ある砂質土。一部に黒褐色粘土質土を含む。
- 2 : 極灰色土 (Hue2.5Y4/1) 粘性ある砂質土。一部に青砂ブロックを含む。

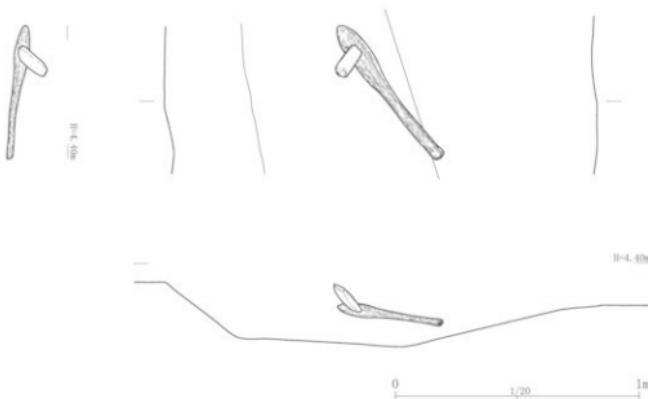
## 構造造構4(k-l)

- 1 : 極灰色土 (Hue2.5Y4/1) 繊り弱い。粘性低い。地山ブロックを含む。
- 2 : 灰黄色土 (Hue2.5Y6/2) 繊り弱い。1にある地山土が薄い層状に含まれる。
- 3 : 黄灰色土 (Hue2.5Y5/1) 繊り弱い。2とはほぼ同質土。
- 4 : 黄灰色土 (Hue2.5Y6/2) 繊り弱い。2とはほぼ同質土。

第5図 溝状造構土層断面図 (S=1/20)

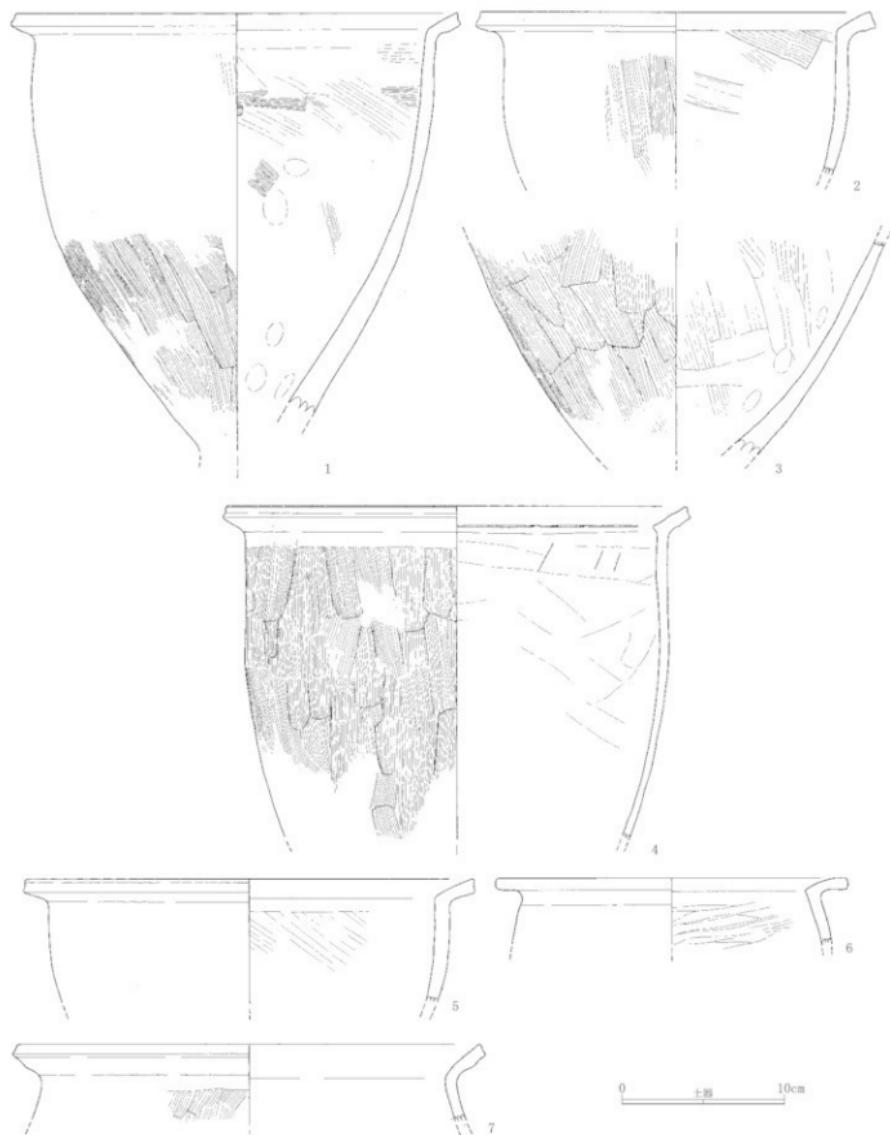


第6図 溝状遺構1遺物出土状況図(部分, S=1/60)

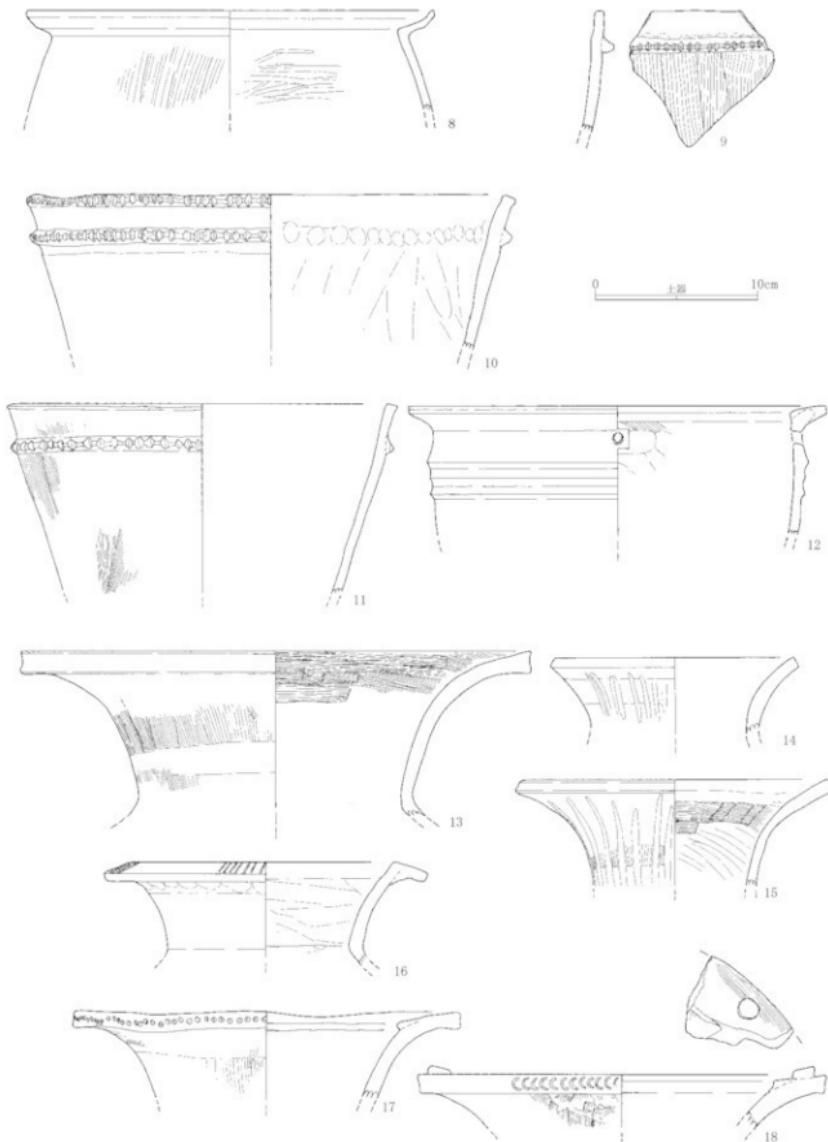


第7図 溝状遺構1柄付石斧出土状況図(S=1/20)

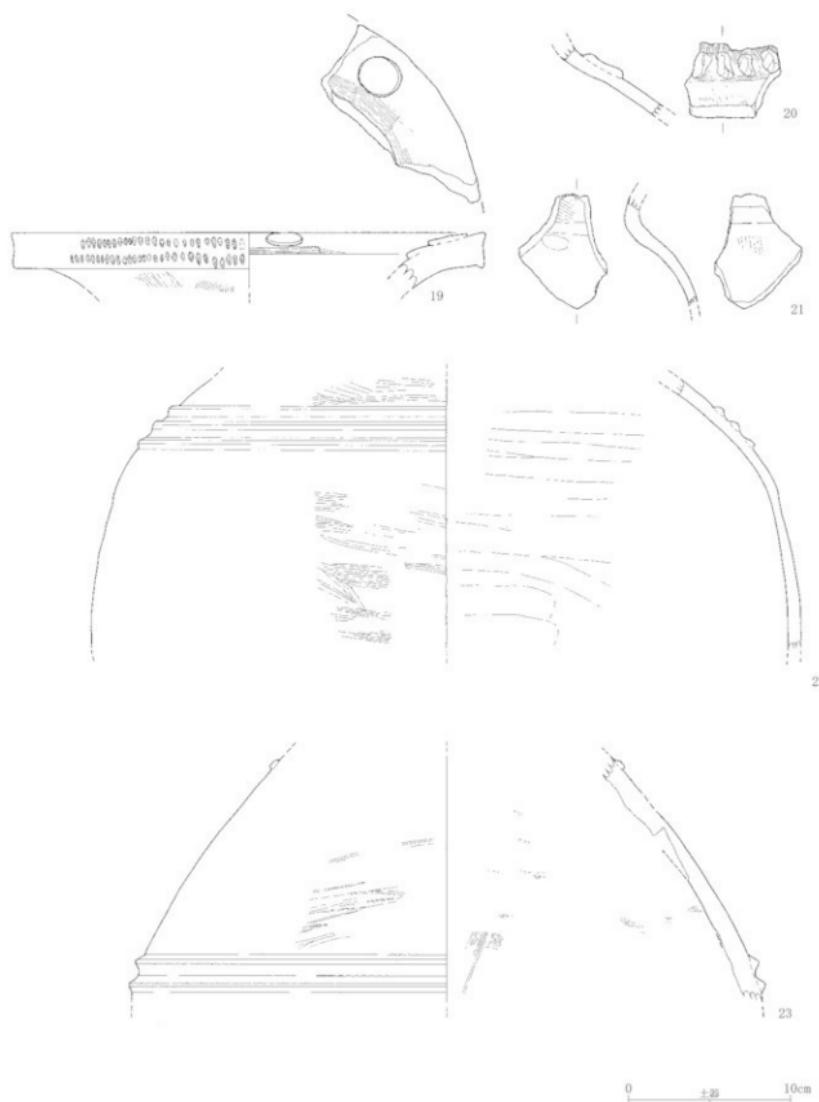
者とも外面はミガキにより調整されている。胎土からいはずれも豊後產と考えられる。21は壺である。小型の器形で口縁部と頸部の境界はゆるく屈曲している。やや暗い色調で、胎土に角閃石が含まれる。系統、産地とも判然としない。24～30、32は甕の底部である。24、30は下城式甕で、底部底面は平坦である。胴部はほぼまっすぐに外方へ向かって立ち上がる形態である。胎土から豊後產と考えられる。25、26は東北部九州系甕である。上げ底状の底部形態で、底面端部の断面形態は、25は丸みを帯びた形態、26は四角形である。胴部は外方に向かってほぼまっすぐに立ち上がる形態であるが、26はわずかに内湾している。調整は25ではハケ主体、26はミガキ主体である。これらの諸特徴や胎土から、25は宮崎平野部產、26は東北部九州產と考えられる。27、28は山ノ口式甕で、中実脚台である。27はやや粗雑なつくりで全体に丸みを帯びた形態である。28は端部が丁寧に整形されている。胎土から27は宮崎平野部產、28は大隅產と考えられる。29は上げ底状の底部形態から東北部九州系にも思われるが、胴部が大きく開く特徴的な形態である。系統は判然としないが、胎土から宮崎平野部產と考えられる。32も系統が判然としない甕である。わずかな上げ底状の底部で、器壁が厚い。宮崎平野部產である。31、33～36は壺底部である。31は小川原式の壺と思われる。底部底面は平坦で胴部は外方に大きく開く形態である。外面はやや粗いミガキによって調整されている。胎土から豊後產と考えられる。33は須玖系の壺と思われる底部である。わずかに上げ底状の底部形態で、わずかに内湾しながら外方に向かって開く胴部形態である。胎土から宮崎平野部產と考えられる。34～36は系統が判然としない。いはずれも底面は平坦で、胴部はそこから大きく開く形態である。35は特に器壁が厚い。胎土から宮崎平野部產の可能性が考えられるが判然としない。37は磨製石鏃である。長三角形で基部がわずかに抉れた形態である。38は敲石である。敲打痕跡は明瞭でない。全体の3分の2ほどが黒く変色している。39は磨石である。上下面とも使用されており、特に下端部付近の使用が顕著である。40は敲石である。上面に顕著な敲打痕跡が認められる。41は敲石である。磨製石斧を転用したもので、基部付近に敲打痕跡



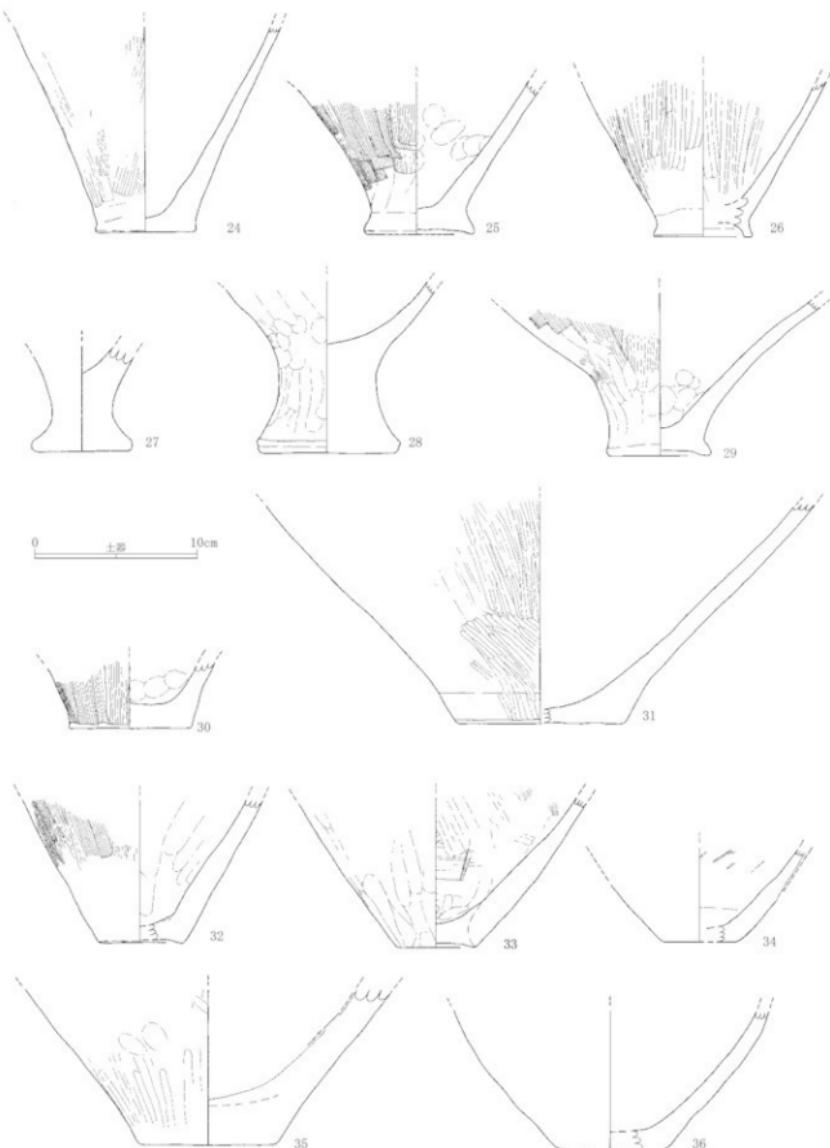
第8図 溝状遺構1出土遺物実測図①(S=1/3)



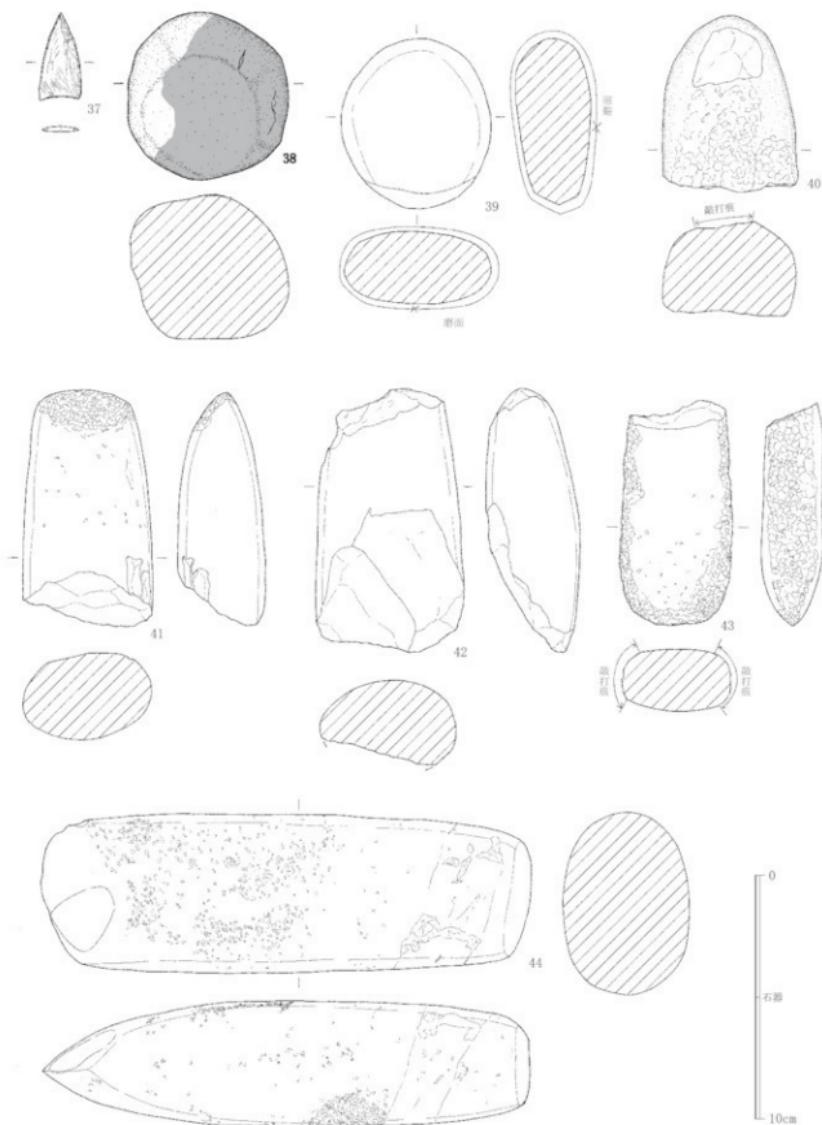
第9図 溝状遺構1出土遺物実測図②(S=1/3)



第10図 溝状遺構1出土遺物実測図③(S=1/3)



第11図 溝状遺構1出土遺物実測図④(S=1/3)

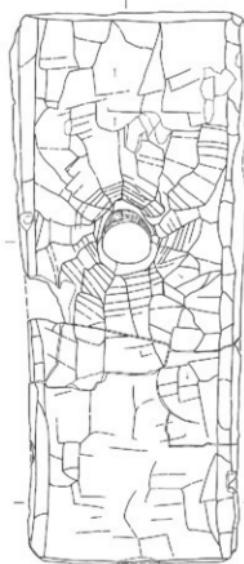


第12図 溝状遺構1出土遺物実測図⑤(S=1/2)

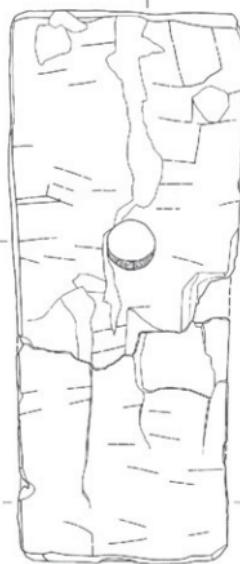


第13図 溝状遺構1出土遺物実測図⑥(S=1/3)

第2節 弥生時代の遺構と遺物



46



47

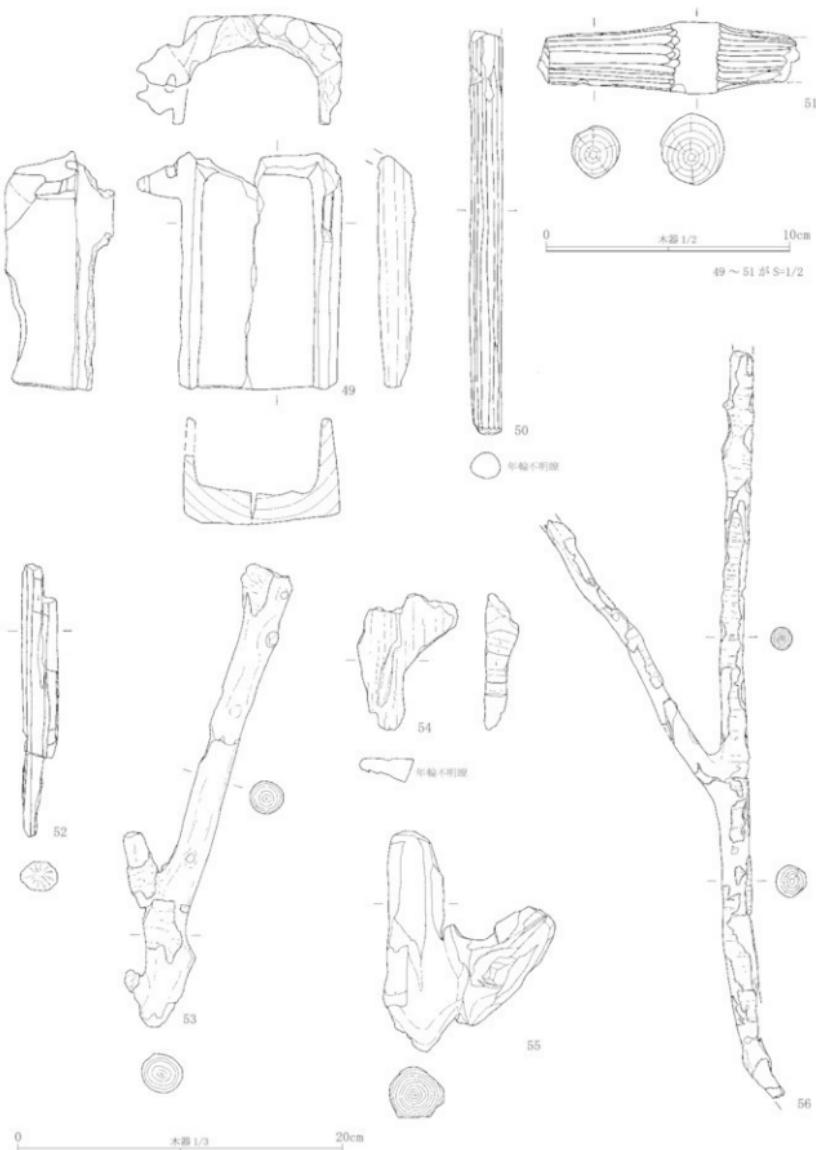


48 のみ S=1/4



48

第14図 溝状遺構1出土遺物実測図⑦(S=1/4, 1/3)



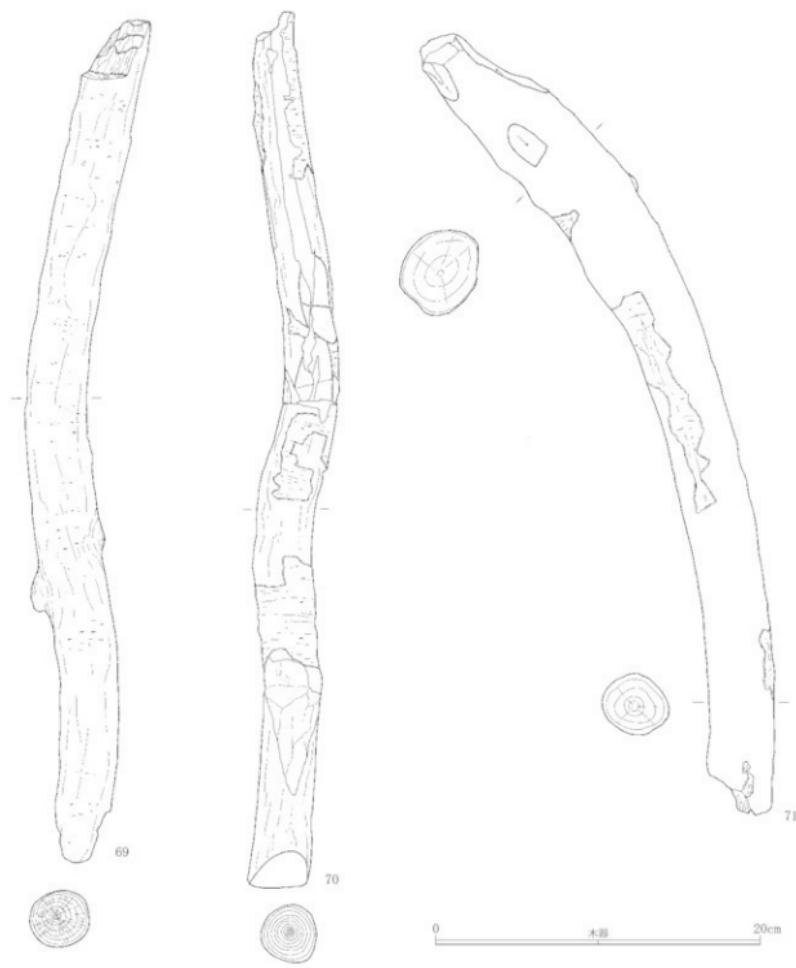
第 15 図 溝状構造 1 出土遺物実測図⑧(S=1/3, 1/2)



第16図 溝状遺構1出土遺物実測図⑨(S=1/3, 1/7)



第17図 溝状遺構1出土遺物実測図⑩(S=1/3)

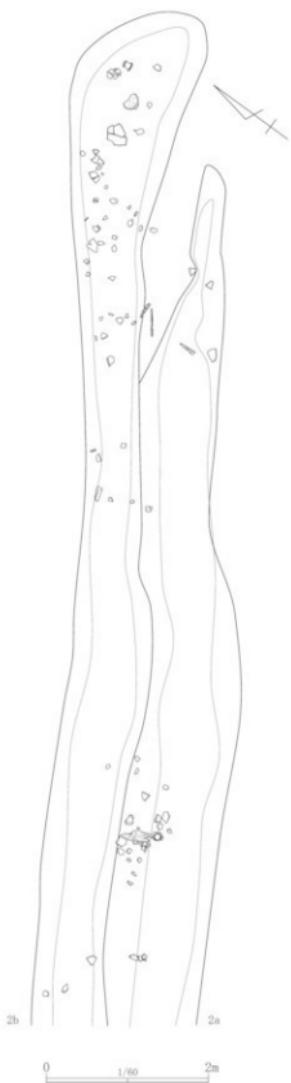


第18図 溝状遺構1出土遺物実測図⑪(S=1/3)

が顕著である。刃部側の状況から、刃部折損後に敲石に転用されたものと思われる。42は磨製石斧である。刃部側の剥離は、そのありようから使用時の衝撃によるものと思われ、この欠損により廃棄されたものと考えられる。基部付近の折損は何に起因するものか判然としない。43は敲石である。磨かれた面と敲打痕跡の切り合い関係から、敲打痕跡は研磨後のものと判断できる。磨製石斧が基部折損のため、転用されたものと考えられる。44は磨製石斧である。木柄に取り付けられたまま出土した。完形で、全体が平滑に仕上げられており精美な印象を受ける。刃部は下辺側の磨り減りが多く、使用の際には刃部下辺側が主に対象物に接触していたものと思われる。また、刃部には使用により薄く剥離した痕跡が認められるが、その部分も再研磨されて平滑に整えられている。柄にはまっていた部分には、有機質のような付着物が認められる。柄の木質が接着し剥離したものか、着柄時の固定のために何らかの有機物が用いられたものか判然としない。45は44が装着されたままの状態で出土した柄である。ほぼ完形であるが裏面側の炭化が著しく、その影響で一部欠損している部分がある。直柄で、平面形態は握り部から頭部に向かって徐々に幅が広がり装着孔付近で幅が最大となり、頭部先端へ向けて幅が再び狭くなる形態である。側面形態は握り部から頭部先端まで徐々に幅が広がる形態で、拡張部は握り部の柄裏面側にのみ形成されている。これは柄の裏面をL字形にカットして作り出されたもので、形成されるくびれの段差も小さいものである。断面形態は装着孔付近で不整円形、握り部ではおむね円形である。加工は丁寧で、全体的に平滑に仕上げられている。握り部側の端部も、細かく調整がなされている状況を看取できる。装着孔は不整円形で、前面側から後面に向けて徐々に径が小さくなっている。補宜田氏による分類のII B類からII C類の中間的な形態的特徴を持つ（補宜田 1999）。装着孔には石斧が装着されたままで出土した。石斧と装着孔内壁は、石斧の上下では密着しており、左右ではわずかに隙間がある。装着孔周囲の木目には、石斧の装着時あるいは使用時に加わった力によると思われる木目の変形が認められる。石斧の装着は、孔に石斧本体を挿入することでおこなわれている。石斧と柄を固定するための有機質などの縛縛はおこなわれていない。装着孔の径より、石斧刃部側の径が大きいことから、使用の衝撃によって石斧がより強く柄に嵌め込まれることになるため、縛縛などの固定は必要なかったものと考えられる。46は木鎌である。直柄の平鎌で幅の狭い形態である。平面形態はおむね長方形で、頭部側よりも刃部側の幅が若干狭くなっている。柄孔部分は後面側に隆起部があるが、舟形でなく周囲から次第に盛り上がるような形態である。柄孔は円形で、内面にはノミ状の工具によると見られる加工痕跡が認められる。柄の取り付け角度は身に対して鋭角である。身は全面に手斧状工具による細かな調整痕跡が認められる（図版7）。身前面の柄孔より刃部側に、身が湾曲している部分が存在するが、これは埋没後の変形によるものと思われる。47は不明木製品である。上端に円形の孔が2箇所に認められる。泥除け状の製品である可能性もあるが判然としない。片面の炭化が顕著である。48は木柄である。接合により完形となる。上端から下端に向かって徐々に径が細くなっている。上端は丁寧に整形されている。柄の中ほどに円形の孔が認められるが、人為的なものか埋没後の草根の嵌入などによるものか判然としない。49は不明木製品である。木材を削り抜くことで製作されており、アカ取りに類似した形態をしている。ただし、長さが約15cmと小型であることから、アカ取りとは積極的に断定できない。また、図上、左側辺には小さな突起状部分が存在する。欠損してい

るために突起部分の全体形を知ることはできないが、細かく湾曲する形態や孔の存在から、装飾的な意味合いがあるものと考えられる。右側辺側には現存しないが、突起部分が折損した痕跡が認められ、本来左右一对の装飾的な突起部分が存在していたことがわかる。50は棒状の製品である。径が細く、全面を工具で丁寧に調整されており、平滑に仕上げられている。片側が欠損していて全長を知ることができない。残存する端部も調整が施されて平滑に仕上げられている。用途などは不明である。51、52、54、55は不明木製品である。51は断面円形の短い木材を素材とし、左右とも細かな調整により、中心から左右両端に向かって細くなるように仕上げられている。右先端部を欠損しているが、おそらく左右対称の形態であったと考えられる。用途は不明であるが、木材などをつなぐ連結部材などが想定される。52は全体に調整工具痕跡が認められる。欠損により全体形は不明である。54は「く」の形で、右辺に顕著な工具痕跡が認められる。また、端部のみ炭化が著しい。55は二叉状の木製品である。先端部分の炭化が顕著である。用途は明確ではないが、二叉状部分のうち右側に突出する側の上辺には凹字形の切り欠きが認められ、木材などを組み合わせる、あるいは紐などを緊縛するなどの用途があった可能性がある。56は二叉状の木材である。全体に樹皮が残存している。自在鉤などの木製品を製作するための素材であろうか。57は丸太状の木材である。上下面、側面の全面に手斧状工具によるものと見られる調整痕跡が認められる。建築部材の一種である可能性もあるが、それにしては短く判断としない。58、59、60は木杭である。59は先端部の破片で、細かな調整により先端部が尖らされている。60も先端部のみを加工して作られた杭であるが、調整の単位が59より大きい。また、工具によって加工された部分以外は樹皮がそのまま残されている状態である。61は全長が1.5mもの大型の部材である。みかん割によって製作された部材で、手斧状工具による調整痕跡が確認できる。ほぼ完形で、下端部は細く尖った形態であることから木杭と思われるが、建築部材の一種である可能性もある。62、64、67は木杭、もしくは木杭の可能性があるものである。62は約4分割された木材の先端部を手斧状工具によって加工して杭としている。64は半裁された木材の先端部が加工され、尖った形状である。67はみかん割材で61と同様の形態である。所々に手斧状工具による調整痕跡が認められる。68は不明木製品である。木材の節付近が用いられており、木匙のような形態をしているが明確でない。持ち手に当たる部分は四面が調整されており、断面が略長方形状である。また、端部付近のみ炭化している。69～71は加工痕のある木材である。いずれも、端部に切断にともなう工具痕跡が残されている。70は下端が尖った形態であり、杭であった可能性もある。71は形状から斧の柄などに使用するための未製品である可能性も考慮される。

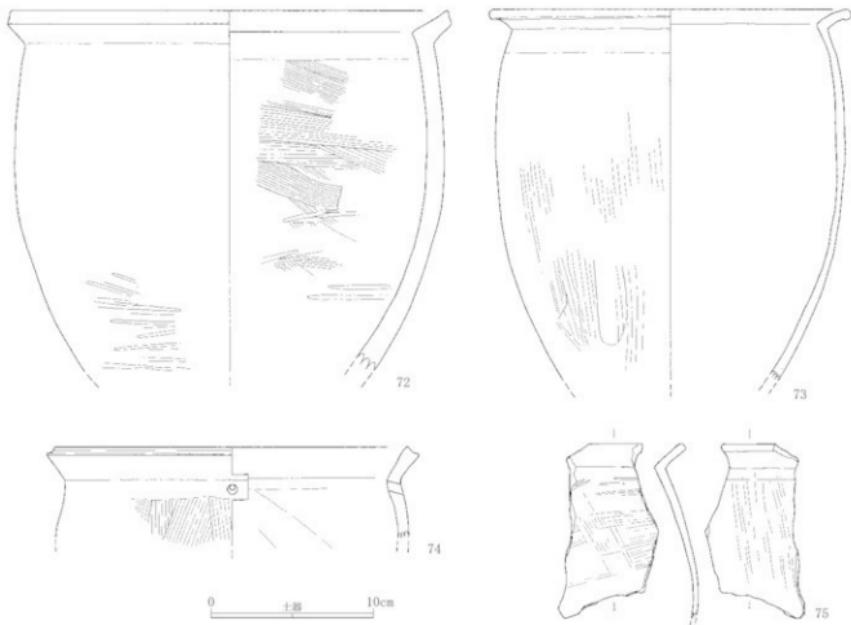
**溝状遺構2**（第4、5、19～23図） 調査区南西から溝状遺構1先端に向かって北東方向に伸びている。調査の結果、本溝状遺構は、1度掘り直されていることが土層の観察から明らかとなった。2本の溝状遺構として捉えるべきかも知れないが、土地を区画するという同一の目的で掘り直されたものであることから一括して溝状遺構2として扱い、掘り直し前を溝状遺構2a、掘り直し後を溝状遺構2bとして報告する。溝状遺構2bは、先端部がやや幅を広げながらわずかに東側に屈曲して途切れしており、溝状遺構1先端との間は約2.5mの間隔がある。もう一方の端部は調査区外に及んでおり、溝の全長を知ることはできない。溝の幅は最も広い部



第19図 溝状遺構2遺物出土状況図(部分, S=1/60)

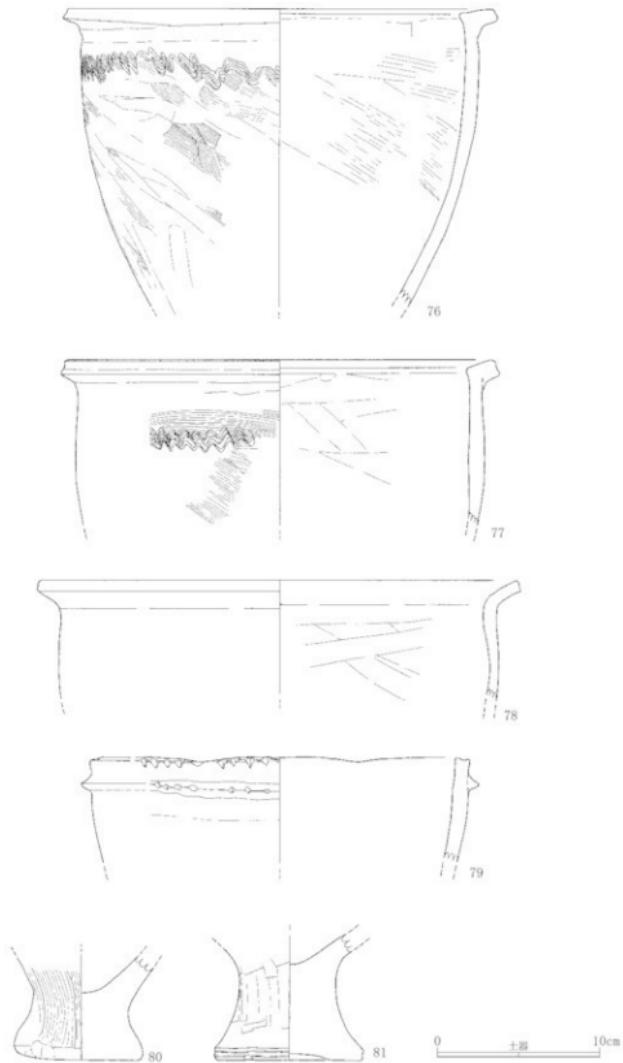
分で約1.7m、狭い部分で約0.7m、深さは約15.0cmである。断面形態は浅いU字形ないし逆台形となっている。溝状遺構2aは溝状遺構1側の先端部から約13.0mが残存している。先端は幅を減じながら途切れています。この先端と溝状遺構1先端との間は約4.4mの間隔がある。溝の一辺を溝状遺構2bに切られているため、幅は知れない。深さは約10.0cmで断面形態は浅い皿状ないし椀状となっている。

72～79は甕口縁部付近の破片である。72は山ノ口II式の甕である。屈曲が浅くやや上方に向かって開く口縁部形態で、胴部中位付近の径が最大となる。胎土から宮崎平野部産と考えられる。73、75は豊前系の甕である。器壁が薄い。口縁部形態は「く」の字形に近いが、73はやや湾曲し口縁端部がやや肥厚して丸みがある。75は直線的である。いずれも胴部中位付近の径が最大となる。外面の調整は、ミガキが施されている。胎土から豊前産と考えられる。74は東北部九州系の甕である。ゆるく屈曲して立ち上がる口縁部形態で、胴部上位には穿孔が認められる。胎土から宮崎平野部産と考えられる。76、77は山ノ口I式の甕である。短く外方に屈曲する口縁部形態で、口縁内面はわずかに突出している。胴部上位に櫛描波状文が描かれている。わずかに丸みを帯びた器形である。胎土から宮崎平野部産と考えられる。78は東北部九州系の甕である。ゆるい「く」の字形の口縁部形態である。胎土から宮崎平野部産と考えられる。79は下城式甕である。小型でわずかに丸みのある器形である。胴部上位に刻目突帯が貼り付けられており、口縁端部にも刻目が認められる。胎土から豊後産と考えられる。80、81は甕底部片で、中実脚台である。80は入来式あるいは山ノ口式の甕で、全体に粗雑な形態である。81は山ノ口式の甕である。胎土からいずれも宮崎平野部産と考えられる。82～87は壺の口縁部から胴部片である。82は山ノ口式

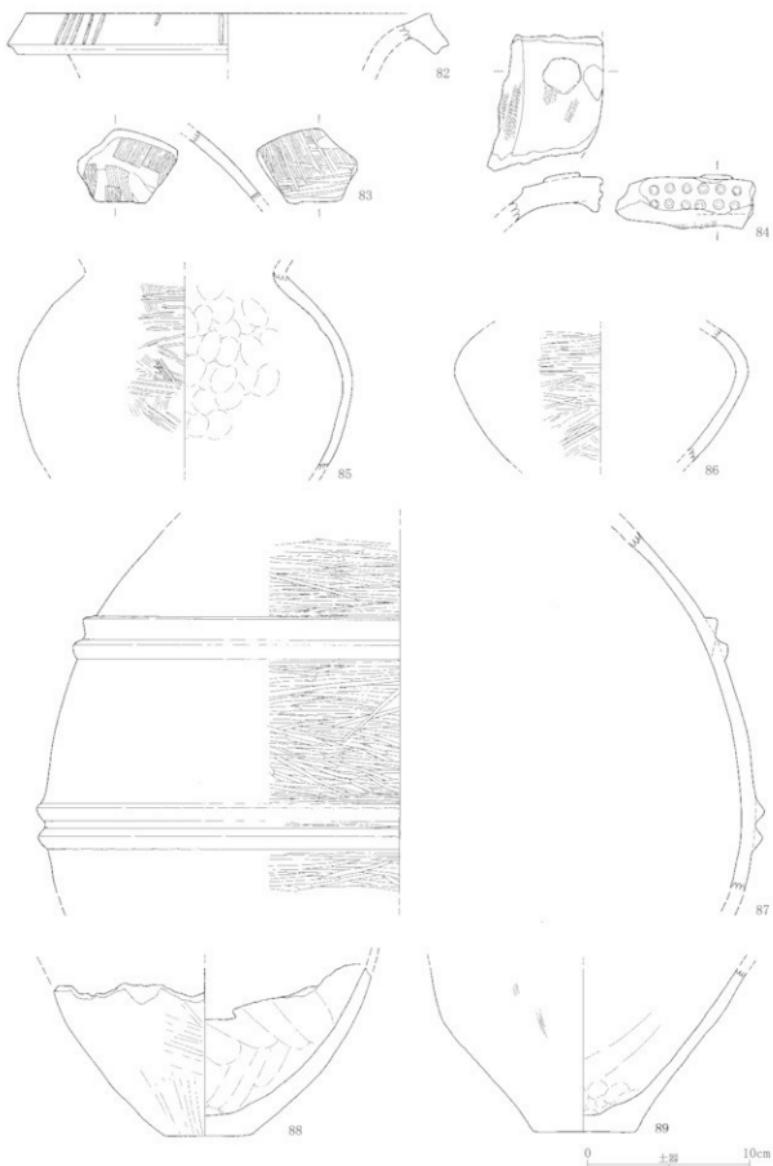


第20図 溝状遺構2出土遺物実測図①(S=1/3)

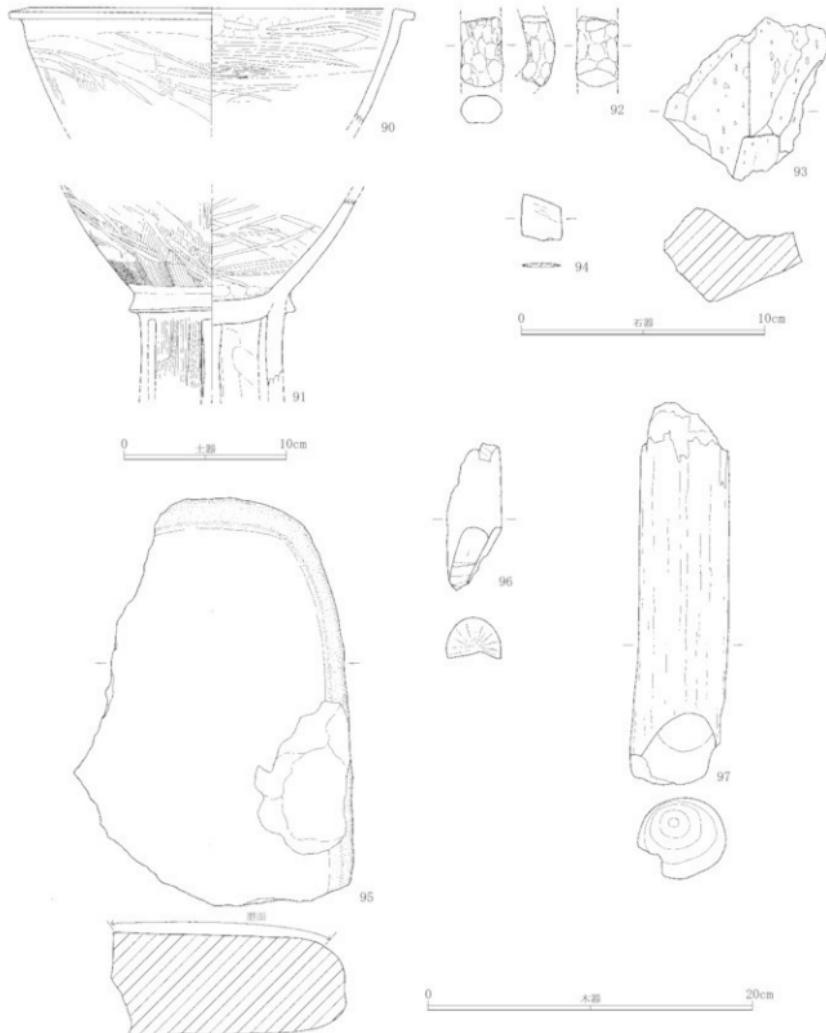
の壺で、口縁部は下方に垂れ下がるような形態である。口縁部上面には、沈線による浮文表現が認められる。胎土から宮崎平野部産と考えられる。83は壺胴部片である。外面には粗いミガキ調整が施されている。胎土から宮崎平野部産と思われるが判然としない。84は下城式の壺である。口縁内面は粘土貼り付けにより突出部が認められる。口縁上面はおおむね平坦で円形の浮文が認められる。口縁端面には円形で上下二段の刺突文が施されている。胎土から豊後産と考えられる。85、86は小型の壺である。85は丸く、胴部中位付近の径が最大となる器形で、外面にはミガキ調整が施されている。内面は、全面に渡って指オサエ痕跡が認められる。須玖系の壺と思われ、胎土から宮崎平野部産と考えられる。86は胴部中央よりやや上位の径が最大となる器形である。黒味の強い色調で、豊前もしくは瀬戸内系と思われる。87は小川原式壺である。大型で丸みある器形で、胴部上位と中位に各2条の突帯が貼り付けられている。豊後産と考えられる。88、89は壺の底部である。88は須玖系の壺で、胎土から宮崎平野部産と考えられる。89は下城式と考えられ、胎土から豊後産と思われるが判然としない。90、91は下城式の高坏である。接合はしないが、形態や調整の特徴から同一個体と判断できる。口縁部は下方に向かって短く屈曲する形態で、胴部はそこから緩やかに内湾しながら底部へ向かう形態である。坏部と脚部を一体に成形した後に、円盤充填により底部を形成して製作されていると考えられる。坏部と脚部の境界には、粘土貼り付けによる突帯が認められる。脚部は直線的



第21図 溝状遺構2出土遺物実測図②(S=1/3)



第22図 溝状遺構2出土遺物実測図③(S=1/3)



第23図 溝状遺構2出土遺物実測図④(土器・木器:S=1/3, 石器:S=1/2)

な形態で、6方向の透孔が認められる。胎土から豊後産と考えられる。92は把手の破片である。本体の器形は判然としない。手捏ねで成形されており、指オサエ痕跡が明瞭である。胎土から豊後産かと思われる。93は加工痕のある軽石である。直線的な工具痕跡が複数箇所に認められるが、製品であるのかどうか判然としない。94は磨製石鏃である。刃部の破片である。95は砥石である。上面全体が平滑で、使用面であったことがわかる。96、97は木杭である。96は細身の木材で、先端部を片側から加工することで尖った形状に仕上げられている。97も先端部のみが工具で加工され仕上げられているが、先端の形状はあまり鋭利ではない。

**溝状遺構3（第4、5、24図）** 調査区南東に位置している。おおむね南北方向に伸びており、北の先端の一部を溝状遺構1に切られている。南側の端は調査区外に及んでおり、全長を知ることはできない。溝の幅は約0.8～1.5m、深さは約0.4mである。溝底面は南に向かって緩やかに下っていた。断面の形態は不整形な椀形である。この溝状遺構掘削の目的については明確に判断できない。

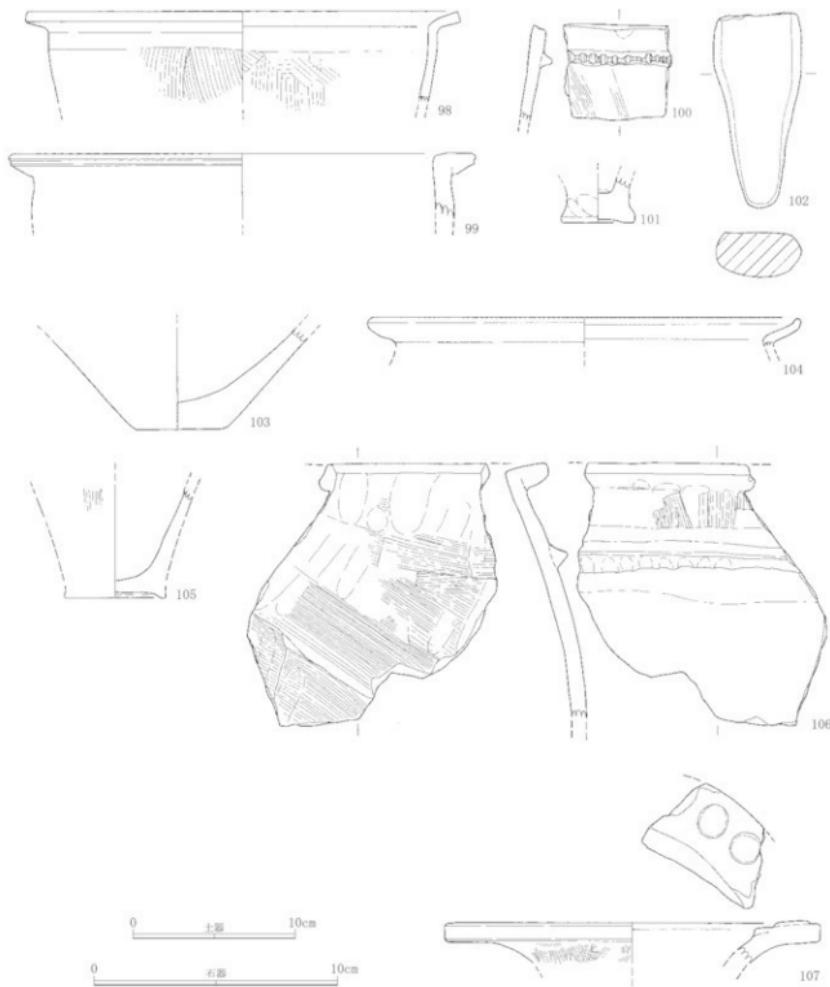
98～100は甕の口縁部である。98は東北部九州系の甕で、外方に屈曲する口縁部形態で、口縁端面は平坦である。外面にススが付着している。胎土から宮崎平野部産であると考えられる。99は山ノ口I式の甕である。不整三角形形状に突出した口縁部形態である。胎土から宮崎平野部産と考えられる。100は下城式の甕である。口縁下部に刻目突帯がめぐらされているが口縁端部には認められない。胎土から豊後産と考えられる。101、103は甕底部である。101は小型器種で上げ底状の底部形態である。103は底面が平坦で器壁が厚い。両者とも胎土から宮崎平野部産と考えられるが、土器の系統は判然としない。102は樹皮布敲石と思われる。全体に平滑で上面には平坦面が見られる。基部付近はやや細く仕上げられている。

**溝状遺構4（第4、5、24図）** 調査区南東に位置する。細く短い溝状遺構で、南端は削平の影響か失われて、全体形を知ることができない。北端は溝状遺構1同様に、東側に屈曲し途切れている。現存する全長は約4.0mで、幅は約30.0cmである。

105は東北部九州系の甕である。底部の破片で、上げ底状の底部形態である。外面は二次的な被熱の影響で器表面の剥離が著しい。胎土から豊後産と考えられる。

**溝状遺構6（第4図）** 調査区中央東寄りに位置する。耕作による削平などで、わずかしか残存していなかった。残存部分は南北方向に長軸があり、長さ約2.2m、幅約70.0cmである。断面形態は浅いU字形であった。

104は伊予系甕の口縁部である。口縁端部は上方に弱く撥ね上げられ、端部は丸みのある形態である。胎土から伊予産と考えられる。106は山ノ口式の大甕である。口縁部は断面カマボコ形で、胴部上位には断面三角形の突帯が貼り付けられている。突帯下辺側は突帯貼り付けのための指オサエ痕跡が明瞭に認められる。胴部が張る形態である。口縁部上面には棒状浮文が剥離したものと考えられる痕跡が認められる。胎土から宮崎平野部産と考えられる。107は下城式壺である。口縁部内面に粘土が貼り付けられており、口縁部上面はほぼ水平に仕上げられている。そこに2個一組と思われる円形浮文が認められる。胎土から豊後産と考えられる。



第24図 溝状遺構3～7出土遺物実測図（土器：S=1/3, 石器：S=1/2）

### 周溝状遺構

**周溝状遺構の概要** 今回の調査では全部で11基の周溝状遺構が検出された。周溝状遺構は、砂丘間低地内の微高地平坦面上に位置し、その周囲を溝状遺構1・2によって区画されている。周溝同士は連結するものがほとんどであるが、周溝状遺構5のように単独で存在するものもある。検出した周溝状遺構の平面形態には、円形、不整形な円形、隅丸方形があり、周溝で囲まれた部分において、柱穴などの痕跡は認められない。規模については、周溝外周の長軸が約2.1～7.4m、短軸が約3.3～6.7m、溝の幅は約0.3～0.9m、深さは検出面から約8.0～44.0cmのものがある。周溝の切り合い関係については明確にできたものが少なく、埋土を共有するものが多く認められた。一部において周溝内埋土の再掘削が確認できることから、一部を除いて周溝状遺構は併存し、掘り直しがおこなわれながら一定期間使用されていた可能性が考えられる。

周溝内から出土した遺物は弥生土器が主体で、加工痕跡の残る木材が僅かに出土している。出土遺物は底面直上ではなく、底面からやや高い位置で検出された。弥生土器については完形品がなくすべて破片資料である。器種としては甕、壺、高杯があり、特に甕の出土が多く見られた。土器の形状や調整方法に特異な点は見られず、甕の外面にスス、内面にコゲが付着するものがあることから火にかけて使用していたものと思われる。出土した木材は、鉄製の工具で加工したような痕跡が一部に残っており、その形状から木杭と想定されるものと、不明木材がある。以上のように、周溝状遺構出土遺物の特徴は、集落内において日常生活で使用された遺物類と変わりないものが多く見つかっている。

**周溝状遺構1（第25、26図）** 調査区のほぼ中央部に位置し、周溝状遺構2と連結している。平面形態は隅丸長方形で、周溝外周は長軸方向で約6.1m、短軸方向で約4.7m、周溝幅約0.5～1.0m、深さは検出面から約30.0～44.0cmである。周溝底面はほぼ平滑で、断面形は方形である。土層断面から周溝状遺構1・2の先後関係を明確にできなかったが、周溝の掘り直しがおこなわれている痕跡が断面c-dで看取された。周溝状遺構使用時の堆積土とみられる地山砂質土を含んだ4・5層が切られ、その直上に粘性の高い黒色土が薄く堆積していることから、3層の最下面是再掘削後の周溝底面であった可能性がある。また、1～3層の埋土が周溝状遺構1・2で共有されており、両者が一定期間併存していたことが考えられる。

周溝内の東側と西側、周溝状遺構2と重複する箇所で弥生土器と石器が出土した。108～111は下城式甕の口縁部から胴部にかけての破片である。刻目突帯と口縁部刻目のあり方から、口縁端部がわずかに肥厚し、そこにも刻目が施されている108、111と口縁端部に刻目が認められない109、110に分けられる。111の口縁端部に施されている刻目は、わずかな工具痕跡として認められる程度である。器形は、108、111が、口縁部が最大径となりわずかに内湾しながらもほぼ直線的に底部へ至る形態、109がわずかに丸みを帯びる形態、110が108、111とほぼ同じ器形であるが、口縁端部が外方へやや屈曲する形態である。調整はいずれも外面はハケ、内面はナデを基本としており、110は内面口縁部付近のヨコナデが丁寧である。胎土から、108、110、111は豊後産、109は宮崎平野部産であると考えられる。112は東北部九州系甕の底部片である。上げ底状の底部形態で、端部断面形態は四角形である。外面は粗いミガキによつ

て調整されているのが特徴である。胎土から、東北部九州産と考えられる。113は下城式と思われる壺であるが、外面の風化が進んでおり判然としない。胴部中央よりやや上位に最大径をもつ器形で、底部底面は平坦である。胎土から、宮崎平野部産であると考えられる。114は加工痕跡のある軽石である。上下両方向からの穿孔による加工痕跡が認められる。

**周溝状遺構2**（第25、26図） 調査区のほぼ中央部に位置し、周溝状遺構1と連結している。平面形態は不整形な円形で、周溝外周は長軸方向で約3.4m、短軸方向で約3.0m、周溝の幅は約0.3～0.4m、深さは検出面から約24.0～30.0cmである。周溝の断面形はややU字形である。前述のとおり、周溝状遺構1と2は、両者が切り合う箇所の土層観察で埋土を共有することが確認されたことから、併存していたと考えられる。ただし、本遺構が周溝状遺構1と比べ平面形態が小さく、周溝状遺構1に取り付くような形態であることから、周溝状遺構1の存在を前提として本遺構が構築されている可能性がある。

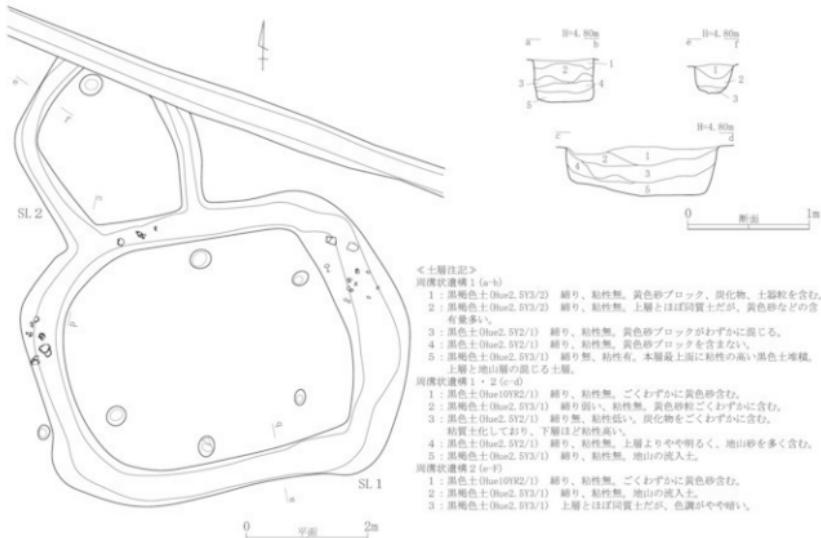
**周溝状遺構3**（第27図） 調査区のほぼ中央、周溝状遺構1・2の西側に隣接し、周溝状遺構4と切り合っている。平面形態はやや不整形な円形で、周溝外周は長軸約3.4m、短軸は約3.3m、溝の幅は約0.3～0.5m、深さは検出面から約28.0～34.0cmである。周溝幅が他のものに比べて狭く、周溝の断面形態はU字形である。断面c-dから、周溝状遺構4の埋土である4層が周溝状遺構3の埋土である1～3層に切られている状況が観察できることから、周溝状遺構4の埋没後に周溝状遺構3の掘削がおこなわれていると考えられる。また、周溝状遺構1・2でみられたような周溝内における再掘削の痕跡は見出せなかった。

出土遺物としては周溝内から石器が出土した。115は敲石である。ほぼ全面に敲打痕跡が認められるが、その中でも特に上面の一部に顕著である。形態から磨製石斧未製品の転用品である可能性がある。

**周溝状遺構4**（第27図） 調査区のほぼ中央、周溝状遺構1・2の西側に隣接し、周溝状遺構3と切り合っている。平面形態は正円に近い形状で、周溝外周は長軸約3.6m、短軸約3.4m、溝の幅約0.5～0.7m、深さは検出面から約20.0～25.0cmである。周溝底面はほぼ平滑で、断面形は逆台形である。前述のように、土層の観察から周溝状遺構4は周溝状遺構3に先行すると考えられる。また、周溝内の再掘削も見出せなかった。出土遺物は認められなかった。

**周溝状遺構5**（第27図） 調査区の南側、溝状遺構2の北側に構築されている。付近に周溝状遺構は見られず、単体で存在していた。平面形態は正円に近く、周溝外周は直径約2.1m、周溝の幅は約0.5m、深さは検出面から約20.0cmであり、今回の調査で検出されている周溝状遺構のうち、最も規模が小さいものである。周溝内の再掘削は見出せなかった。

出土遺物としては、弥生土器の甕、加工痕跡のある軽石が出土した。116は東北部九州系の甕である。胴部片であるため、口縁部形態などは判然としないが、わずかに残る頸部の状況から短く外方に屈曲する形態であると考えられる。胴部はわずかに丸みをもつものの、ほぼまっすぐな形態である。内外面ともにミガキによる調整が施されている。胎土から東北部九州産と

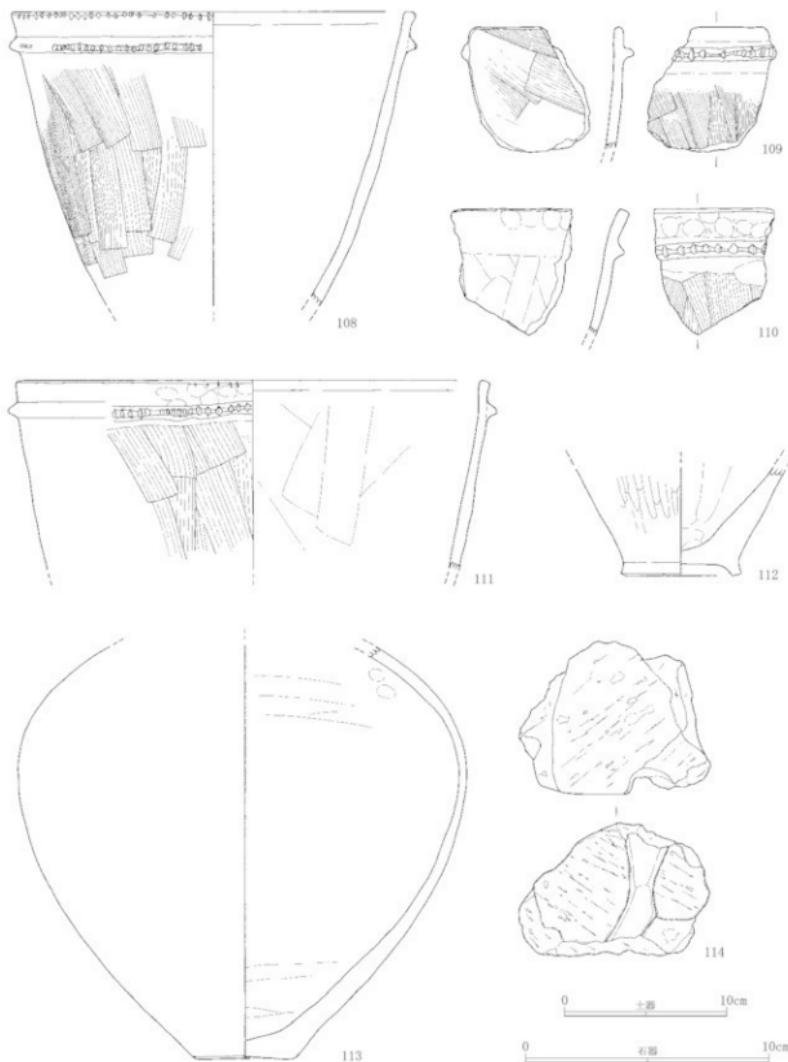


第25図 周溝状遺構 1・2 実測図(平面; S=1/80, 断面S=1/40)

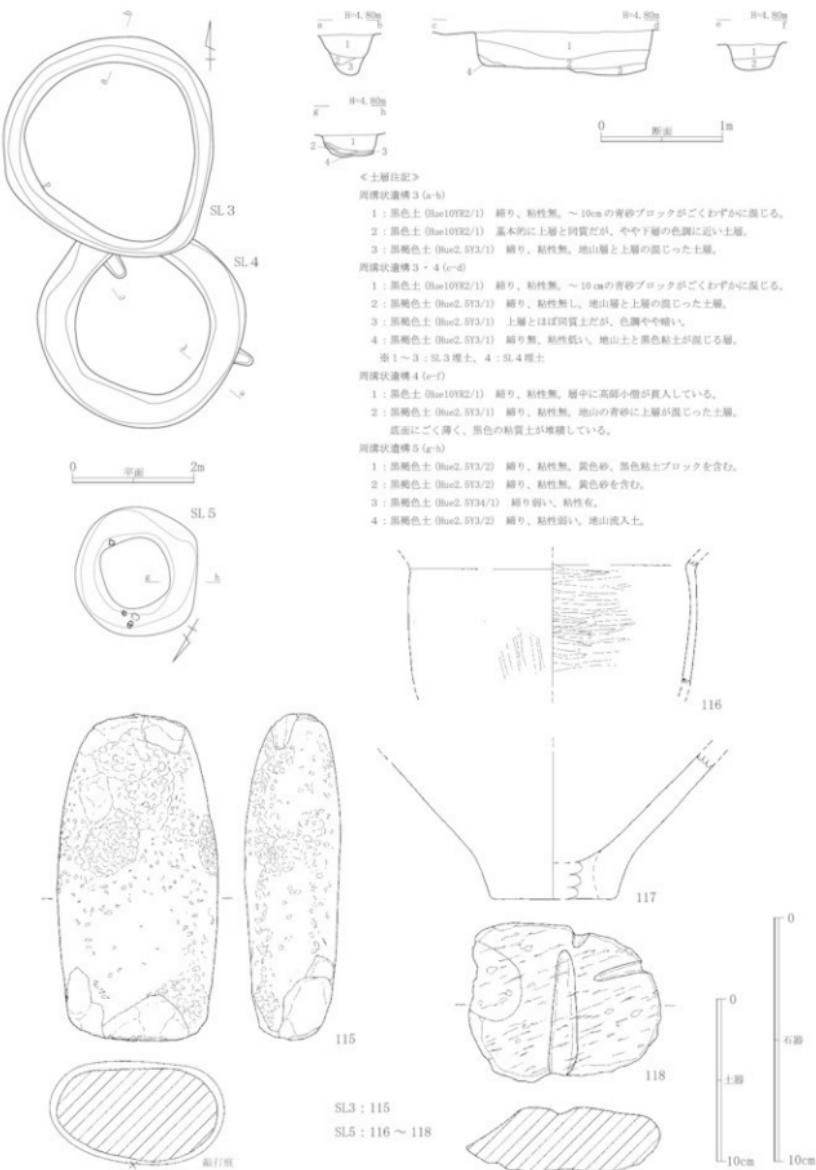
考えられる。117は甌底部である。厚みがあり平たい底部からわずかに屈曲し外方へ大きく開く形態である。胎土から、宮崎平野部産であると考えられる。118は加工痕跡のある軽石である。本体の中央部を一周するように細い溝状の窪みが掘り込まれており、形態から浮きである可能性が考慮される。

**周溝状遺構6** (第28図) 調査区の北半において連結する周溝状遺構群の最南端部にあたり、周溝状遺構7と連なっている。遺構の半分は擾乱によって削平を受けており、残存部から考えると平面形態は、円形ないしは不整形な円形と想定される。周溝外周の残存幅は約3.0m、周溝の幅は約0.5m、深さは検出面から約20.0～28.0cmである。周溝の土層断面から、周溝状遺構7との先後関係や再掘削の痕跡は見出せなかった。平面形態がやや歪ではあるが、周溝状遺構7は周溝状遺構6に取り付くような形態であることから、周溝状遺構6の存在を前提として掘削がおこなわれている可能性がある。

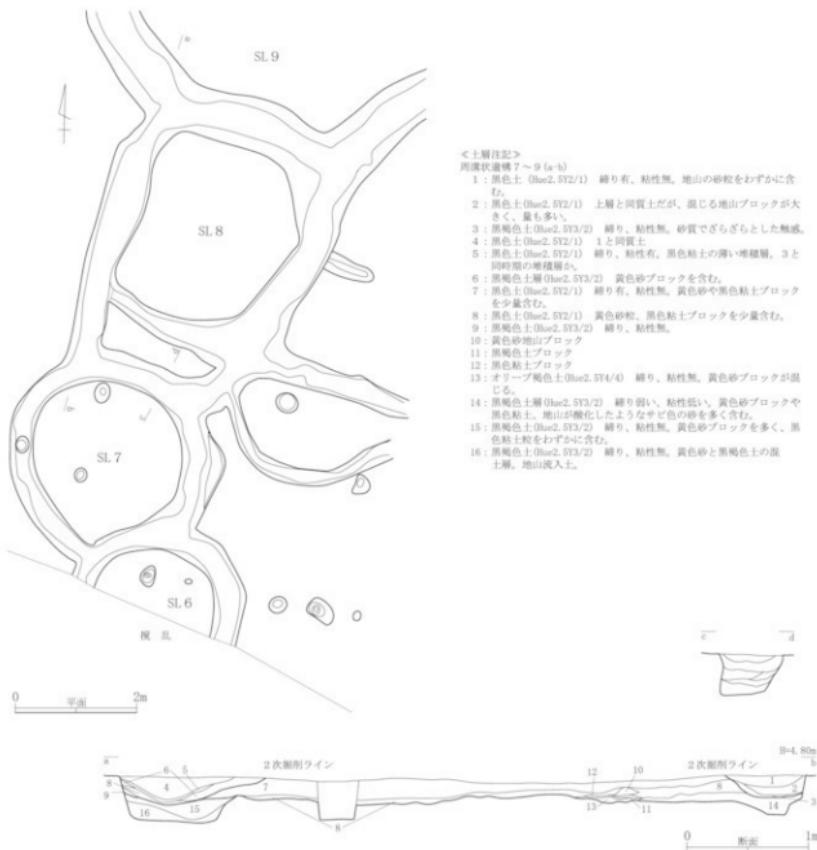
**周溝状遺構7** (第28、29図) 調査区北半部に位置し、周溝状遺構6・8と連結している。平面形態はやや不整形な円形である。周溝底面はほぼ平滑で、断面形態は逆台形である。規模は長軸方向で約3.0m、短軸方向で約3.3m、周溝の幅は約0.4～0.6m、深さは約26.0cmである。また、断面図a-bにより、連結している周溝状遺構8との関係を知ることができる。まず、土層は、1次堆積土の7・8・14層と2次堆積土の1～3層に大別でき、1次堆積土によって周溝が埋没した後に再掘削がなされ、その後に2次堆積土によって最終的に周溝状遺構7が



第26図 周溝状遺構1・2出土遺物実測図（土器：S=1/3, 石器：S=1/2）



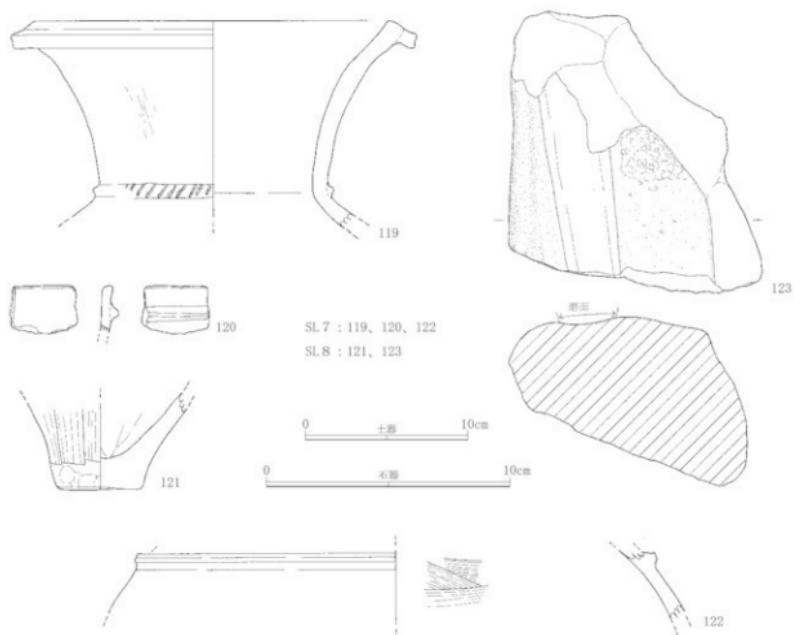
第27図 周溝状遺構3～5、出土遺物実測図（平面図：S=1/80, 断面図：S=1/40, 土器：S=1/2, 石器：S=1/3）



第28図 周溝状遺構 6~8 実測図(平面図: S=1/80, 断面図: S=1/40)

埋没したことが分かる。そして、そのうちの1次堆積土のみが周溝状遺構8と共に共有されていることから、1次堆積土による埋没以前には周溝状遺構7・8は併存し、その後の周溝状遺構7のみが再掘削され2次堆積土が堆積するという経過を知ることができる。

出土遺物としては、弥生土器の壺、甕が出土した。119は入来式あるいは山ノ口式の壺である。口縁部から肩部にかけての破片で、下方に向かって下がる口縁部形態である。頸部と肩部の境界には断面三角形の刻目突帯が貼り付けられている。この境界の屈曲は緩やかな「く」の字形で通有の在地系壺の形態と異なっており、いずれかの地域の影響を受けているものと考えられる。胎土から宮崎平野部産であると考えられる。120は下城式甕である。突帯が貼り付けられ

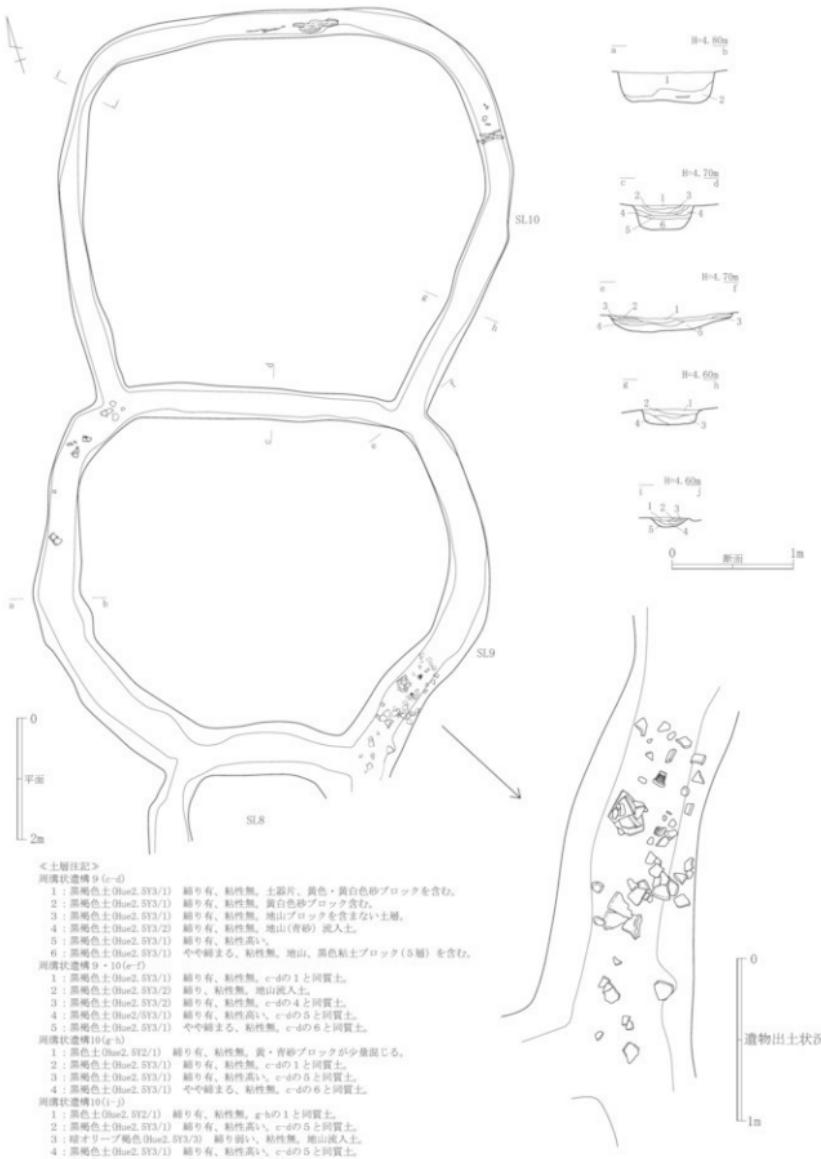


第29図 周溝状遺構7・8出土遺物実測図（土器：S=1/3, 石器：S=1/2）

ているが、刻目が施されておらず、全体に粗雑な印象を受ける。胎土から宮崎平野部産であると考えられる。122は大型壺である。小川原式壺の形態に似るが、突帯の断面形態など若干異なる部分がある。胎土から宮崎平野部産と考えられる。

**周溝状遺構8**（第28、29図） 調査区北半部に位置し、周溝状遺構7・9と連結している。平面形態は歪で、周溝状遺構ではなく、周溝状遺構7と9を繋ぐ溝状施設の可能性もある。また、周溝内と周溝外の東側に複数の溝が取り付けられている点が他の周溝状遺構と異なる。規模は長軸方向で約4.2m、短軸方向で約3.8m、周溝の幅は約0.3～0.7m、深さは検出面から約10.0～20.0cmである。断面a-bの観察から、周溝状遺構7・9の1次堆積土埋没前には、周溝状遺構7・9と併存していたが、本遺構のみ再掘削がなされなかつたことがわかる。

出土遺物としては、周溝埋土から弥生土器と石器が出土した。121は下城式甕の底部である。平坦な底面形態で、立ち上がり具合から、胴部はやや細身の形態であると思われる。胎土から豊後産と考えられる。123は砥石である。上面に幅が広く溝状の使用痕跡が認められる。石斧などのやや大型の石器を製作するのに用いられていたと思われる。また、敲打痕跡も一部に認められることから、用途としては、砥石以外にも台石あるいは敲石として用いられていたことがわかる。

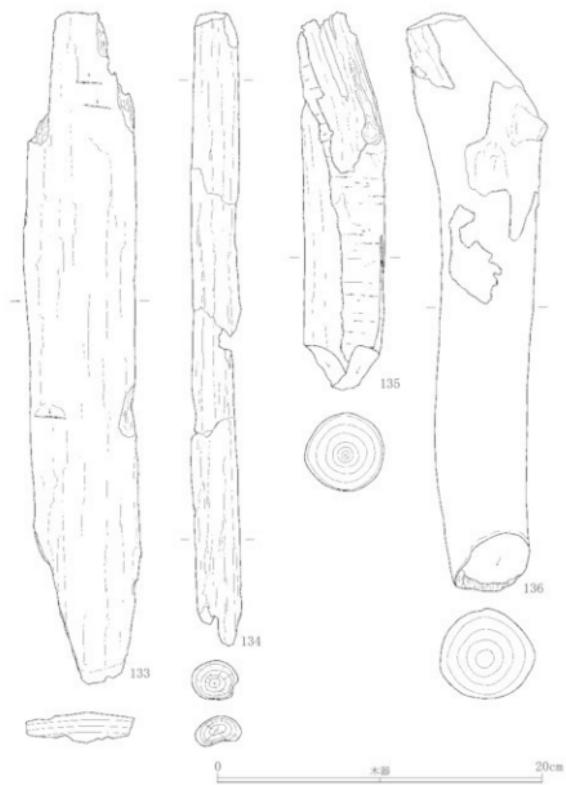


第30図 周溝状遺構 9・10実測図 (平面: S=1/80, 1/30, 断面: S=1/40)



第31図 周溝状遺構9出土遺物実測図（土器：S=1/3, 石器：S=1/2）

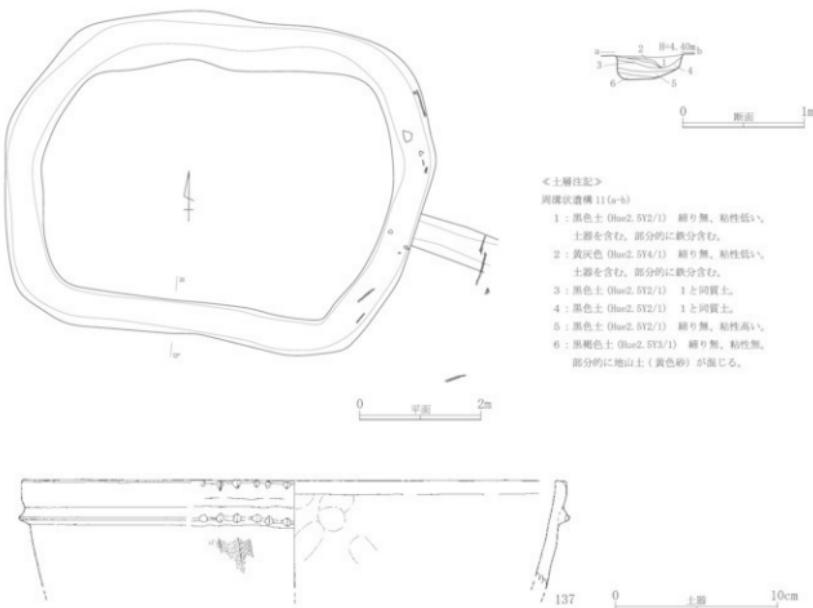
**周溝状遺構9**（第30、31図） 調査区北半部に位置し、周溝状遺構8・10と連結している。平面形態は不整形な円形である。周溝外周は長軸7.4m、短軸は6.3m、周溝の幅は約0.5～0.9m、深さは約10.0～20.0cmであり、周溝状遺構10に続く規模の周溝状遺構である。断面図a-bによると、土層は1次堆積土の16・15・8・7層と2次堆積土4～6・8・9層に大別でき、周溝状遺構7と同様に再掘削、埋没の過程をたどったと知れる。したがって、断面図a-bに基づく周溝状遺構7～9の関係を示せば、周溝状遺構7～9が同時に掘削され一定期間併存の



第32図 周溝状遺構10出土遺物実測図 (S=1/3)

後に1次堆積土により埋没する。その後、周溝状遺構7・9のみが再掘削され、周溝状遺構8は埋没したままであったということが分かる。周溝状遺構10との先後関係は、土層断面図の観察では明確な切り合い関係を見いだせず、両者が併存していたものと考えられる。

周溝状遺構の中では、最も出土遺物が多く、弥生土器の甕・壺・高坏が出土した。124は東北部九州系甕である。端部が「コ」の字形で短く屈曲する口縁部形態である。胴部は中位よりやや上が最大径となり、底部に向かって内湾しながらすぼまる形態である。胎土から、東北部九州産と考えられる。125は豊前系甕である。一見、中溝式のようであるが口縁部の屈曲角度や長さ、胴部が中位付近に最大径を持つなど異なった形態である。突堤は口縁部直下にあり、刻目が施されている。胎土から宮崎平野部産と考えられるが、他の土器と比べて胎土が精良である点が特徴である。126、127は下城式甕である。いずれも刻目突堤と口縁端部に刻目が施されており、刻目の間隔は若干広い。胴部形態はわずかに内湾しながらほぼまっすぐに底部に



第33図 周溝状遺構 11、出土遺物実測図 (S=1/80, 1/40, 土器 : S=1/3)

向かう形態である。口縁端部は 126 が「コ」の字形、127 は端部がわずかに外方に突出されるような形態となっている。胎土から 126 が宮崎平野部産、127 が豊後産と考えられる。128 は須玖系の広口壺である。在地化した形態で、口縁部の広がりもゆるく、頭部と胴部の境界も、かなり緩やかで在地系の形態に近い形状である。胎土から宮崎平野部産と考えられる。129 は東北部九州系の甕底部である。上げ底状の底部形態で底面端部の断面形態は丸みのある形態である。外面の調整がミガキではなく粗いハケ調整であることや、胎土の特徴から宮崎平野部産と考えられる。130 は下城式の甕と考えられる。直線的な胴部形態である。胎土から豊後産と考えられる。131 は下城式の高坏である。脚部の破片で、透孔は 4 方向に開けられている。坏部と脚部の境界には断面三角形の突帯が認められる。坏部が欠損しているために坏部から脚部の成形方法は判然としない。胎土から豊後産と考えられる。132 は敲石である。平面形態は細長い棒状で、断面は角の丸い三角形ないし梢円形である。一部に明瞭な敲打痕跡が認められる。

**周溝状遺構 10 (第30、32図)** 調査区北半において鎖状に連なる周溝状遺構群の北端部にあたり、周溝状遺構9と連結している。平面形態は不整形な隅丸方形である。周溝外周は長軸7.4m、短軸6.7m、周溝幅は約0.3～0.6m、深さは約8.0～23.0cmで、今回の調査で確認された周

溝状遺構の中で最も大きい。上面が削平されていたため、周溝の深さは検出面から非常に浅いものであった。前述のとおり、周溝状遺構9と併存していたものと考えられるが、周溝状遺構9に取りつくような平面形態であることから、本遺構は、周溝状遺構9を前提として構築された可能性が高い。また、両者の底面レベルについて注目すれば、本遺構の底面レベルは、周溝状遺構9の第1次掘削時の底面とほぼ同じ高さである。そのため、周溝状遺構10も周溝状遺構7～9と同時期に掘削されたものであると思われる。

出土遺物としては、木杭あるいは加工痕のある木材が出土した。133、135は木杭である。133は一部欠損があるものの、ほぼ完形である。薄い板状で、先端部は両側辺をカットすることで尖った形態に仕上げられている。また、表面には手斧状工具による調整痕跡が認められる。先端部と頭部は打ち込み時の衝撃により、若干潰れている状況が看取できる。135は断面円形の木材で先端部が複数方向からの手斧状工具による調整によって尖った形態に仕上げられている。樹皮が残されたままである。上端の状況は欠損のため不明である。134、136は加工痕跡のある木材である。両者ともに先端部に切断時の工具痕跡が認められる。何らかの未製品の可能性があるが判然としない。

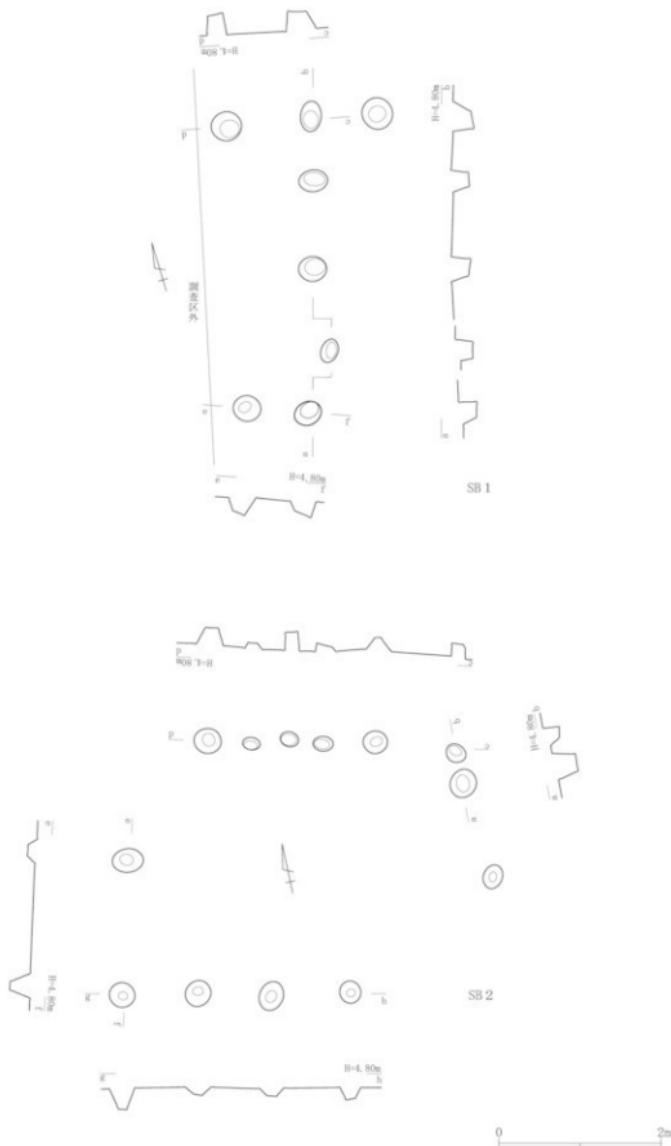
**周溝状遺構11（第33図）** 今回確認された周溝状遺構の中で、最も北側に位置する周溝状遺構である。東側には周溝状遺構10が隣接している。平面形態は、隅丸長方形であり、長軸方向で6.8m、短軸方向で5.2m、周溝幅は約0.6～0.7m、深さは約10.0～18.0cmである。周溝状遺構10と同様に、上面が削平されており周溝の深さは検出面から非常に浅い。周溝状遺構との切り合いはないが、東側で溝状遺構と切り合っている。溝状遺構は削平の影響により遺存状態が悪く判然としないが、周溝状遺構10の方向に伸びていることから、両者がこの溝によって連結されていたことも想定できる。断面図a-bによると、2～4層が堆積した後に1層に切られている。1層はやや粘性のある黒色土となっている事から、この層が二次的な底面になっていた可能性があり、不明確ではあるが再掘削がおこなわれた可能性が考えられる。

137は下城式甕である。突縁と口縁端部に間隔がやや広い刻目が施されている。口縁端部は四角く仕上げられている。胴部は欠損しているが、残存部分から、やや内湾しながら底部に向かってすぼまっていく形態と思われる。胎土から豊後産と考えられる。

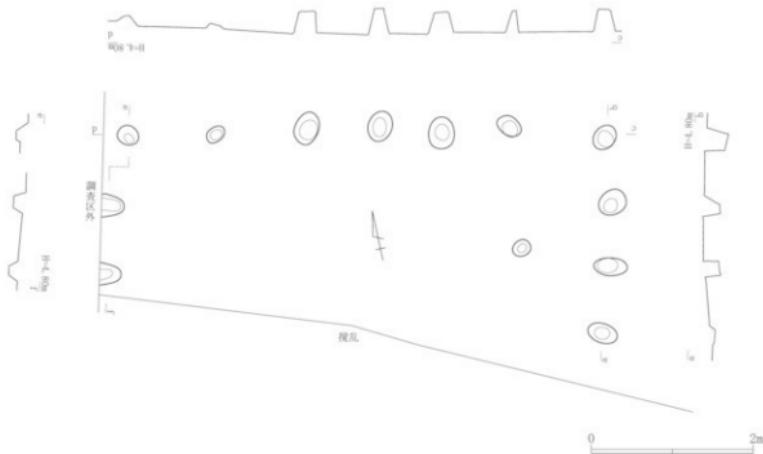
#### 掘立柱建物

**掘立柱建物の配置** 今回の調査では、3棟の掘立柱建物が確認された。この3棟の掘立柱建物は、今回確認された遺構の中では、溝状遺構で画された区画の最も内側、すなわち標高の高い側に位置していた。いずれの掘立柱建物も長軸を東西方向に持つており、かつ3棟が南北にはほぼ等間隔に並ぶような位置で検出されたことから、この3棟の掘立柱建物は同時期に存在して、計画的に配置がなされていた様子をうかがうことができる。建物が調査区外に及んでいたり、攪乱や削平などの影響から、全体形を把握することができる建物は存在しなかった。

**掘立柱建物1（第34図）** 3棟の掘立柱建物のうち最も北側に位置している掘立柱建物である。大部分が調査区外に出ていたために、今回の調査では建物東側の一部のみを確認することができ



第34図 掘立柱建物 1・2 実測図 (S=1/60)



第35図 挖立柱建物3実測図(S=1/60)

きた。長軸を東西に持つと思われる、平面長方形の側柱建物で、桁行は1間以上、梁行4間で、規模が東西1.3m、南北3.6mである。柱間隔は桁行で0.8m～1.0m、梁行で0.8～1.1mであり、間隔がそれぞれの柱間で一定していない。柱筋も整っていない部分があるなど、建物全体としては、やや歪な形態である。柱掘方は平面形態が円形ないし梢円形で、直径は0.3～0.35m程度である。掘方の深さは検出面から0.2～0.3mで、底面レベルも一定でない。

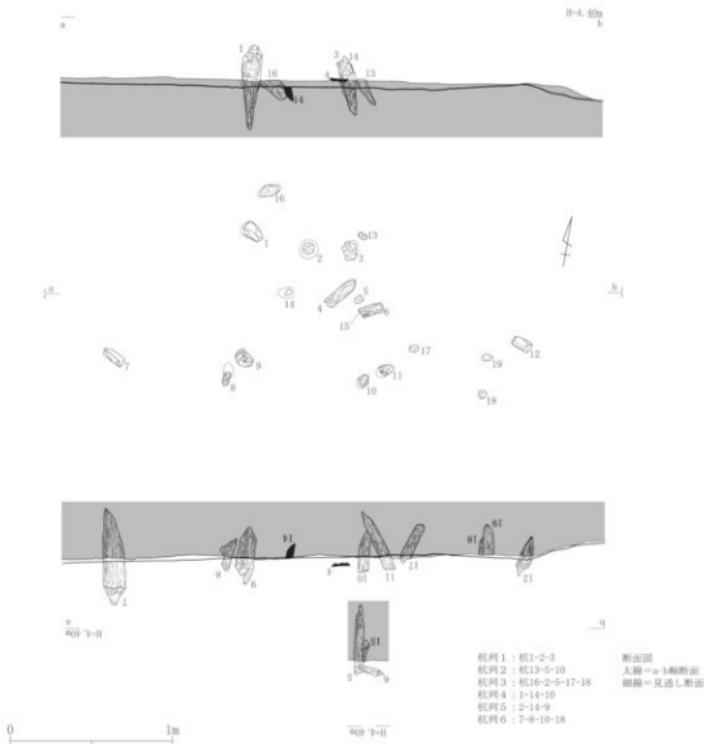
**掘立柱建物2**（第34図） 3棟の掘立柱建物のうち中央に位置する建物である。おおむね全体形を知ることができるが、建物の北西および南東隅が削平の影響からか、柱掘方を確認することができなかつた。長軸を東西方向に持つ平面長方形の側柱建物である。各辺で柱掘方の数が一定せず、桁行は北辺で6間、南辺で4ないし5間とみられる。梁行は東辺で3ないし4間、西辺で2ないし4間程度と思われる。規模は、東西4.0m程度、南北が約3.0mである。柱間間隔も一定せず、最も狭い部分で0.4m、最も広い部分で1.0mとなっている。柱筋も通っておらず、各辺が直角でないため、歪な平面形態となっている。柱掘方は円形ないし梢円形で、直径は0.2～0.4mである。底面レベルも一定でない。

**掘立柱建物3**（第35図） 3棟の掘立柱建物のうち最も南に位置している。南辺が攪乱によつて失われているが、東西方に長軸を持つ平面長方形の側柱建物で、桁行が6間、梁行が4間以上である。規模は、東西5.9m、南北2.5m以上である。柱間間隔は梁行がおおむね0.8mで整つており、桁行が0.8～1.1mとなっている。柱筋は他の2棟の建物と比較すると整った印象である。柱掘方は円形ないし梢円形で直径は0.2～0.4mである。底面レベルは一定しておらず、北辺の西側2つと南東隅の柱掘方は極端に浅い。

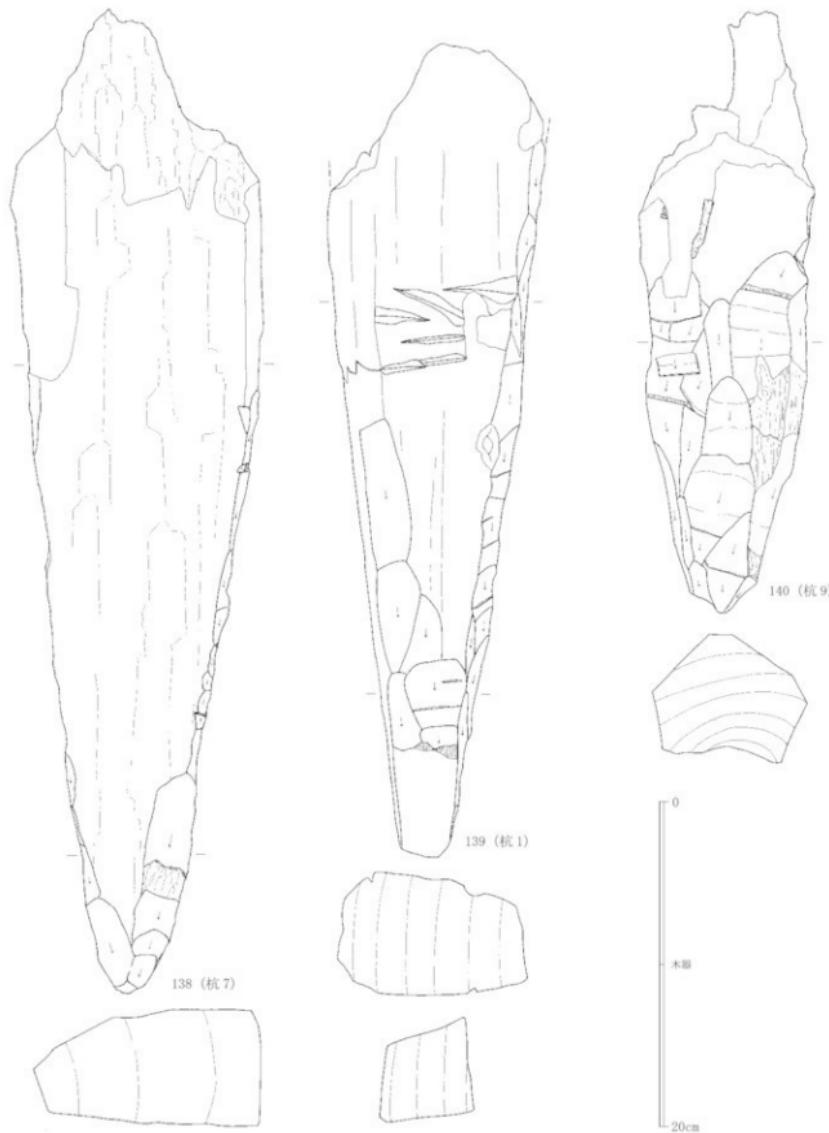
## 杭列

杭列（第36～39図） 調査区南東側に位置する。2本の溝状遺構で区画された外側に位置しているが、その位置は、ちょうど2本の溝状遺構が途切れていて区画の内と外をつなぐ通路部分の延長上にある。この位置関係から、杭列についても他の各遺構と関連を持って計画的に配置されたものと考えることができる。

杭列は、合計18本の杭で構成されている。杭は尖った先端部が直接打ち込まれて設置されている。杭の下端側は遺存状態が良好であるのに対し、上部は腐朽や削平の影響を受けて失われていた。そのため、杭列の上部構造については知ることができなかつた。ただし、杭11、17の側面には「コ」の字形に抉られ部分があり（第38図143、144、図版19の下段右）、これらを用いた木組みをともなう構造物であった可能性もある。また、杭の周囲には黒色の粘質土が地山に嵌入している部分が見受けられる。この土は、杭打ち込み作業にともなって地表面の

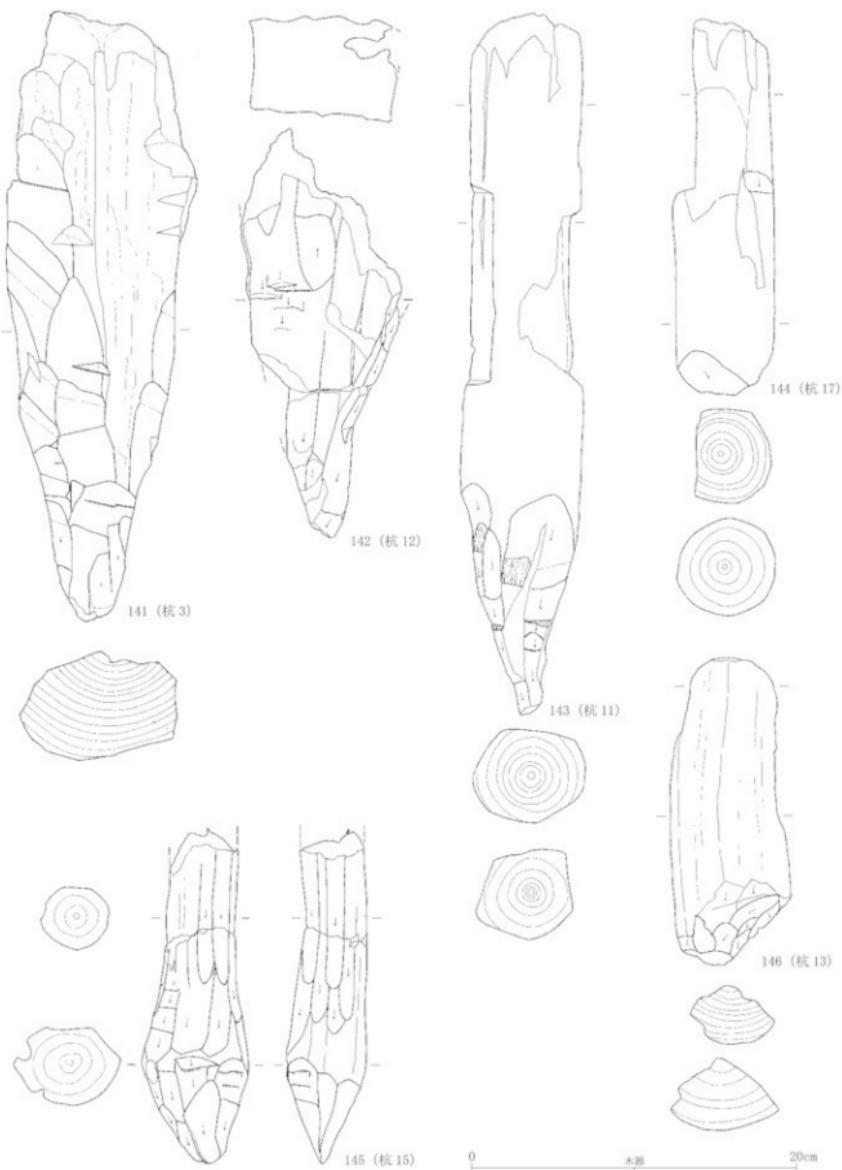


第36図 杭列実測図 (S=1/30)

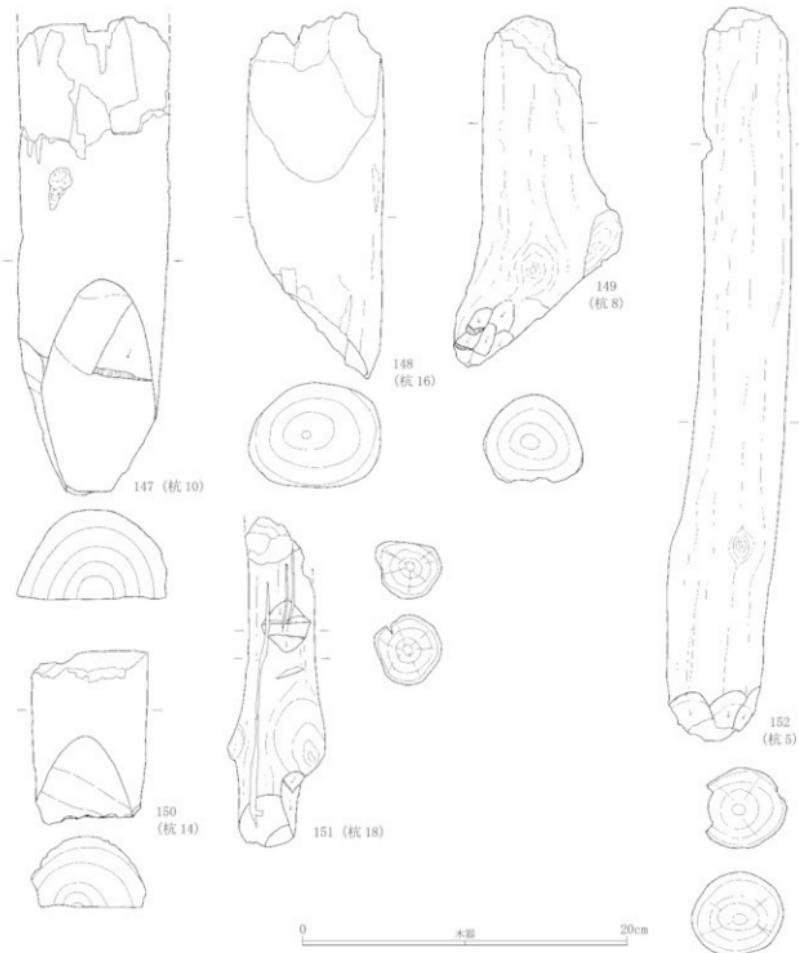


第37図 杭列出土遺物実測図①(S=1/3)





第38図 杭列出土遺物実測図②(S=1/3)



第39図 杭列出土遺物実測図③(S=1/3)

土が嵌入したものと思われるから、杭が打ち込まれたときには、地山上にある程度の黒褐色粘質土が堆積していた状況であったと判断できる。

これら杭列は、配列から18本の杭全体で1つの施設を構成するようなものではないと思われる。杭の並びについて観察すれば、直線的に並ぶ6列の杭列を見出すことができる。ここでは、3本以上並ぶものを有意な杭列と見なした。直線的に並ぶ杭の組合せは第36図に示した通りである。これら6列の杭列には杭が重複しているものがあるため、杭列は実数的には6本未満となる。加えて、直線的でない杭配置を持つ構造物が存在する可能性も考慮すれば、この18本の杭からなる杭列の本来的な構造、重複関係を知ることは現状においてできなかった。しかし、杭列は、遺構が存在する区画の内と外をつなぐ通路部分に相対する位置に存在するという位置関係がこの杭列のもつ何らかの性格を反映している可能性はある。

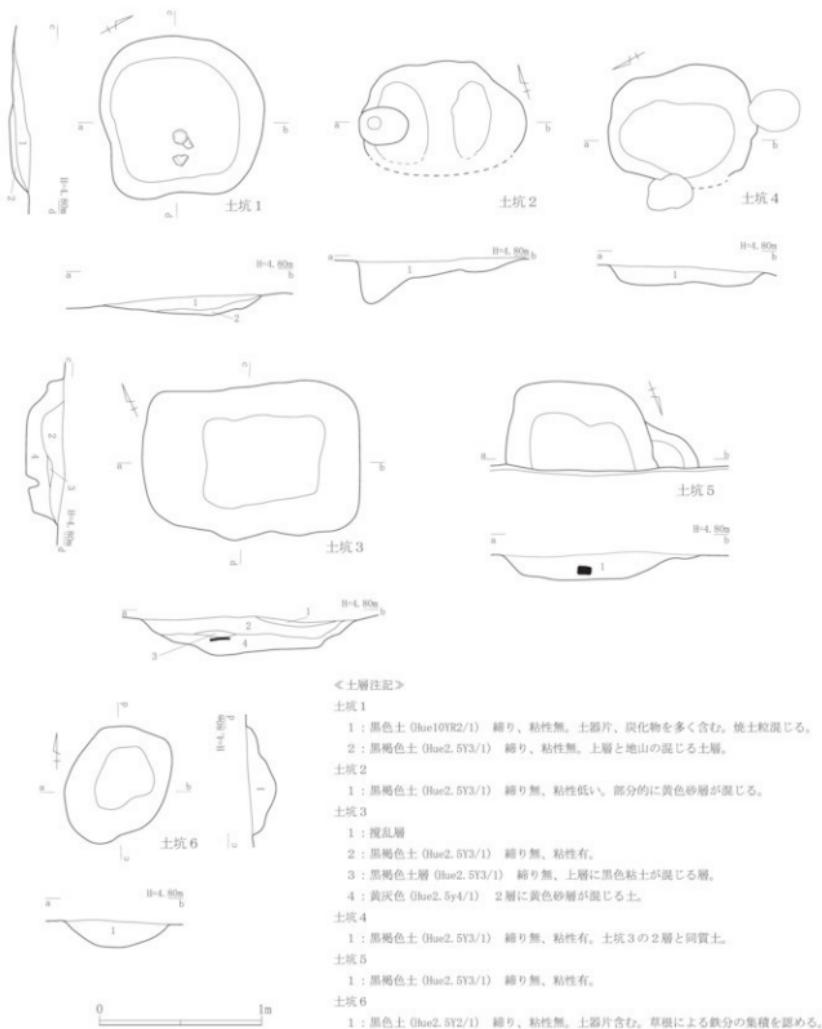
138～152は杭列に用いられていた杭である。杭は、角ばった木材を素材とするものと、芯を持つ丸い木材を素材とするものに大別できる。その中でも素材の形態や加工の違いによってさらに細分することが可能で、角ばった木材を素材とするものは、みかん割り材を素材とし、先端部は全面を、それより上部では側面のみを加工することで先端部が作り出されているもの(138、139)とみかん割り材を素材とし、全面を加工することで杭の形状が作り出されているもの(140、141、142)に分けられる。芯を持つ丸い木材を素材とするものも、整った丸い木材を素材とし、下端部のみ加工することで先端部が作り出され、杭中ほどに「コ」の字形の抉りが入れられるものがあるもの(143、144、152)、半裁された木材を使用し、下端の丸みのある側だけを加工して先端部が作られるもの(147、150)、細い素材の全面を細かく加工して仕上げられているもの(145)、素材をあまり加工せず、先端部のみをわずかに加工して杭とするもの(146、148、149、151)に分けられる。これらの加工痕跡についてみれば、いずれも刃部は直線的で、手斧状の工具によって加工がなされているものと考えられる。残された工具の当たりをみれば、鋭利な刃が鋭く木材に食い込んでいる状態であり、これらに用いられた工具は鉄製工具であったと考えられる(図版19)。今回の調査では、他の遺構からも多く多くの木材が出土しているが、これらに残された工具痕跡も基本的に同様のものである。したがって、中須遺跡での木製品製作時の加工工具には主に鉄製工具が用いられていた可能性が高い。

### 土坑

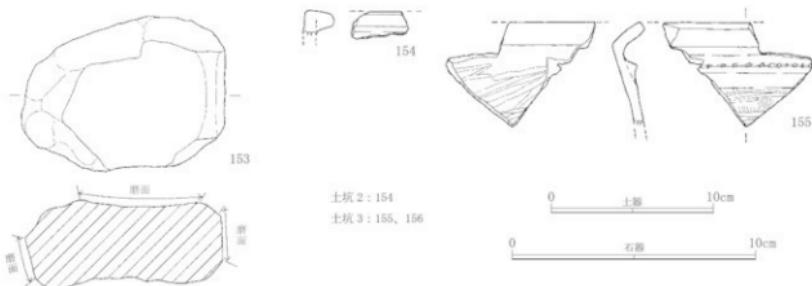
**土坑の配置** 今回の調査で確認された土坑は6基である。土坑はいずれも周溝状遺構と掘立柱建物の間に分布しており、他の遺構同様、その配置には何らかの計画性をうかがわせる。

**土坑1** (第40図) 周溝状遺構7の西側に位置している。おおむね円形に近い平面形態で、規模は長さ1.0m、幅0.96mである。断面形態は浅い楕形で、土坑西側と南側の立ち上がり角度が緩やかになっている。検出面からの深さは0.12mである。土坑中からは石材と弥生土器片が出土している。

**土坑2** (第40、41図) 掘立柱建物1北側に位置している。平面形態は不整梢円形である。南側の一部が削平により失われている。規模は長さ1.0m、幅が推定で0.7mほどと思われる。



第40図 土坑1～6実測図 (S=1/30)



第41図 土坑2・3出土遺物実測図（土器：S=1/3, 石器：S=1/2）

土坑底面に2箇所掘り窪められたような部分があり、そのため、断面形態は不整形で凹凸のある形態である。土坑西側が最も深く、検出面からの深さが0.26mである。

153は砥石である。目の粗い砂岩製で上面と両側面が使用面である。上面は浅い皿状に窪んでおり、側面は平坦である。

**土坑3**（第40、41図） 土坑2の東側に位置している。平面形態は隅丸長方形で、規模は長さ1.3m、幅0.9mである。断面形態は凹凸があり不整形で、一部では二段掘り状に見える部分がある。土坑墓のようにも見えたが、土層の堆積状況などから、通有の土坑と判断された。検出面からの深さは0.24mである。

154は入来式の甕である。口縁部の小片で、口縁部形態は粘土の貼り付けによって断面カマボコ形である。胎土から宮崎平野部産と考えられる。155は豊前系の甕である。周溝状遺構9出土土器と同一個体の可能性もある。「く」の字形に短く屈曲する口縁部とその直下にめぐらされた刻目突帯が特徴的である。胎土はやや精良であるが宮崎平野部産と考えられる。

**土坑4**（第40図） 挖立柱建物1の東に位置している。平面形態は不整梢円形で規模は長さ0.9m、幅0.75mである。断面形態は浅いU字形で、土坑底面は比較的平坦である。検出面からの深さは0.12mである。

図示していないが弥生土器の小片が出土している。

**土坑5**（第40図） 溝状遺構5に切られている。残存部分から判断すれば、平面形態は隅丸方形ないし長方形と考えられる。規模は現存部分で長さ0.95m、幅0.54mである。断面形態は浅いU字形で、土坑西側はテラス状の部分が存在する。

遺物は図示していないが弥生土器の小片が出土している。

**土坑6**（第40図） 周溝状遺構3の西側に位置している。平面形態は不整円形で、規模は長さ0.8m、幅0.58mである。断面形態は椀形で、検出面からの深さは0.16mである。

図示していないが、弥生土器の小片が出土した。

### 第3節 その他の遺構と遺物

#### 溝状遺構

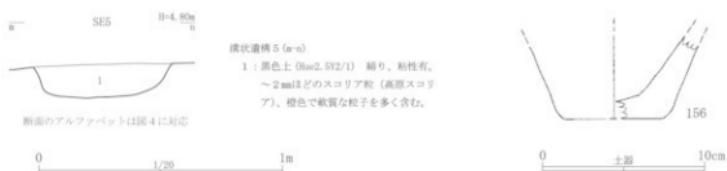
**溝状遺構5** (第4・42図) 調査区中央付近に位置する。東西に伸びる溝状遺構で、東端は北側に屈曲して途切れている。西端は削平の影響で失われている。溝の幅は約0.6m、深さは約0.15mで、断面の形態は底部が平坦なU字形である。本遺構は、埋土中に古代に噴出した高原スコリアを含んでおり古代以降に位置付けられるが、時期を明確に判断できるような遺物は検出されなかった。土地区画を主目的とする弥生時代の溝状遺構と軸方向が異なり、畑作などにともなう溝状遺構の可能性もあるがその性格についても判然としない。

156は甕底部である。平底で、直線的に広がる胴部形態である。胎土から豊後產と考えられる。

#### 遺構外出土遺物

今回の調査では、遺構外から多くの遺物が出土した。ここでは、そのうち主なものを第43から47図において報告する。

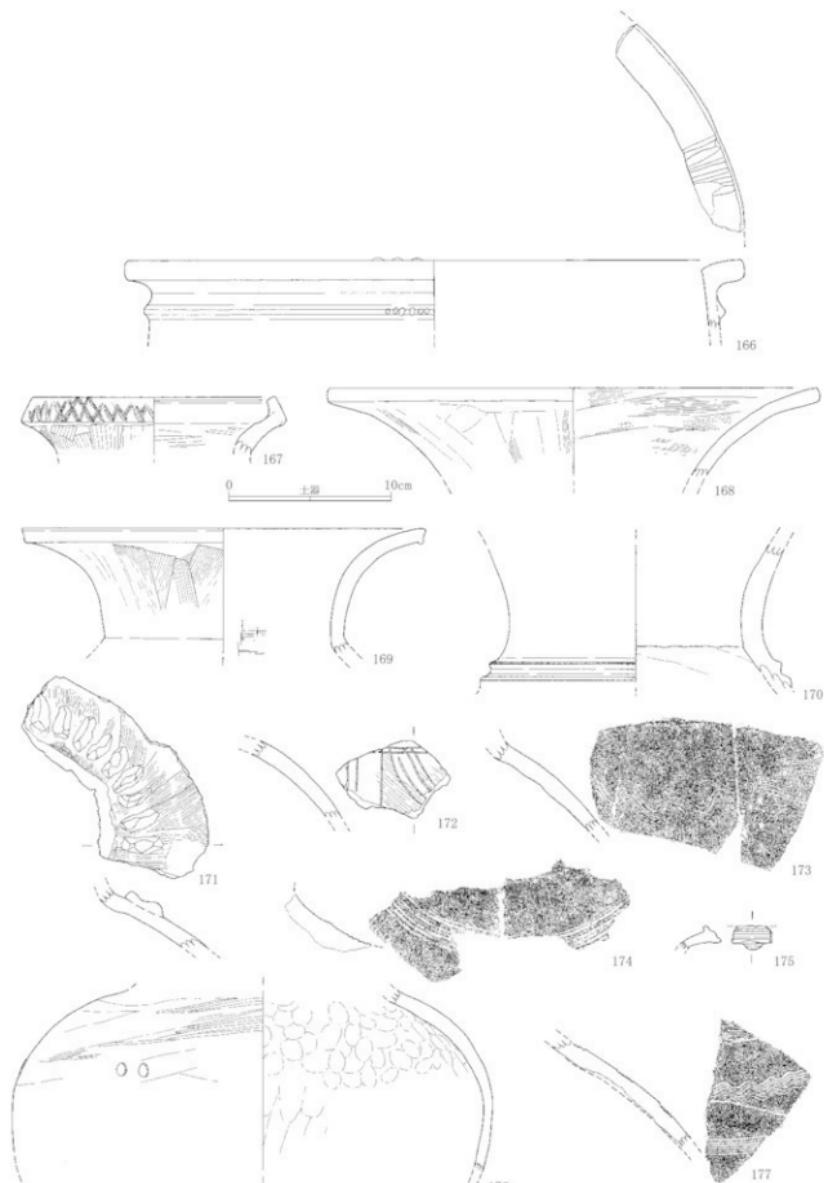
157、158は東北部九州系の甕である。短く外方に屈曲する口縁部形態で、157は口縁端部がわずかに肥厚していて、端面中央部がわずかに窪んだ形態である。158は「コ」の字形で肥厚せず、端面中央はごくわずかに窪む程度である。胴部はやや丸みを帯びた形態である。胎土から、宮崎平野部産であると考えられる。159、160は豊前系甕である。159は斜め上方に向かって直線的に立ち上がる口縁部形態で、先端が肥厚し、やや丸みある形態である。160は大きく屈曲し、逆L字形に近い形態で、端部付近は弱い撥ね上げ口縁状である。両者とも器壁が薄く、胎土から豊前產と考えられる。161は山ノ口式の甕である。短く屈曲する口縁部は端部が丸く、上面にわずかな窪みが認められる。器形が東北部九州系甕に似て、胎土には金雲母が多く含まれる。胎土や器形から都城盆地周辺產と考えられる。162、163は下城式甕である。162は口縁部付近の破片で、胴部に2条の刻目突帯が貼り付けられている。口縁端部には刻目が認められない。163は胴部片である。横位2条と縦位2条の刻目突帯が貼り付けられている。胎土から162、163とも豊後產と考えられる。164～166は山ノ口式の大甕である。164は斜め上方に立ち上がり、端面中央にわずかなくぼみを持つ口縁部形態である。胎土から大隅產と考えられる。165は山ノ口I式で、164に比べて口縁部の立ち上がりは水平に近く、上面の窪みが目立つ。粘土貼り付けにより断面略三角形の口縁端部が形成され、胴部には断面三角形の突帯がめぐらされている。166は厚みのある口縁部で上面はおおむね水平に近く、3条一組の棒状浮文



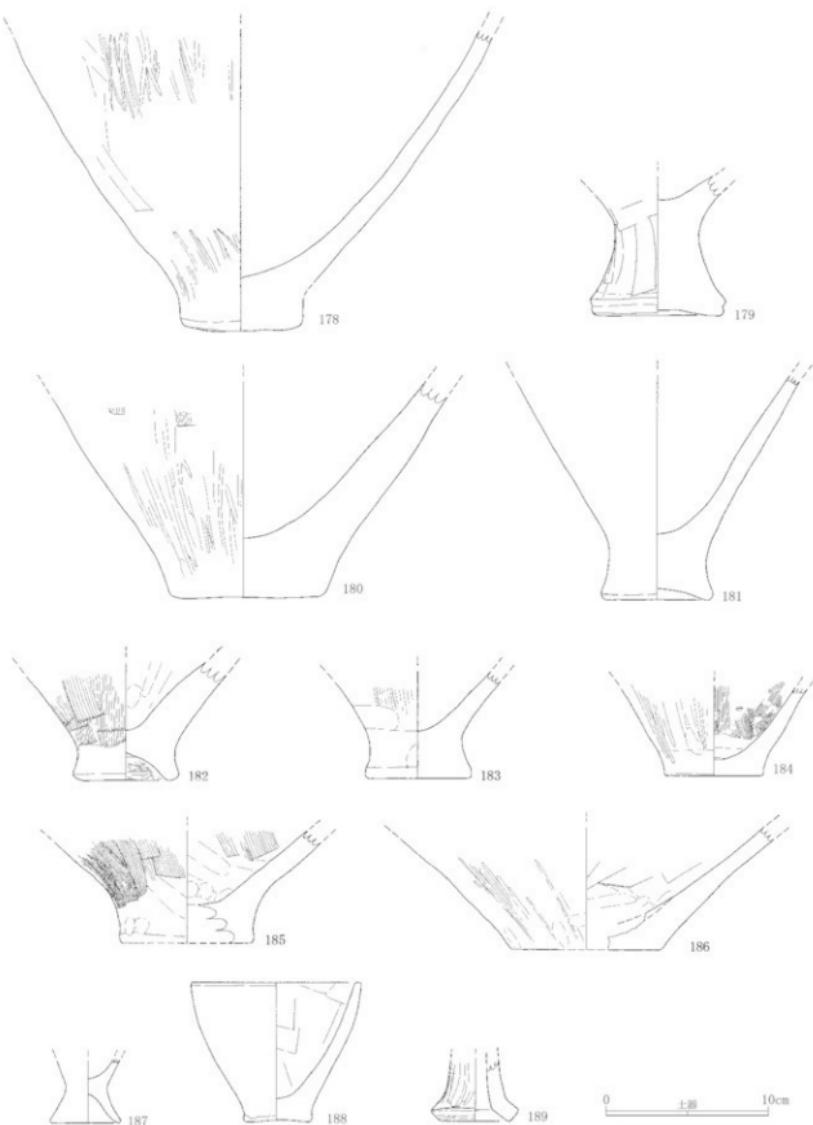
第42図 溝状遺構5土層断面図、出土遺物実測図（断面：S=1/20、土器：S=1/3）



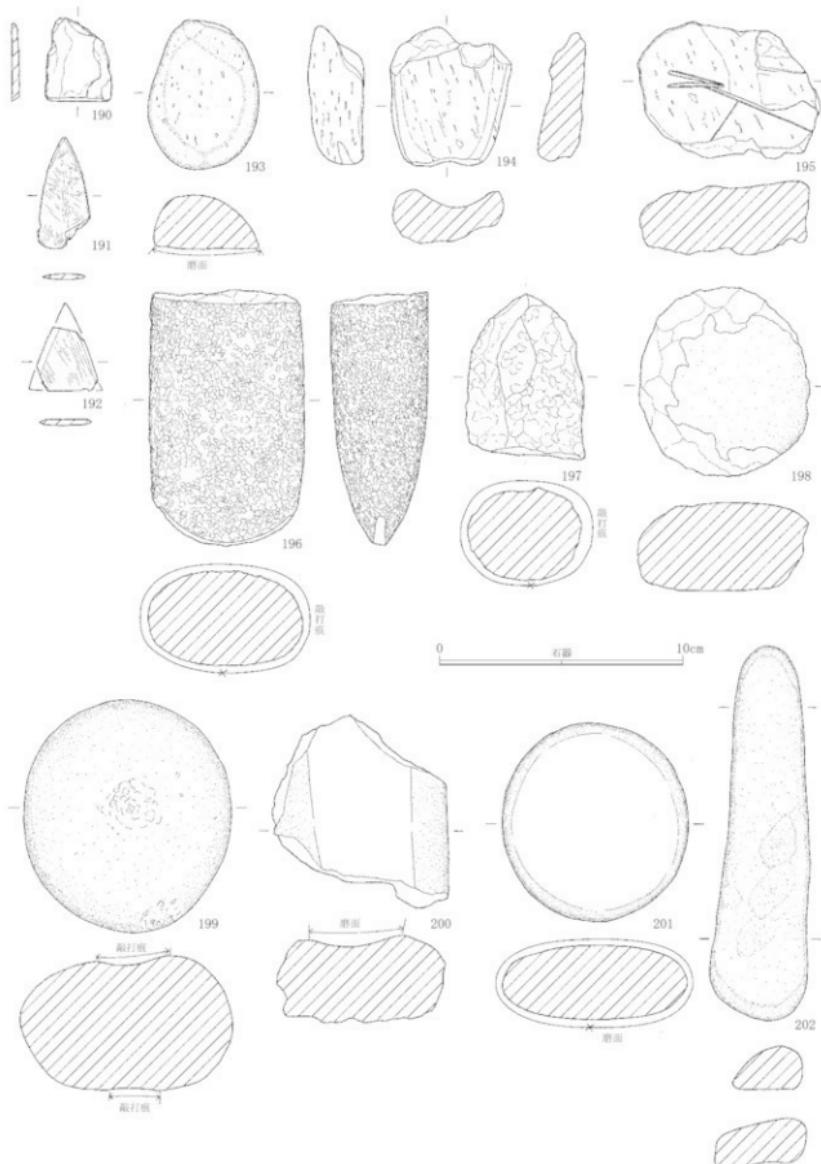
第43図 遺構外出土遺物実測図①(S=1/3)



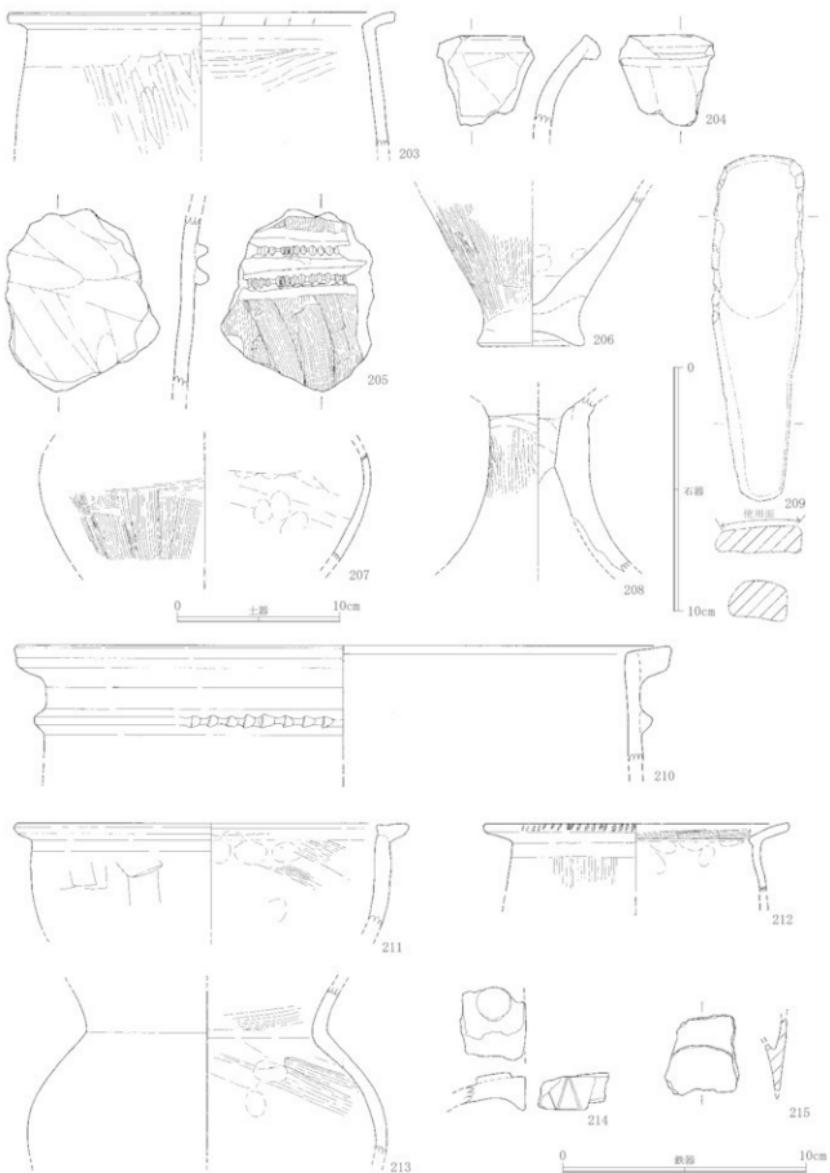
第44図 遺構外出土遺物実測図②(S=1/3)



第45図 遺構外出土遺物実測図③(S=1/3)



第46図 遺構外出土遺物実測図④(S=1/2)



第47図 遺構外出土遺物実測図⑤(土器:S=1/3, 石器・鉄器:S=1/2)

が認められる。胴部には刻目突帯が認められる。胎土から 164、165 ともに大隅産と考えられる。167 は西部瀬戸内系の壺である。短く内側に屈曲する口縁部形態が特徴的である。口縁部上面は平坦で、外面にはハケ状工具による X 字状の刺突文が施されている。西部瀬戸内産と考えられる。168、169 は須玖系の広口壺である。168 は大きく外方に開く器形で、端部はわずかに肥厚して丸みを帯びた形態である。169 は 168 より口縁部の開きが弱い器形で、口縁端部はヨコナデにより仕上げられていて端面中央がわずかに窪んでいる。頭部と胴部の境界は屈曲が弱い。胎土から、両者とも宮崎平野部産であると考えられる。170 は山ノ口式と思われる壺である。肩部には現状で 2 条の突帯が認められる。頭部はあまり強く開かずに立ち上がる形態である。胎土から宮崎平野部産と考えられる。171 は小川原式の壺である。肩部の破片で、勾玉状の浮文が貼り付けられている。胎土から豊後産と考えられる。172、174 は下城式壺である。172 は 2 条一組の沈線によって、横位、縦位の区画と重弧文が描かれている。174 は横位、縦位に複数条の沈線が描かれている。胎土から 172 は豊後産、174 は判然としないが宮崎平野部産と考えられる。173、177 は山ノ口式と思われる壺である。173、177 ともに波状文が認められ、177 はその上下に横位の沈線がめぐらされている。胎土から宮崎平野部産と考えられる。175 は伊予系の甕口縁部である。口縁端部が肥厚しており、胎土から伊予産と考えられる。176 は須玖系の壺である。扁平球形の胴部形態で胴部中位の外面には 2 個一組の円形浮文が認められる。内面全体に明瞭な指サエ痕跡が認められる。胎土から宮崎平野部産と考えられる。178、179 は山ノ口式の甕底部である。178 は厚みのある平底で、内湾しながら外方に大きく広がる胴部形態である。179 は中実脚台で、底部底面はわずかに上げ底状になっている。脚端部はヨコナデにより丁寧に整形されている。胎土から 178 は宮崎平野部産、179 は大隅産と考えられる。180 は入来式あるいは山ノ口式の甕底部である。器壁は全体的に厚みがあり、緩やかに外方へ広がる胴部形態である。胎土から宮崎平野部産と考えられる。181～183 は東北部九州系の甕である。181、182 はともに上げ底状の底部形態で脚端部の断面形態は丸みを帯びた形態である。胴部形態はいずれも外方に向かって直線的に広がる形態で、182 は器壁が厚い。183 の底部底面は平坦で、胴部は 181、182 同様の形態である。胎土から 3 点とも、宮崎平野部産と考えられる。184 は豊前あるいは瀬戸内系の甕底部である。平底で、胴部は底部から直線的に外方へ向かって開いている。外面はミガキによって調整がなされている。185 は在地系の甕底部である。底部は平底と思われ、胴部と底部の境界は屈曲する。胎土から宮崎平野部産と考えられる。186 は壺底部である。平底で胴部は底部から直線的に外方へ大きく開く形態である。胎土に角閃石が含まれるが、産地は判然としない。187 は小型甕の脚台である。胎土から宮崎平野部産と考えられる。188 は鉢である。小型の器種であり、底部は平底で、胴部はわずかに屈曲し緩やかに外方に立ち上がっている。口縁端部は丸くおさめられている。胎土から宮崎平野部産と考えられる。189 は器種不明である。中空の脚部片で、脚端部は短く外方に屈曲している。脚端部は「コ」の字形である。内外面ともミガキによる調整が施されている。190 は磨製石鏽の未製品で、成形段階の薄い剥片である。基部にあたる部分には、磨り切りによる明瞭な切断痕跡が認められる。191、192 は磨製石鏽である。191 は基部の一部を欠損している。長三角形で基部は緩やかに外湾する形態である。192 は正三角形に近い形態で、刃部先端と基部両端を欠損している。扁平で縁辺を鋭く研ぎ出すことで刃部が形成されており、断面形態がごく薄い算盤球

のような形状である。193～195は軽石製品である。193は下面が平坦になっている。何かを磨くあるいは削るような用途に用いられたものである可能性がある。194は上面がU字状に抉られている。形態から舟形製品の可能性もあるが、欠損の影響で判然としない。195は工具痕跡が認められる軽石である。工具痕跡は直線的で、ノミあるいは手斧のような直刃の工具によるものと思われる。196は磨石である。形状から磨製石斧の転用品であると判断できる。全面に敲打痕跡が残されたままであることから、敲打による成形途中に基部側が折損したために磨石に転用されたものだろう。刃部付近にのみ敲打痕を切る形で何らかの研磨作業に用いられた磨面が認められる。197は磨製石斧の未製品と考えられる。粗成形の段階のものとみられ、形状が不整形である。粗い敲打痕跡が全体に認められる。198～199は敲石である。198は石材の縁辺部が主に使用されたようで、縁辺部の剥離が著しい。199は上下面と縁辺部の一部に敲打痕跡が認められる。200は砥石である。上面に幅広で溝状の砥面が認められ、石斧など大型品の整形に用いられたものと考えられる。201は磨石である。扁平な形状で、上下面が全体的に使用されている。202は樹皮布敲石と思われる。細長い形態で、断面はカマボコ形ないし不整隅丸長方形である。203、206は東北部九州系の甕である。外方に強く屈曲する形態で内面の屈曲部も角を持つ。口縁端部は「コ」の字形である。胴部は、わずかに外方に向かってまっすぐに開いており、最大径が胴部中ほどにくる形態であると思われる。胎土から豊後産と考えられる。206は甕底部で上げ底状となっている。底部端部の断面形態は丸みがあり、外面の調整はハケ調整である。胎土から宮崎平野部産と考えられる。204は入来式の壺である。短く下方に下がる口縁部形態である。胎土から宮崎平野部産と考えられる。205は下城式甕の胴部である。横位に2条一組の刻目突帯がめぐらされている。胎土から豊後産と考えられる。207は瀬戸内系と思われる壺である。小型で胴部中位に最大径を持つ球形胴で、器壁が薄い。外面はハケのほか、ミガキで調整されている。瀬戸内産ではないかと思われる。208は器台である。裾部は外方へラッパ状に開き、やや直線的に立ち上がった後、上部は外方へ屈曲する形態である。胎土から宮崎平野部産と考えられる。209は樹皮布敲石である。整った形態で、使用面は平滑になっており明瞭に認識できる。使用面部分の左右側辺は細かい剥離によって整形されており、断面形態は使用面側で扁平な形態、基部側で略方形になっている。210は山ノロI式の甕である。わずかに上方に向かって屈曲する断面台形の口縁端部形態で、胴部上位には突帯がめぐらされているが、突帯に刻目が認められる。胎土から宮崎平野部産と考えられる。211は山ノロ式の甕である。上面がおおむね水平で中央部がわずかにくぼむ口縁部形態で、粘土紐を貼り付けることで形成されている。胴部はやや丸みを帯びた器形で底部に向かってすぼまっていく形態である。胎土に金雲母が目立つことから、都城盆地周辺あるいは大隅産と考えられる。212は伊予系の甕である。逆L字状に屈曲した口縁部で端部はわずかに肥厚している。口縁内側には突出部が、口縁部端面には刻目が認められる。伊予産と考えられる。213は壺である。小型で扁平球形の胴部から、頭部が緩やかに外方へ開きながら立ち上がる器形である。胎土から宮崎平野部産と考えられる。214は小川原式の壺である。口縁端部付近の破片で、口縁部上面に円形浮文が認められる。口縁端面は拡張し、下方へ垂れ下がるような形態をしており、鋸歯状の沈線文が認められる。215は鋳造鉄斧の破片と思われる。刃部から袋部付近の破片で、鋳造鉄斧を再加工し利器として使用されていたものと考えられる。

第1表 出土土器観察表①

局番号	番号	遺構等	種別	法量cm ( ) :復元	色調		焼成	調整		胎土 (上:下:量)	備考	実測 番号			
					外 面	内 面		外 面	内 面	A	B	C			
p. 12 第8回	1	横状 遺構	弥生 更	27.0	—	—	黒褐	灰褐	良好	ハケメ	ナデ、ハケメ	2 —	— 内面黒変、外面スズ 東北部九州系、在地産	42	
	2		弥生 更	(24.6)	—	—	にぶい黄褐	にぶい黄褐	良好	ハケメ	ナデ後ハケ	1 —	— 外面スズ、高師小槽含 東北部九州系、在地産	41	
	3	横状 遺構	弥生 更	—	—	—	にぶい黄褐	黄褐	良好	ハケメ	ナデ、ハケメ	1 微少	— 外面スズ 東北部九州系、在地産	80	
	4		弥生 更	(28.6)	—	—	黒	黒	良好	ハケメ	ナデ、板ナデ	微少	— 外面スズ、器盤薄い。 東北部九州系、在地産	40	
	5	弥生 更	(27.7)	—	—	—	灰褐	にぶい赤褐	良好	ハケメ、ナデ	ミガキ、ナデ	3 —	— 外面スズ、高師小槽含 東北部九州系、在地産	78	
	6	弥生 更	(21.6)	—	—	黒	オリーブ黒	10Y2/1	良好	ナデ	ミガキ、ナデ	1 少	— 外面スズ、東北部九州系、 東北部九州系	89	
	7	弥生 更	(28.9)	—	—	にぶい褐	にぶい褐	10Y2/4	良好	ナデ、ハケメ	ナデ	1 多	— 東北部九州系、在地産	45	
p. 13 第9回	8	弥生 更	(25.0)	—	—	にぶい黄褐	にぶい黄褐	10Y5/4	良好	ナデ、ハケメ	ナデ、ミガキ	— 2 微少	伊予系、伊予産	92	
	9	弥生 更	—	—	—	暗赤灰	褐灰	10Y4/1	良好	ナデ、ハケメ	ナデ	— 微少	— 外面スズ 下城式、豊後產	90	
	10	弥生 更	(30.0)	—	—	暗赤灰	灰褐	10Y4/1	良好	ナデ	ナデ	— 微少	— 外面スズ 下城式、豊後產	86	
	11	弥生 更	(24.0)	—	—	褐灰	にぶい黄褐	10Y5/1	良好	ナデ、ハケメ	ナデ、ミガキ	3 1 偏多	— 下城式、豊後產	58	
	12	横状 遺構	弥生 更	(25.6)	—	—	黒	黒褐	良好	ナデ	ナデ、ハケメ	— 1 多	— 外面スズ、穿孔有 山ノ口式、大隅產	88	
	13		弥生 更	N1.5/0	—	—	2.5Y3/1	—	—	—	—	—	須恵系、在地産	56	
p. 14 第10回	14	弥生 更	31.2	—	—	黄褐	にぶい黄	2.5Y6/4	良好	ハケメ後ナ デ	ナデ、ハケメ	1 少	— 須恵系、在地産	91	
	15	弥生 更	(15.2)	—	—	にぶい黄褐	にぶい黄褐	10Y3/1	良好	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	微少	— 須恵系、在地産	46	
	16	弥生 更	(19.6)	—	—	黒褐	褐	10Y3/2	良好	ハケメ、ミガ キ	ナデ、ハケメ、 ミガキ	1 少	— 須恵系、在地産	46	
	17	弥生 更	(19.8)	—	—	褐灰	灰黃褐	10Y5/4/1	良好	ナデ	ナデ	1 多	— 口縁部に沈継(7条)、折衷 (山ノ口+下城)、在地産	79	
	18	弥生 更	(23.8)	—	—	褐	にぶい赤褐	5Y6/4	良好	ハケメ後ミ ガキ	ナデ、板ナデ	6 多	— 口縁部に円形突起文 須恵系、豊後產	81	
	19	弥生 更	(25.0)	—	—	にぶい赤褐	にぶい赤褐	5Y6/5	良好	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ	4 微少	— 平底式、豊晩形 下城式、豊後產	82	
	20	横状 遺構	弥生 更	(29.0)	—	—	赤黒	赤黒	2.5Y2/1	良好	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ	1 1 偏多	— 制支文、円形浮文 小川原式、豊後產	87
	21		弥生 更	—	—	暗赤黃	黄褐	2.5Y5/2	良好	ハケメ、ミガ キ	ナデ	— 微少	— 脊部に勾玉状浮文 小川原式、豊後產	85	
p. 15 第11回	22	弥生 更	—	—	—	黄灰褐	褐灰	10Y6/2	良好	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ	— 微少	— 角闘石含 山ノ口式、在地産	84	
	23	弥生 更	—	—	—	明褐灰	明褐灰	7.5Y7/2	良好	ハケメ後ミ ガキ	ナデ	1 少	— 外面スズ 小川原式、豊後產	53	
	24	弥生 更	(6.0)	—	—	明褐	明褐	7.5Y5/4	良好	ナデ、ハケメ	ナデか?	— 多	— 外面放熱、スズ 下城式、豊後產	2	
	25	弥生 更	—	—	—	にぶい褐	褐	7.5Y6/3	良好	ナデ、ハケメ	ナデ	1 微少	— 東北部九州系、在地産	13	
	26	弥生 更	(6.0)	—	—	黄褐	黒褐	2.5Y5/3	良好	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	— 少	— ミガキ單位大きい。東北 部九州系、東北九州產	94	
	27	弥生 更	(5.7)	—	—	にぶい黄褐	暗褐	10Y3/3	良好	やや良	ナデ	1 微少	— 外面スズ 山ノ口式、在地産	31	
	28	弥生 更	—	8.2	—	黒褐	黒褐	5Y6/1	良好	ナデ	不明	— 1 1 多	— 山ノ口式、大隅產	14	
p. 15 第12回	29	横状 遺構	弥生 更	—	6.2	—	灰褐	灰褐	5Y6/2	良好	ナデ後ハケ	指オサエ、ナ デ	— 多	— 在地産	26
	30		弥生 更	—	7.4	—	黑褐	暗赤黃	2.5Y4/2	良好	ハケメ	指オサエ	— 少	— 下城式、豊後產	39
p. 15 第13回	31	弥生 更	—	(10.2)	—	灰褐	にぶい黄褐	5Y6/5	良好	やや良	ミガキ	ナデ	— 3 1 偏少	— 外面スズ、放熱 小川原式、豊後產	54
	32	弥生 更	—	(5.0)	—	にぶい褐	灰褐	10Y7/3	良好	ハケメ	ナデ	— 少	— 外面スズ 在地産	27	
	33	弥生 更	—	4.8	—	にぶい黄褐	淡黄褐	10Y8/4	良好	ナデ、ミガキ	ナデ、ハケメ	— 少	— 角闘石含 須恵系、在地産	35	
	34	弥生 更	—	(4.4)	—	灰白	灰白	2.5Y8/2	良好	ミガキ	ナデ、工具ナ デ	— 少	— 在地産?	12	

参考上:A5:宮崎小石,B5:長石・石英,C5:雲母

### 第3節 その他の遺構と遺物

第2表 出土土器観察表②

高さ 番号	遺構種類 番号	構造等	別	法量cm ( ) : 複元	色調	焼成	胎土 (上:下:量)		備考	実測 番号		
							調整					
							外面	内面	A B C			
p. 15 第11回	35	溝底直 構1	甕生 壺	— 8.2 —	に赤い黄褐色	黒	良	ミガキ	ナデ	微少多	— 在地産	
	36	溝底直 構1	甕生 壺	— (6.4) —	灰黄	暗灰黄	良好	ミガキ?	ナデ後ミガ	微多—	—	
				2.5YR7/2				キ			10	
p. 26 第20回	72	甕生 壺	(27.2) —	—	に赤い黒	やや 良	ミガキ	ハケメ後ミ ガキ	1 多	— 山ノ口式、在地産	103	
	73	溝底直 構2	甕生 壺	(22.2) —	黒褐	黒褐	良好	ナデ、工具 ナデ	ナデ、ミガ	2 少	外表面ス、豊前系、豊前産	
	74	甕生 壺	(22.8) —	—	黒褐	褐灰	良好	ナデ、ハケ	ナデ	50 + 同一 個体の可能性高	51	
	75	甕生 壺	— — —	赤灰	褐灰	良好	ミガキ	ハケメ後ミ ガキ	2 多	便後穿孔 東北地方系、在地産	102	
			2.5YR4/3	7.5YR4/1						泥質薄、 豊前系、豊前産	50	
p. 27 第21回	76	甕生 壺	(26.5) —	—	黒褐	に赤い黒	良好	ハケメ後ナ ダ	ナデ後板ナ ダ	微多—	波状文 山ノ口式、在地産	57
	77	甕生 壺	(26.8) —	—	灰	N4/0	灰褐	ナデ、ハケ	ナデ、板ナ	1.5 多	波状文 山ノ口式、在地産	79
	78	溝底直 構2	甕生 壺	(29.6) —	に赤い黒	5YR7/3	良好	ナデ	ナデ	1 多	外表面ス、吹きこぼれ痕跡 東北地方系、在地産	96
	79	甕生 壺	(23.2) —	—	黒褐	に赤い黄褐色	やや 良	板ナデ、ナ ダ	ナデ	4 少	外表面ス付着 下城式、豊後産	98
	80	甕生 壺	— 7.5 —	—	赤灰黄	黒褐	良好	ナデ、ハケ	不明	3 少	山ノ口式、入来系、在地産	32
p. 28 第22回	81	甕生 壺	— 8.9 —	—	に赤い黄褐色	オリーブ黒	良好	ナデ、板ナ ダ	不明	1 多	底部に畳目状压痕 山ノ口式、在地産	3
	82	甕生 壺	(27.0) —	—	に赤い黒	明褐灰	良好	ナデ	ナデ	微少少	口縁端部に浮文状凸輪 山ノ口式、在地産	100
	83	甕生 壺	— — —	—	黒褐	灰褐	良好	ハケメ後ミ ガキ	ハケメ	微少少	角閃石含、新土精良 在地産?	97
	84	甕生 壺	— — —	—	に赤い黒	に赤い黄褐色	良好	ナデ、ハケ	ナデ、ハケ	5 多	円形刻文突、円形浮文 下城式、豊後産	71
	85	溝底直 構2	甕生 壺	— — —	浅黄褐	黄褐	良好	ハケメ後ミ ガキ	ナデ、指オ サエ	微少少	須恵系?、在地産	99
p. 29 第23回	86	甕生 壺	— — —	—	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	良好	ミガキ	工具ナデ	微少少	角閃石含、豊前 or 濱戸 内系、豊前 or 濱戸内産	101
	87	甕生 壺	— — —	—	灰黄褐	灰黄褐	良好	ナデ、ミガ	ナデ	8 多	外表面剥げはじけあり 小川原式、豊後産	52
	88	甕生 壺	— 5.4 —	—	明褐灰	10YR4/2	良	ミガキ	指オサエ、 ナデ	1 多	胴部部位打ひき再使用 須恵系?、在地産	15
	89	甕生 壺	— 6.5 —	—	オリーブ褐	黄褐	良好	ハケメ後ミ ガキ?	指オサエ、 ナデ	1 多	下城式?、豊後産?	7
	90	甕生 壺	(24.8) —	—	褐灰	褐灰	良好	ハケメ後ミ ガキ	ナデ後ミガ	5 多	方向向孔、高脚小僧含 下城式、豊後産	49
p. 29 第23回	91	溝底直 構2	甕生 壺	— — —	黑	暗灰黄	良好	ナデ、指オ サエ	ナデ	多	—	—
	92	把手	— — —	N1.5/0							豊後産?	95
p. 31 第24回	98	甕生 壺	(26.6) —	—	明褐	浅黄褐	良好	ナデ、ハケ	ナデ、ハケ	3.5 多	外表面ス 東北地方系、在地産	129
	99	甕生 壺	(28.5) —	—	淡褐	に赤い黒	やや 良	ナデ	ナデ	1 1 多	高脚小僧含 山ノ口式、在地産	122
	100	溝底直 構3	甕生 壺	— — —	灰黄	灰黄褐	良好	ナデ、ハケ	ナデ、ミガ	5 多	下城式、豊後産	121
	101	甕生 壺	— 4.4 —	—	明褐	明褐	良好	ナデ、指オ サエ	ナデ	3 多	小型器皿 在地産	30
	103	甕生 壺	— 5.4 —	—	褐	5YR6/8	良好	ナデか?	ナデ	1 多	高脚小僧含 在地産	38
p. 31 第24回	104	溝底直 構6	甕生 壺	(26.2) —	オリーブ褐	に赤い黄褐色	良好	ナデ	ナデ	1 多	角閃石含 伊予系、伊予産	72
	105	溝底直 構4	甕生 壺	(6.2) —	2.5YR7/6	2.5YR2/1	良	ハケメ	ナデ	2 多	外表面熱剥離 東北地方系、豊後産	37
	106	甕生 壺	— — —	—	淡黄	暗灰黄	良好	ナデ、ハケ	ナデ、ハケ	1 1 多	口縁部柱状浮文痕跡 山ノ口式、在地産	124
	107	溝底直 構6	甕生 壺	(23.0) —	褐灰	灰黄褐	良好	タテ ハケメ	ナデ	1 多	円形浮文 下城式、豊後産	123
	108	甕生 壺	(23.7) —	—	灰褐	に赤い黄褐色	良	ハケメ	ナデ	4 2 多	下城式、豊後産	62
p. 35 第26回	109	溝底直 構1	甕生 壺	— — —	褐	褐灰	良好	ハケメ	ハケメ	1 1 多	外表面ス 下城式、在地産	106
	110	甕生 壺	— — —	2.5YR5/1	7.5YR4/1	7.5YR4/1	良好	ハケメ、指 オサエ	ミガキ	4 多	下城式、豊後産	105

車輪上: A:官窯小4. B:官窯石・石英、C:官窯母

第3表 出土土器観察表③

高齢度 番号	遺 構 種 別	法量cm ( ) : 沈 器 種 口径 底径 高さ	色 調	焼成		胎土 (上:下:量)	備 考	実測 番号			
				外 面							
				内 面							
p. 35 第26回	111 弥生 更	(29.0) — —	にぶい黄 7.5YR5/3	にぶい黄褐色 5YR4/4	良	ハケメ	工具ナデ 少	— 3 — 外面部、SC2と接合 下部式、後座	55		
	112 周溝状 遺構1	— 7.4 —	明褐色 7.5YR7/2	黒褐色 7.5YR3/1	良好	工具ナデ	ナデ 多	— 5 — 東北部九州系、東北部九 州系	107		
	113 弥生 更	(6.0) — —	灰黄 2.5YR7/2	暗灰黄 2.5YR4/2	良	ナデ	ナデ、指オ サエ 多	— 1 — 下城式?、在地座	59		
p. 36 第27回	116 周溝状 遺構5	— — —	黑褐色 7.5YR7/2	灰白 7.5YR7/1	良	ミガキ	ミガキ 少	— 1 — 外面部、東北部九州系、 東北部九州系	110		
	117 弥生 更	(6.7) — —	灰黄 2.5YR7/2	灰白 2.5YR8/2	良好	不明	ナデ 少	— 1 — 高師少・僧含 在地座	109		
	119 弥生 更	21.6 — —	浅黄 2.5YR7/4	にぶい黄 2.5YR6/4	良好	ハケメ後ナ デ	ナデ 多	折衷(人未・山之口+費 後)、在地座	69		
p. 38 第29回	120 周溝状 遺構7	— — —	にぶい黄褐色 10YR7/2	良	ナデ	ナデ 多	— 2 — 下城式、在地座	112			
	121 弥生 更	— 5.0 —	灰黄褐色 10YR6/2	にぶい黄褐色 10YR7/3	良好	ハケメ	ナデ? 多	— 3 — 下城式、後座	113		
	122 弥生 更	— — —	にぶい黄 7.5YR7/4	灰白 10YR8/2	良好	ヨコナデ	ハケメ 多	— 2 — 高師少・僧含 在地座	111		
p. 40 第31回	124 弥生 更	16.8 — —	暗赤褐色 10YR4/1	褐灰 5YR5/1	良好	ナデ、ヨコ ナデ、板ナ デ	ナデ 少	— 1 — 外面部、角閃石含、東 北部九州系、東北部九 州系	61		
	125 弥生 更	(25.7) — —	灰黄褐色 10YR4/2	灰白 10YR8/2	良好	ハケメ後ナ デ	ナデ、ミガ キ 少	— — 豐前系、在地座	77		
	126 弥生 更	(19.0) — —	灰褐色 5YR5/2	灰赤褐色 7.5YR6/2	良好	ハケメ後ナ デ	ナデ、ハケ メ 少	— 3 — 外面部ス 下城式、在地座	63		
p. 41 第32回	127 周溝状 遺構9	(24.6) — —	黃褐色 10YR5/6	明黃褐色 10YR6/8	良好	ナデ、ハケ メ、指オサエ ナデ	指オサエ、 ナデ 少	— 5 — 外面部ス 下城式、後座	117		
	128 弥生 更	18.0 — —	灰褐色 5YR5/2	灰褐色 7.5YR5/2	良	ハケメ後ナ デ	ナデ、ミガ キ、板ナデ 多	— — 頸系、在地座	60		
	129 弥生 更	— 5.0 —	褐灰 10YR4/1	褐灰 10YR4/1	良好	ハケメ	ナデ、指オ サエ 少	— 2 — 東北部九州系、在地座	118		
p. 42 第33回	130 弥生 更	— — —	にぶい黄褐色 5YR4/1	にぶい黄褐色 10YR3/3	良好	ミガキ、ナ デ	ナデ 少	— 5 — 下城式、後座	115		
	131 弥生 高坪	— 12.6 —	灰褐色 7.5YR4/2	褐灰 7.5YR4/1	良好	ハケメ	ナデ、ハケ メ 少	— 1 — 4方向透孔 下城式、後座	48		
	137 周溝状 遺構11	(30.0) — —	にぶい黄褐色 10YR5/3	良	ヨコナデ、 ハケメ、 ナデ	ナデ 少	— 2 — 下城式、後座	119			
p. 52 第41回	154 土坑3	— — —	にぶい橙 5YR7/3	褐灰 5YR4/1	良好	ナデ	ナデ 少	— — 入束式、在地座	129		
	155 土坑3	— — —	にぶい黄褐色 10YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	良好	ハケメ後ナ デ	ナデ後ミガ キ 多	— — 豐前系、在地座	128		
p. 53 第42回	156 周溝状 遺構5	— (6.0) —	明赤褐色 2.5YR3/6	暗赤褐色 2.5YR3/7	中や 良	不明	不明	— 5 — 外面部被 後座	36		
	157 弥生 更	(28.8) — —	にぶい赤褐色 2.5YR5/2	にぶい橙 2.5YR6/4	良	ナデ、ハケ メ	ナデ 多	— 1 — 外面部ス 東北部九州系、在地座	154		
p. 54 第43回	158 弥生 更	(18.7) — —	灰褐色 7.5YR5/2	灰褐色 5YR2/5	良好	ナデ、板ナ デ	ナデ、板ナ デ 少	— — 外面部ス 東北部九州系、在地座?	150		
	159 弥生 更	(24.0) — —	灰褐色 5YR5/2	褐灰 5YR4/1	良好	ハケメ	指オサエ、 ハケメ 多	— 3 — 豊前系、豐前座	149		
	160 包含物 鶴	(23.2) — —	赤褐色 2.5YR4/2	赤褐色 7.5YR4/2	良好	ナデ、ハケ メ	ナデ、ハケ メ 少	— 2 — 外面部ス、搬ね上口縁 豊前系、豊前座	148		
p. 55 第44回	161 包含物 鶴	(23.6) — —	褐灰 7.5YR1/4	褐灰 7.5YR4/2	良好	ナデナ ダ	ナデナ ダ、指オサエ、 ナデ 多	— 2 — 外面部ス(口縁部) 山ノ口式、都城皿地座	152		
	162 弥生 更	— — —	灰褐色 7.5YR4/2	灰褐色 7.5YR5/2	良好	ナデ	ナデ 多	— 4 — 下城式、後座	138		
	163 弥生 更	— — —	明褐色 5YR7/1	にぶい赤褐色 5YR7/3	良好	ハケメ、ナ デ	ナデ 多	— 5 — 下城式、後座	131		
p. 55 第44回	164 弥生 更	— — —	灰褐色 5YR6/6	灰褐色 7.5YR5/2	良好	ナデ	ナデ 多	— 2 — 山ノ口式、大隅產	140		
	165 弥生 更	(42.6) — —	灰褐色 5YR4/2	にぶい橙 5YR6/4	良	ナデ	ナデ 多	— 1 — 山ノ口式、大隅產	66		
	166 弥生 更	(37.7) — —	灰褐色 7.5YR5/2	灰褐色 10YR6/2	良	不明	ナデ 多	— 1 — 口縁上面棒状浮文、刻目 山ノ口式、在地座	75		
p. 55 第44回	167 包含物 鶴	(15.0) — —	灰褐色 7.5YR5/2	灰褐色 7.5YR5/2	良好	ハケメ	ナデ、ミガ キ 多	— 2 — 西部瓶口内系、西部瓶口 内系	76		
	168 弥生 更	(29.0) — —	灰褐色 2.5YR5/2	褐灰 5YR5/1	良好	ハケメ後ミ ガキ	ハケメ後ミ ガキ 多	— 1 — 頸系、在地座	142		
	169 弥生 更	(24.6) — —	灰褐色 7.5YR5/2	灰褐色 7.5YR5/2	良好	ハケメ後ナ デ	ハケメ後ナ デ 多	— 1 — 頸系、在地座	147		

卓船上、A:5宮崎小4、B:5長石・石英、C:5鷹母

### 第3節 その他の遺構と遺物

第4表 出土土器観察表④

高古宮 番号	遺構 等	種別	法量cm ( ) : 複元	色調		焼成	調整		胎土 (上:下:量)	備考	実測 番号	
				外 面	内 面		外 面	内 面	A	B	C	
		器	口径 底径 器高									
170		弥生 壺	— — —	にぶい 橙 5YR6/4	やや 良	ミガキ	ナデ、ハケ 少	— —	—	山ノ口式? 在地産	136	
171		弥生 壺	— — —	黄灰 2.5YR5/1	灰褐色 7.5YR5/2	良	ハケメ	ナデ後ミガ キ	— 2	— 刀部勾玉浮文 下城式、豊後產?	65	
172		弥生 壺	— — —	にぶい 橙 7.5YR6/2	黄褐色 5YR6/3	良好	ナデ、ハケ メ	ナデ	— 多	鏡面による重複文 下城式、豊後產?	135	
173	第44回 包含層 鶴	弥生 壺	— — —	にぶい 橙 5YR6/3	黄褐色 2.5YR5/1	良	ナデ	指オサエ	2 1	— 波状文 山ノ口式? 在地産	130	
174		弥生 壺	— — —	灰褐色 10YR6/2	黄褐色 7.5YR6/3	良好	ナデ	不明	1 —	— 横凹、縦位の線刻 下城式、在地産	137	
175		弥生 壺	— — —	にぶい赤褐色 2.5YR5/3	灰褐色 5YR6/2	良好	ナデ	ナデ	— 微 細	伊予系、伊予座	67	
176		弥生 壺	— — —	にぶい 橙 7.5YR6/3	黄褐色 7.5YR5/1	良好	ナデ後ミガ キ	指オサエ、 ナデ	— 微 細	胸部円形浮文 須恵系、在地産	64	
177		弥生 壺	— — —	灰褐色 10YR6/2	褐褐色 10YR5/1	良好	ナデ	不明	2 —	— 上下標位の縦割、波状文 山ノ口系? 在地産	132	
178		弥生 壺	— 7.5	灰褐色 7.5YR5/2	良好	板ナデ後ミ ガキ	ナデ後板ナ デ	— 2	1 内面コグ 山ノ口式、在地産	8		
179		弥生 壺	— 7.6	灰褐色 2.5YR6/2	黑褐色 2.5YR5/1	良好	板ナデ、ナ デ	不明	— 1 3.5 — 多	山ノ口式、大隅產	6	
180		弥生 壺	— 9.1	灰褐色 7.5YR5/2	灰褐色 7.5YR5/2	良好	ハケメ後ミ ガキ	ナデ	4 —	— 入束・山ノ口式? 在地 産	9	
181		弥生 壺	— 6.3	橙 5YR6/6	黄褐色 7.5YR7/6	良好	ハケメ後ミ ガキ	不明	3 — 微 細	外面ヌス 東北部九州系、在地産	5	
182		弥生 壺	— (6.4)	褐灰 10YR4/1	褐灰 7.5YR4/1	良好	ナデ、ハケ メ	ナデ	1 — 多	— 東北部九州系、在地産	17	
183	第45回 包含層 鶴	弥生 壺	— 6.3	にぶい黄褐色 10YR6/4	黄褐色 10YR4/2	良好	ナデ、ハケ メ	不明	— 1 — 多	— 東北部九州系? 在地産	19	
184		弥生 壺	— (6.0)	灰褐色 7.5YR5/2	灰褐色 7.5YR4/2	良好	ミガキ	ナデ、ハケ メ	3 1 — 小型前 or 須恵内系、豊前	25		
185		弥生 壺	— (8.2)	灰褐色 2.5YR7/2	黑褐色 2.5YR5/1	良好	ナデ後ハケ メ	ナデ後ハケ メ	少 少	前 or 須恵内系	20	
186		弥生 壺	— (9.4)	暗紅褐色 2.5YR4/2	暗紅褐色 2.5YR5/1	良好	ミガキ	ナデ後板ナ デ	— 多	— 角閃石含む	22	
187		弥生 壺	— (4.2)	にぶい黄褐色 10YR6/4	黄褐色 7.5YR5/4	良好	ナデ	ナデ	1 — 多	— 小型器種、在地産	24	
188		弥生 鉢	(10.4) 4.0	灰褐色 7.5YR7/2	浅黄 7.5YR7/3	良好	ナデ	ナデ、板ナ デ	1 — 多	— 小型器種 在地産	11	
189		弥生 鉢	— 4.2	灰褐色 7.5YR5/2	灰褐色 5YR5/2	良好	ミガキ	ナデ、ミガ キ	1.5 — 多	— 不明土製品、在地産	73	
203	第47回 包含層 鶴	弥生 壺	(23.8) —	暗赤褐色 10YR8/1	褐褐色 10YR5/1	良好	ミガキ、ナ デ	ミガキ、板ナ デ	1 — 多	— 外面ヌス 東北部九州系、豊後產	156	
204		弥生 壺	— — —	灰褐色 5YR6/2	灰褐色 10YR6/2	良好	ナデ、板ナ デ	ナデ、板ナ デ	3 — 多	— 入束式、在地産	161	
205		弥生 壺	— — —	にぶい赤褐色 5YR5/3	灰褐色 5YR5/2	良好	ハケメ、ナ デ	ナデ	— 4 — 多	— 下城式、豊後產	162	
206		弥生 壺	— 6.1	にぶい 橙 5YR7/3	橙 5YR7/6	良好	ナデ、ハケ メ	ナデ	4 — 多	— 外面ヌス 東北部九州系、在地産	158	
207		弥生 壺	— — —	灰褐色 2.5YR4/1	褐灰 7.5YR4/1	良好	ハケメ、ミ ガキ	ナデ	— 微 細 多	— 須恵内系? 須恵内產?	163	
208	第47回 包含層 鶴台	弥生 壺	— — —	灰褐色 10YR6/2	灰褐色 5YR5/2	良好	ミガキ、ナ デ	ミガキ、ナ デ	1 — 多	— 在地産	160	
210		弥生 壺	(40.2) —	にぶい赤褐色 5YR5/3	にぶい赤褐色 5YR6/4	良好	ナデ	ナデ	1 — 多	— 外面ヌス 山ノ口式、在地産	206	
211		弥生 壺	(24.2) —	褐灰 5YR4/1	灰褐色 7.5YR5/2	良好	板ナデ	ナデ、ハケメ、 指オサエ	1 3 2 多	— 山ノ口式、都城盆地 or 大隅產	205	
212		弥生 壺	(18.5) —	暗赤褐色 N3/0	暗赤褐色 7.5YR4/1	良好	ナデ、ハケ メ	ナデ、ハケ メ	3 1 多	— 外面ヌス、口縁端面刻目 伊予系、伊予座	68	
213		弥生 壺	— — —	灰褐色 7.5YR5/2	褐灰 7.5YR6/1	良好	ナデ	ナデ	— 多	— 在地産	169	
214	第47回 包含層 鶴	弥生 壺	— — —	にぶい赤褐色 5YR5/3	にぶい 橙 5YR6/3	良	ナデ	ナデ	— 多	— 口縁端面刻文、上面円形 浮文、小川原式、豊後產	166	

\*胎土: Aが宮崎小石、Bが長石・石英、Cが雲母

第5表 出土石器・鉄器觀察表

実載頁 図番号	番号	遺構等	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g.)	備考	実測 番号
p. 16 第 12 図	37	溝状遺構 1	磨製石鏃	頁岩	3.6	1.7	2.5	1,5	基部わざかに内溝	176
	38		敲石	砂岩	6.8	6.6	5.9	380	全体の2/3が黒度	176
	39		磨石	砂岩	7.2	6.3	3.1	200.0	下端部の使用が顕著	171
	40		敲石	砂岩	7.2	5.5	3.9	240.0	上面に敲打痕	220
	41		敲石	砂岩	9.7	5.3	3.6	260.0	磨製石斧破損品転用	174
	42		磨製石斧	砂岩	10.8	6.1	3.5	320.0	使用による折損?	172
	43		敲石	砂岩	9.2	4.6	3	180.0	磨製石斧転用	173
	44		磨製石斧(柄付)	砂岩	20.1	7	5.2	1140.0	完形	224
	93		輕石加工製品	輕石	6.7	6.8	3.9	20.0	加工痕有	222
p. 29 第 23 図	94	溝状遺構 2	磨製石鏃	頁岩	1.9	1.7	0.2	0.9		221
	95		砥石	砂岩	16.8	11.5	4.2	1300.0	上面が使用面	177
p. 31 第 24 図	102	溝状遺構 3	樹皮布敲石	砂岩	8.0	3.6	1.8	66.3	使用面は平坦	179
p. 35 第 26 図	114	周溝状遺構 4	輕石加工製品	輕石	6.2	7.9	5.4	52.0	穿孔による加工有	181
p. 36 第 27 図	115	周溝状遺構 5	敲石	砂岩	13.3	6.6	3.8	560.0	磨製石斧未製品転用?	182
	118		浮き?	輕石	6.5	7.9	2.7	27	縄を掛けるための溝らしき加工有	184
p. 38 第 29 図	123	周溝状遺構 8	砥石	砂岩	11.50	10.4	6.90	800.0	敲打痕と溝状で幅広の砥面有	185
	132		敲石	砂岩	11.0	3.8	3.1	160.0	敲打痕	223
p. 40 第 31 図	152	周溝状遺構 9	土坑 2	砂岩	6.4	8.4	3.6	200.0	目の細い砂岩製、上面、側面に使用面有	219
	190		磨製石鍬未製品	頁岩	3.4	2.7	0.3	5.2	基部に磨り切り切削の加工痕有	189
p. 57 第 46 図	191	包含層	磨製石鏃	頁岩	4.5	2.2	0.3	3.0	基部わざかに外溝	187
	192		磨製石鏃	頁岩	2.6	2.4	0.2	2.3	正三角形に近い、基部直線的	199
	193		磨石?	輕石	6.2	4.5	2.2	13.5	下面が平坦	216
	194		舟形輕石製品?	輕石	5.8	4.8	2.1	11.3	横断面U字形	195
	195		輕石加工製品	輕石	5.6	7.5	3.0	26.5	工具痕のある輕石	214
	196		磨石	砂岩	10.5	6.4	3.9	440.0	全面に敲打痕、刃部は敲打痕を切る磨面有 製作途中に破損を転用か?	193
	197		石斧未製品?	砂岩	6.8	5	3.8	180.0	全面に粗い敲打痕有	175
	198		敲石	尾鈴山巖性岩	7.70	7.0	3.70	320.0	敲打によると思われる剥離	210
	199		敲石	砂岩	9.5	8.5	5.5	680	上面に敲打痕	209
	200		砥石	砂岩	7.90	7.20	3.5	220.0	幅広い溝状の砥面	215
	201		磨石	砂岩	5.1	7.6	3.0	260.0	磨面はやや丸味を帯びている	191
	202		樹皮布敲石	砂岩	15.4	4.0	2.1	160.0	敲打面顕著でない	211
p. 66 第 47 図	209	包含層	樹皮布敲石	砂岩	14.2	3.7	1.7	120.0	使用面は平坦、左右を剥離で整形している	218
	215		造鉄斧片	鉄器	3.30	3.1	0.9	11.4	刃部から袋部に掛けての破片	224

### 第3節 その他の遺構と遺物

第6表 出土木製品・木材観察表

実教員 団番号	指標 番号	遺構等	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	木材	備考	実測 No.
p. 17 第15回	45	溝状遺構1	石斧柄	67.1	8.8	7.0	コナラ属アカガシ亜属	ほぼ完形	225
	46		鋸	33.8	14	3.0	コナラ属アカガシ亜属		27
p. 18 第14回	47	溝状遺構1	不明木製品	23.6	20.3	2.4	タスノキ	縁辺部に孔有	17
	48		柄	80.0	3.9	3.3	アワブキ属	中央付近に穿孔?有	20
	49		箱形不明木製品	9.8	8.4	4.5	ヤマグワ	用途不明、装飾用?の突出部有	28
p. 19 第15回	50	溝状遺構1	不明棒状製品	16.5	1.3	1.1	イヌノキ	全体を丁寧に削取りし平滑	60
	51		不明木製品	10.7	3.0	2.2	ヒサカキ属	全体に加工痕跡有	8
	52		不明木製品	16.7	2.2	1.7	ハイノキ属	全体に加工痕跡有	68
	53		加工痕のある木材	28.4	10.4	2.5	エノキ属	二又状の木材、一部に加工痕跡有	31
	54		不明木製品	8.4	6.2	1.4	コナラ属アカガシ亜属	右側辺に加工痕顯著	66
	55		不明木製品	13.40	10.6	3.10	ツガ属	右突部上辺に抉り状の加工痕有	69
	56		加工痕のある木材	60.7	2.4	2.6	エノキ属	二又状の木材	10
p. 20 第16回	57	溝状遺構1	加工痕のある木材	31.70	14.7	14.4	ヤマグワ	側面、上面に加工痕顯著	34
	58		木板	32.5	4.4	4.1	カキノキ属	下端部加工痕跡、樹皮残存	2
	59		木杭	7.6	5.8	3.1	サクラ属	先端部に加工痕顯著	59
	60		木杭	30.10	4.90	3.6	コナラ属アカガシ亜属	先端部のみ加工、上部は樹皮残存	19
	61		木杭 or 建築部材	152.7	12.5	6.8	ヤマグワ	みかん削材、手斧状工具の調整痕有	53
	62		木杭	20.5	4.5	3.8	アワブキ属	先端部加工痕有	5
p. 21 第17回	63	溝状遺構1	加工痕のある木材	28.3	3.1	1.3	シイ属	先端部加工痕有、樹皮残存	32
	64		木杭?	36.3	3.5	1.5	ノリウツギ	先端部加工痕有	13
	65		加工痕のある木材	36.7	3.7	2.8	シイ属	上端に加工痕有	11
	66		加工痕のある木材	32.8	5.7	5.4	マツ属複雜管束亜属	端部に加工痕有	4
	67		木杭	65.3	6.1	4.5	ヤマグワ	みかん削材、手斧状工具の調整痕有	54
	68		不明木製品	27.7	7.7	2.6	マツ属複雜管束亜属	木栓状の形態、端部炭化している	55
	69		加工痕のある木材	51.5	8	3.5	エノキ属	端部に加工痕有	29
p. 22 第18回	70	溝状遺構1	加工痕のある木材	53.6	5.8	3.6	サクラ属	端部に加工痕有	1
	71		加工痕のある木材	47.6	5.3	4.5	ハイノキ属	端部に加工痕有、笄の柄未製品?	21
p. 29 第23回	96	溝状遺構2	木杭	9.0	3.3	2.5	広葉樹	先端部に加工痕顯著	67
	97		木杭	23.3	6.0	4.9	ハイノキ属	先端部に加工痕顯著	52
p. 41 第32回	133	周溝状 遺構10	木杭	40.9	7.1	1.9	カヤ	板状、両端、使用の溝れ有。	63
	134		加工痕のある木材	38.7	3	2.4	カキノキ属	端部に加工痕有	62
	135		木杭	23.0	5.4	4.8	アワブキ属	先端部に加工痕有	65
	136		加工痕のある木材	35.4	8.6	5.5	アワブキ属	端部に加工痕有	64
p. 47 第37回	138	杭列	木杭(杭7)	60.1	15.2	7.1	クリ	みかん削材、先端、側面に工具痕顯著	40
	139		木杭(杭1)	49.8	13	7.5	クリ	みかん削材?、先端、側面に工具痕顯著	35
	140		木杭(杭9)	36.8	10.7	7.9	ヤマグワ	先端部付近に工具痕顯著	42
p. 48 第38回	141	杭列	木杭(杭3)	37.4	11.7	7.7	ヤマグワ	先端部付近に工具痕顯著	36
	142		木杭(杭12)	25.0	9.9	6.5	シイ属	全体に工具痕顯著	45
	143		木杭(杭11)	42.9	7.4	5.9	シイ属	先端工具痕顯著、側面にコの字形の抉り有	44
	144		木杭(杭17)	24.0	6.3	6.0	シイ属	先端部工具痕、側面にコの字形の抉り有	50
	145		木杭(杭15)	20.4	6.5	4.9	タブノキ	全体的に工具痕顯著	48
	146		木杭(杭13)	18.8	7.4	4.4	シイ属	先端部のみ加工	46
p. 49 第39回	147	杭列	木杭(杭10)	29.2	9.2	5.5	シイ属	半裁材、先端部の片面を加工	43
	148		木杭(杭16)	22.4	8.4	6.4	タブノキ	先端部のみ加工	49
	149		木杭(杭8)	21.4	10.3	5.3	ヤマグワ	先端部のみ加工	41
	150		木杭(杭14)	10.6	7.1	4.3	シイ属	半裁材、先端部の片面を加工	47
	151		木杭(杭18)	20.1	6.0	4.3	タイミンタチバナ	先端部のみ加工	51
	152		木杭(杭5)	44.8	7.5	5.1	ヤマグワ	先端部のみ加工	38

## 第IV章 まとめ

### 第1節 周溝状遺構について

周溝状遺構とは、周溝が円形・方形・隅丸方形・楕円形などの平面形態をもち、周溝で画された内側部分において施設を持たない遺構のことである。周溝状遺構が認められる時期については、主に弥生時代中期～後期にかけてあり、特に後期から始まり後期の内に終わる事例が顕著である。宮崎県内についても、当該時期に多く認められる遺構である。周溝状遺構の分布については、九州・四国・近畿・北陸・関東地域で確認されていることから、全国的に広がる可能性が高く、九州においては北部九州地域に多く認められる。南九州地域においても周溝状遺構は一定数が確認されており、宮崎県内では都城盆地に密度が高いことが指摘されている(片岡 1994)。宮崎市内においては、8 遺跡 28 例が確認されている。市内で検出されている周溝状遺構の多くは、単独で存在するものもしくは、少数の周溝が連結するものであり、中須遺跡と同様に複数の周溝が連結している例としては、現状のところ桜町遺跡のみである。周溝状遺構の性格については、周溝墓、住居、平地式建物、祭祀施設等々の諸説が想定されており、未だ定まっていない状況である(片岡 1989・1991・1994・1996、岡本 1998)。

中須遺跡で検出された周溝状遺構は、出土遺物より概ね中期中葉～後葉に位置づけられることから、比較的古い段階に属するものと考えられる。そのため、本遺跡の周溝状遺構を検討することは、周溝状遺構の出現過程を知るうえで非常に重要であると考える。ここでは検出された周溝状遺構の観察で得られた特徴についてまとめた上で、周溝状遺構の機能ないし性格について若干の考察をおこないたいと思う。

中須遺跡における周溝状遺構の特徴については、平面形態の種類として円形、不整形な円形、隅丸方形があり、一辺の溝を共有させ複数の周溝状遺構が連結するものと 2 基の周溝状遺構が連結するもの、単独で存在するものがある。周溝で画された内側には、柱穴あるいは土坑などの痕跡は見られない。また、周溝状遺構の中心部から周溝内への土の流れ込みも認められなかつたため、内側部分において盛土がおこなわれていた可能性は低い。周溝内の埋土は概ね自然堆積であり、人為的な埋め戻し痕跡は見られなかった。周溝はある程度埋没した後に、再掘削されている痕跡が確認できることから、一定期間周溝として機能していたものと考えられる。周溝底面は平滑に構築されているものが多く、周溝幅の細いものは底面の彎曲が強い。周溝内の壁面や底面についても、何らかの施設等の痕跡は見い出せなかった。出土遺物については、弥生土器と加工木材が検出されており、弥生土器は甕・壺・高坏の順に出土数が多く、加工木材は木杭や加工痕の残る不明部材である。弥生土器については、完形品がなく、ススの付着や吹きこぼれ痕跡が認められる特徴から、日常的に使用した土器が周溝埋没過程に廃棄されたものと思われる。

中須遺跡で検出された周溝状遺構の最大の特徴は、複数の周溝状遺構が連結して存在することである。周溝の切り合いが見出せたものは周溝状遺構 3・4 の一例のみで、周溝状遺構 4 埋没後に周溝状遺構 3 が構築されている。その他、単独で存在する周溝状遺構 5 と 11 以外の周溝状遺構においては周溝の一辺が連結しており、埋土の一部を共有せるものがあることから、

一定期間、併存関係にあったと判断できる。

併存関係にあると考えられる周溝状遺構を列挙すると、周溝状遺構1・2、周溝状遺構6・7、周溝状遺構7・8・9・10となる。ただし、周溝状遺構1・2、周溝状遺構6・7、周溝状遺構9・10については、一方の周溝がもう一方の周溝に取り付くような平面形態を呈していることから、それぞれ、前者の周溝状遺構の存在を前提として後者の周溝状遺構が付加されているように観察できる。平面形態の状況から見た掘削順を整理すると、周溝状遺構1→周溝状遺構2、周溝状遺構6→周溝状遺構7、周溝状遺構9→周溝状遺構10となる。また、周溝状遺構1・2、周溝状遺構7・9、周溝状遺構11においては再掘削の痕跡が認められた。このことから、周溝状遺構は周溝の掘り直しをおこないながら継続的に使用されていたことが推察される。一方で、周溝状遺構8のように一時期併存関係にあるが、埋没後に再掘削されないものも認められる。中須遺跡で検出された周溝状遺構は、構築段階の僅かな時間差が見い出せるものの、使用段階においては継続的な併存関係にあったと考えられる。

以上を踏まえた上で、周溝状遺構の性格について考察をおこないたい。まず、周溝墓という可能性についてであるが、中須遺跡で検出された周溝状遺構の様相から考えると、いずれの周溝状遺構にも土坑などの痕跡が見られず、周溝堆積土に盛土の崩落土の痕跡も見られない。また、複数の周溝が連結することや、周溝内を再掘削する造作が見られることからも周溝墓と様相を異にする。出土遺物にかんしても、日常的な弥生土器と加工木材あるいは木杭であることから周溝墓にともなうものとは到底考えられないため、周溝墓である可能性は低い。

次に、祭祀施設という可能性についてであるが、遺構の形状からは祭祀施設であるかとどうかについて判断できる材料がない。出土遺物の中にも、祭祀施設と認定できるような遺物が認められないため、祭祀施設とも考えることはできない。

最後に住居ないし平地式建物という可能性についてであるが、中須遺跡で検出された周溝状遺構は柱穴等の上部構造を推測できる痕跡が見出せず、検出した周溝状遺構の中で最小のものは長軸2.1mで床面積が非常に狭い。また、連結する周溝状遺構は併存関係にあり、周溝内を埋め戻すことなく周溝として機能していたことから考えると、住居としての利用は考えにくい。平地式建物については壁立ちの構造が想定されているが、中須遺跡の周溝内において何らかの施設を示すような痕跡は見出せなかった。前述のとおり周溝状遺構は連結し、それらが併存関係にあること、周溝としての機能を継続的に果たしていたことを考えると、周溝の内外に施設の痕跡を残さず、また人為的に埋めることなしに壁を構築することは非常に難しいと思われる。

以上のように、中須遺跡で検出した周溝状遺構の性格について遺構の構造や遺構内の出土遺物からは明らかにできなかった。しかし、周溝状遺構を含めた調査区内の遺構の性格を考える上で非常に示唆的のが、出土遺物の中に未加工や加工痕のある木材や石材、それらを加工した道具である石器や鉄器が出土していることである。このことを積極的に解釈すると、当遺跡周辺は生活用具製作の場であり、作業場あるいは材料及び道具を貯蔵するための施設の存在が想定される。周溝状遺構に隣接して検出された掘立柱建物について、周辺の状況から住居でない性格、すなわち倉庫ないし作業場としての機能を考えうるとすれば、周溝状遺構もまたそれに近しい性格を持つことが考えられる。今回、周溝状遺構の性格について新たな可能性を指摘できた。その成否については、今後の調査成果を踏まえた上で検討を重ねる必要がある。

## 第2節 弥生時代中須遺跡の性格

今回の調査は、産母川の河川改修とともに実施された事前の埋蔵文化財発掘調査である。今回の調査では多くの遺構や遺物が確認されたが、そのほとんどのものが弥生時代に位置付けられるもので、その他の時期に属すると明確に判断できるのは、1条の溝状遺構のみであった。したがって、ここでは弥生時代の中須遺跡について調査成果を中心としながら、その性格について検討することでまとめとしたい。

遺跡は、宮崎市街地を流れる大淀川の作用によって宮崎市海岸部に発達した4本の砂丘列の内、縄文時代後晩期に形成されたと見られる第1・2砂丘の間にある砂丘間低地に所在する。弥生時代当時には、第2砂丘が海岸に接していたと考えられているため、遺跡のある砂丘間低地は、海岸のすぐ後背にある低地であり、現在の一つ葉入り江のような入江、あるいは低湿地のような地形であったと思われる。遺跡はその中において第1砂丘から突き出したわずかに高まった微高地の先端付近に位置していた。

今回の調査で出土した土器は、入来式段階から山ノ口式段階にかけての資料である。一部に後期初頭にまで下る可能性があるものの、最も中心となる時期は山ノ口I式段階である。したがって、今回の調査で確認された各遺構は、弥生時代中期中葉から後葉にかけてに位置付けられ、中でも弥生時代中期中葉がその中心と捉えられる。遺物の出土状況からは、各遺構間で積極的に時期差を認めうるような状況でなく、多くの遺構がある程度の期間併存しながら存在していたものと考えられる。

今回検出された遺構は、周溝状遺構、溝状遺構、掘立柱建物、杭列、土坑、ピットである。これら遺構はそれぞれまとまつた分布状況を示していた。

溝状遺構1・2は、微高地を囲むように掘削されていた。遺構は、この2本の溝より標高の高い側、すなわち微高地の平坦面側に集中して検出されていることから、溝状遺構1・2は土地の区画を目的として掘削されたものと判断される。11基確認された周溝状遺構は、溝のすぐ西側に南北に連なるように分布していた。切り合いや掘り直しがおこなわれながら、同じ場所に継続的に配置されたことがわかる。掘立柱建物は、今回の調査においては、溝状遺構1・2で区画された最も内側に近い位置に配置されていた。確認された3棟の掘立柱建物は、いずれも東西方向に長軸を持ち、ほぼ等間隔に南北に並んでいる状況であった。6基確認された土坑は、周溝状遺構と掘立柱建物の中間に、ちょうど掘立柱建物を囲むようにして分布していた。杭列は、溝状遺構1・2で区画された内と外がつながる通路状部分のちょうど外側において確認された。

こうした各遺構の一定の場所への配置の継続性からは、各種の遺構がそれぞれに役割を異にしながら計画的に配置されている様子をうかがうことができ、当地が何らかの役割・意味をもつ明確な場として機能していたことを推測させる。このほかにも、溝状遺構1に設置された貯木遺構と思われる部分などにも注目される。

今回の調査での出土遺物の中心は弥生土器である。器種構成は、甕、壺がほとんどでそれによく少量の高杯と小型の鉢が加わる。甕にみられる二次的な強い被熱痕跡やススの付着、吹きこぼれ痕跡の存在などからみて、これらの土器は日常生活に供されたものと言える。この時期の宮崎平野部の特徴として、搬入土器が多いことが從前指摘されているが、中須遺跡において

も同様の状況であった。今回の調査で出土した土器を、胎土を中心としながら検討した結果、おおよそ半数ほどが他地域からの搬入品であることが明らかとなった。最も多かったのは、下城式、小川原式などの豊後系の土器である。このほかの産地には、豊前を含む東北部九州、瀬戸内、大隅などが認められた。これら土器の系統については、在地の入来・山ノ口系のものよりも他地域系統のものが多く、甕、壺とも須玖系など東北部九州系のものが多い数を占めていた。これらのほとんどは在地産であったことから、中須遺跡においては須玖系を中心とする東北部九州の土器を受容し在地生産していたものと思われる。これらは器壁も厚く、形態にも若干の変容が認められ、在地化が進んでいる様子が看取できる。豊後系の下城式、小川原式は豊後産のものが多くどの器種にも安定的に存在する。高坏はいずれも豊後系、豊後産であった。当地域における土器生産と流通は、産地と系統が複雑に交錯する状況であり、今後これらの詳細な検討をおこなったうえで、その動態を明らかにする必要がある。

石器は、製品としては磨製石鏃、石斧、敲石、磨石、砥石が出土している。数量的には敲石、磨石、砥石が多い。そのほか、いわゆる樹皮布敲石とされる石器も確認されており、注目される。また、海岸部の遺跡で多く見られる加工痕跡のある軽石も認められたが、製品か否か明確でない。加えて、未製品が多く認められることにも注目できる。石斧の未製品や磨製石鏃の未製品が多く見られた。特に磨製石鏃にかんしては、素材となる剥片を得るために大型の石材から、素材剥片、三角形に近い形まで整形されている剥片など、製作各段階の資料が認められた。石斧は製作途中で折損したことなどから敲石などへ転用されたものなども存在する。砥石の中には幅の広い溝状の使用面を持つものが存在しているが、これらは石斧の製作に使用されたものである可能性がある。

木製品、木材も一定量出土している。明確に製品と認めうるものの中では木杭が最も多かった。その他の製品は少なく、石斧が装着された柄、鉤、アカ取り状の不明木製品などが見られたのみであった。これ以外は、加工痕跡が認められる木材であり、主に棒状製品の両端部に切断時のものと考えられる工具痕跡が認められる。柄状のものや二叉状の形態となる木材なども見受けられ、何らかの製品に加工する以前の未製品であったのではないかと考えられる。これらの木材は溝状遺構1に設置された貯木施設と見られる遺構から多く出土しており、加工に際して水漬けされていた木材である可能性が考慮される。今回の調査で最も注目を集めたのが、柄付の石斧である。ほぼ完形で、当時の石斧の装着方法や使用法を知る上で重要な情報を得ることができる資料である。出土した木製品・木材については、樹種同定を実施した。使用されている木材は、エノキ属、シイ属、ヤマグワなど二次林種が最も多く、合わせて、わずかではあるがセンダン、タイミンタチバナなど海岸の要素を持つ樹種なども確認された。このことから、中須遺跡での木材使用は周辺に形成された二次林に生育する樹木を中心におこなわれていたとみなされた。この他に、ヒヨウタンの果皮や樹種不明であるが樹皮が出土している点にも注目しておきたい。

鉄器は、鋳造鉄斧片が1点確認された。遺構外からの出土ではあるが、今回の調査においては、弥生時代以外の時期の遺物はほとんど認められないこと、遺物自身の形態的特徴から見て、弥生時代の鋳造鉄斧片として考えてよいと思われる。鋳造鉄斧の破片を再加工し利用した加工具と見られる。中須遺跡で出土した木製品、木材に残された加工痕跡は、いずれも鋭利であり

その加工には鉄器が用いられていたものと考えられたが、その加工に今回出土した鋳造鉄斧片などが用いられていたものと考えられる。

最後に弥生時代中須遺跡の性格について、上記調査成果をもとに検討しておく。中須遺跡周辺の土地利用は、基本的に遺跡の東西にある第1・2砂丘上を居住地として、そして砂丘間の低地については、湿地的な環境を活かした稲作を中心とする食糧生産の場として利用されていたと考えられている。しかし、中須遺跡では周溝状遺構をはじめとする各種遺構が検出されており、食糧生産の場でなかったことは明らかであると言える。また、今回の調査においては堅穴住居などの居住に関わる遺構も確認されておらず、居住の場であることもまた積極的に肯定できない。近隣の砂丘上において当該時期の堅穴住居が確認されていることから見ても、立地的にも居住の場はやはり砂丘上であったと考えるのが自然である。

こうした状況の中、中須遺跡の性格を考える上で最も注目されるのが、石器や木器の未製品の存在である。石器に関しては、上述の磨製石鏃や石斧の未製品のほか、玉髓やチャートといった石材も確認された。木器も製品よりも未製品が圧倒的に多く、溝状遺構1など加工前の木材を貯蔵していたと思われる場所も存在する。これらの調査結果を踏まえれば、中須遺跡は生活用具を製作する生産の場として機能していたと考えるのが最も妥当に思われる。木器の加工に用いられたと思われる鉄器や、石器製作に用いられたと思われる磨石や敲石などの存在もこれを裏付けるものと言える。このほか、樹皮布製作に用いられたと目される樹皮布敲石と類似した石器の存在からは、木器、石器のみならず、様々な生活に関わる用具が製作されていたことを想起させる。今回の調査では周溝状遺構や掘立柱建物の用途については明確にすることことができなかつたが、前節で検討したように、周溝状遺構や掘立柱建物は生産に関わる素材や用具などの物資を保存、保管するなどの機能を持った施設であった可能性が考慮される。

当地は、海岸に近く、素材となる石材や、加工工具である鉄器などを入手するための交易に至便な場所であったに違いない。また、低地という環境であり木材の貯蔵や加工に必要な水を得やすいという環境も相俟って、当地が物資の集積と生活用具製作が同時におこなわれる場所として選択されたものと考えることができる。

今回の調査によって、弥生時代における宮崎市海岸部の様相の一端が明らかにされた。しかしながら、各遺構の具体的な機能と配置の意味など検討されるべき事柄も残された。加えて、砂丘上の居住地を含めた集落全体の様相と、物資の入手などにかかる他地域との交流のあり方など今後検討されなければならない課題は多い。

#### 《参考文献》

- 石川悦雄 1984 「宮崎平野における弥生土器編年試案—素描 (Mk. II)」『宮崎考古』第9号  
 稲岡洋道編 2000 『黒太郎遺跡』宮崎市文化財調査報告書 第45集、宮崎市教育委員会  
 上原真人 1991 「農具の変遷 (鍔と鋤)」『季刊考古学 稲作農耕と弥生文化』第37号 雄山閣  
 岡本淳一郎 1998 「弥生時代周溝遺構に関する一考察」『紀要 富山考古学研究』創刊号 財团法人富山県  
 文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所  
 片岡宏二 1989 「周溝状遺構」の検討 (その1) 『福岡考古』第14号、福岡考古懇話会

## 第2節 弥生時代中期土器の性格

- 片岡宏二 1991「周溝状遺構」の検討（その2）『福岡考古』第15号、福岡考古懇話会
- 片岡宏二 1994「周溝状遺構」の検討（その3）『福岡考古』第16号、福岡考古懇話会
- 片岡宏二 1996「周溝状遺構」の検討（その4）『福岡考古』第17号、福岡考古懇話会
- 河野裕次 2013「南部九州における弥生時代中期土器様式圈の動態」『古文化談叢』第69集 九州古文化研究会
- 君嶋俊行編 2012『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告8 木製農工具・漁労具』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告47 鳥取県埋蔵文化財センター
- 栗山葉子・山下大輔編 2008『横市地区遺跡群平田遺跡A地点・B地点・C地点』都城市文化財調査報告書 第87集、都城市教育委員会
- 鈴木重治・野間重孝編 1976『石神遺跡』宮崎市文化財調査報告書第1集 宮崎市教育委員会
- 竹中克繁編 2008『桜町遺跡』宮崎市文化財調査報告書 第60集、宮崎市教育委員会
- 茶谷満・家塙英詞 2008『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告3 建築部材（資料編）』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告24 鳥取県埋蔵文化財センター
- 茶谷満編 2009『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告4 建築部材（考察編）』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告25 鳥取県埋蔵文化財センター
- 坪根伸也ほか編 2005『下郡遺跡群III』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第61集 大分市教育委員会
- 鳥枝誠編 1998『大町遺跡』宮崎市文化財調査報告書 第33集、宮崎市教育委員会
- 中國聰 1997「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』第9号 人類史研究会
- 福宜田佳男 1999「伐採石斧の柄」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集一』大阪大学考古学研究室
- 稗田智美ほか編 2010『下郡遺跡群VII』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第100集 大分市

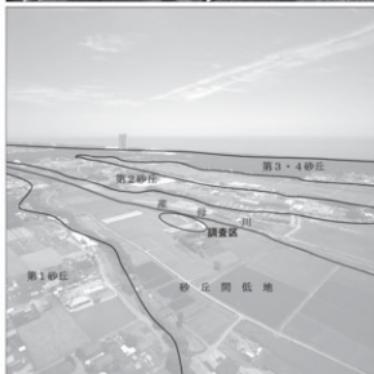


溝状遺構 1貯木部調査状況（西から）

図版 1



調査区遠景（南西から）

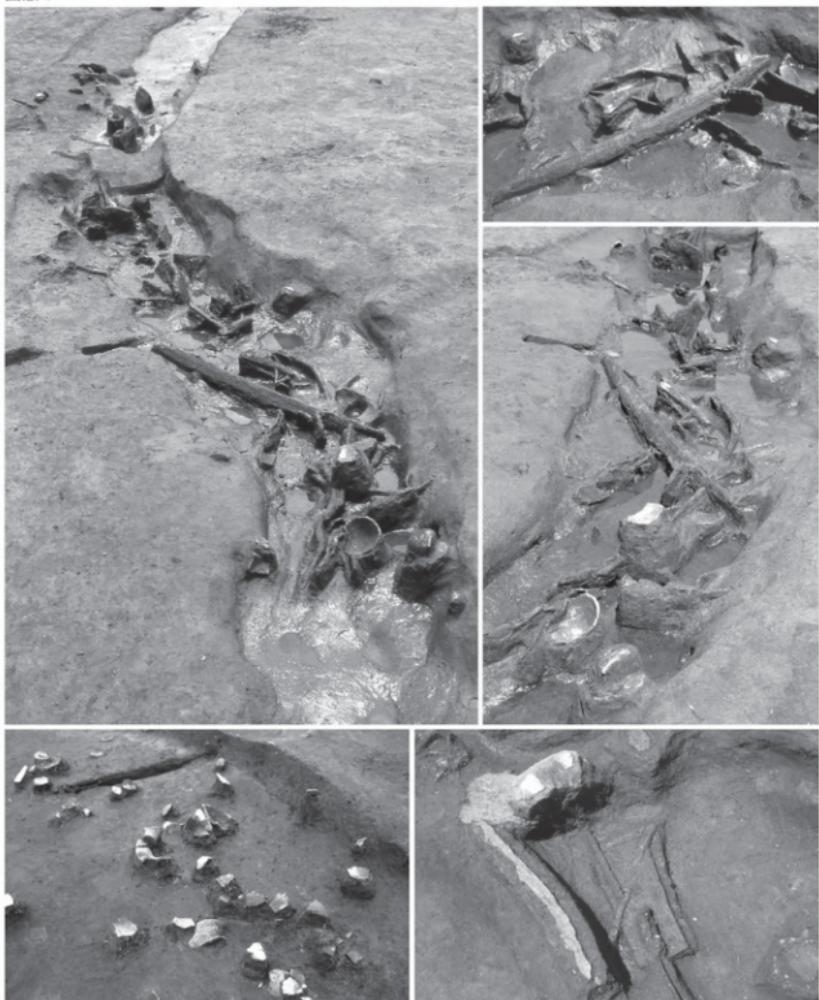


調査区の位置と周辺の地形



調査区垂直写真

図版 3



上段左：貯木部分遺物出土状況（全体・西から）

上段右上：貯木部分遺物出土状況（部分・北から）

上段右下：貯木部分遺物出土状況（部分・西から）

下段左：溝状遺構 1 遺物出土状況（北東から）

下段右：溝状遺構 1 木製鍵出土状況（南から）



上段：溝状遺構 1 柄付石斧出土状況（北から）

中段：溝状遺構 1 柄付石斧出土状況（東から）

下段：溝状遺構 1 柄付石斧着柄部分（北から）





溝状遺構 1 出土木製品・木材集合



左：石斧木柄

右上段：木柄装着孔部裏面

右中段：不明木製品

右下段：不明木製品



上段：溝状遺構 1 出土木版

下段左：溝状遺構 1 出土ヒョウタン

下段右上：木跡着柄部詳細

下段右下：溝状遺構 1 出土丸太材加工痕跡

図版 8



溝状遺構 1  
出土土器



上段左：溝状遺構 2 遺物出土状況（北から）

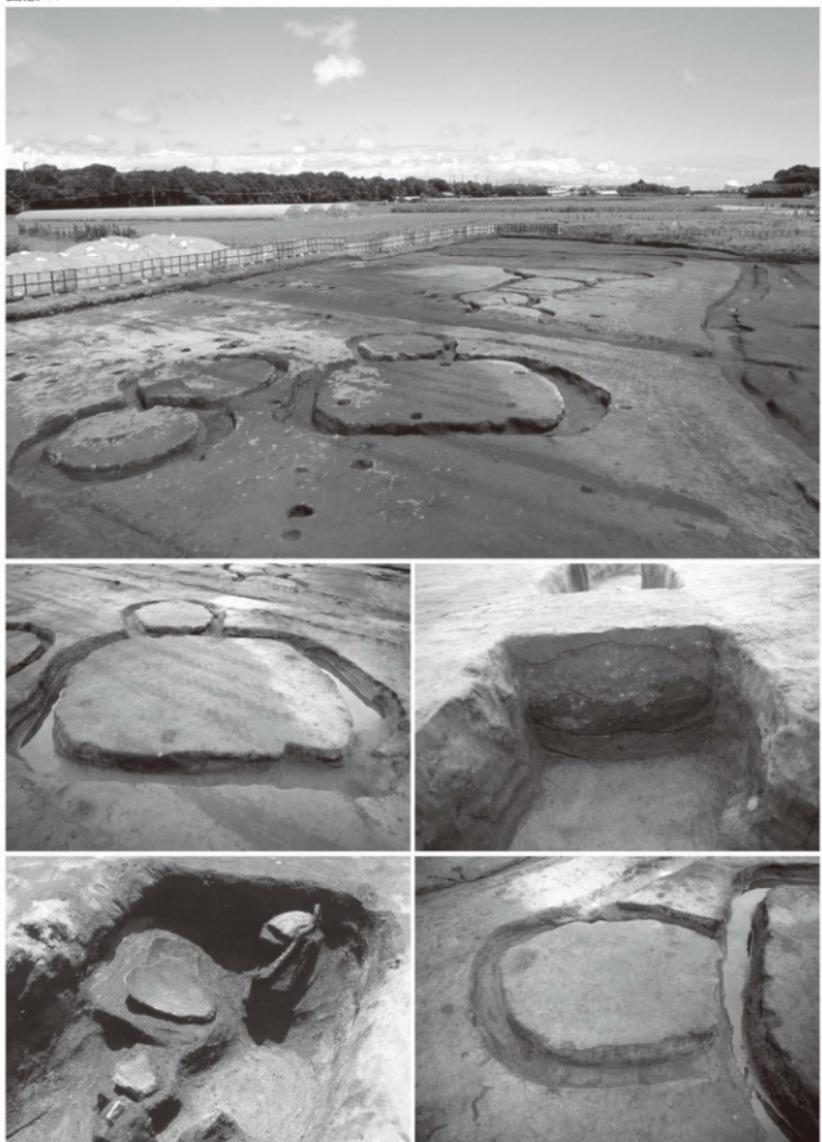
上段右：溝状遺構 3 全景（北から）

下段左：溝状遺構 5 全景（東から）

下段右：溝状遺構 4 全景（北から）

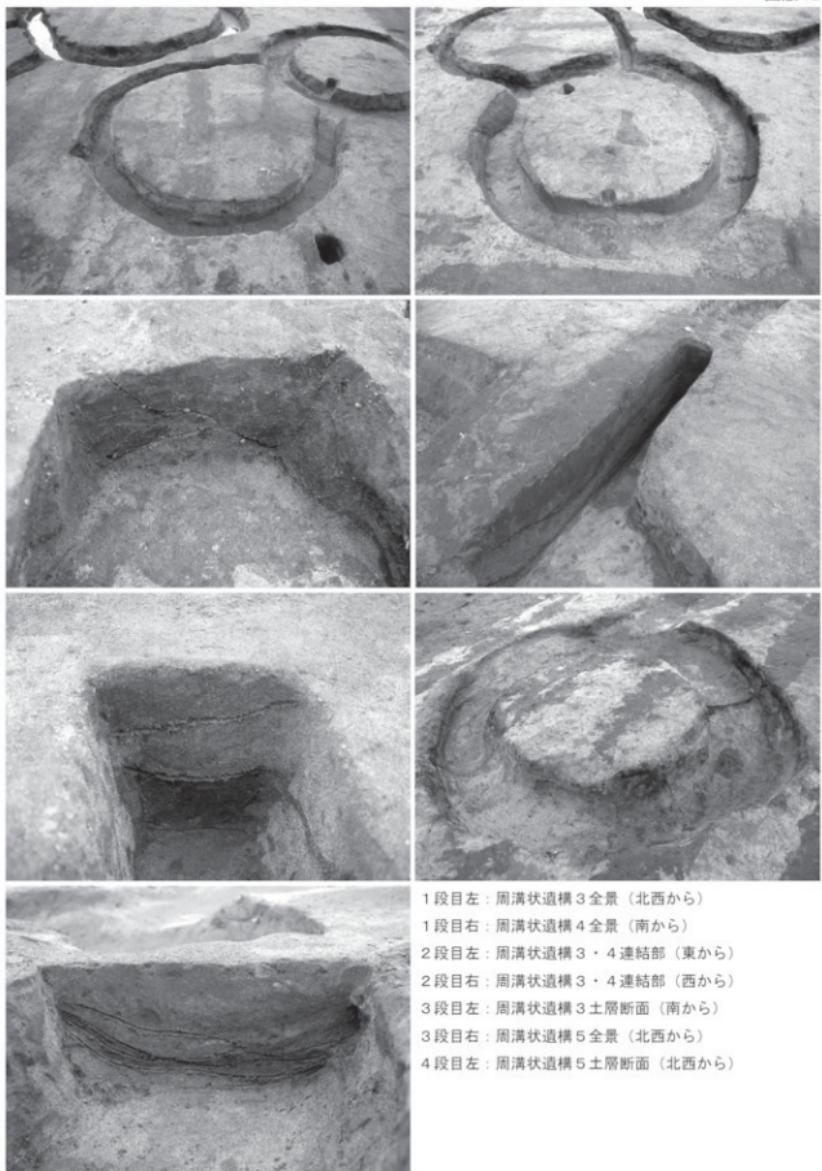


上：溝状遺構 2 出土遺物①、下左：溝状遺構 2 出土遺物②、下右：溝状遺構 3～6 出土遺物

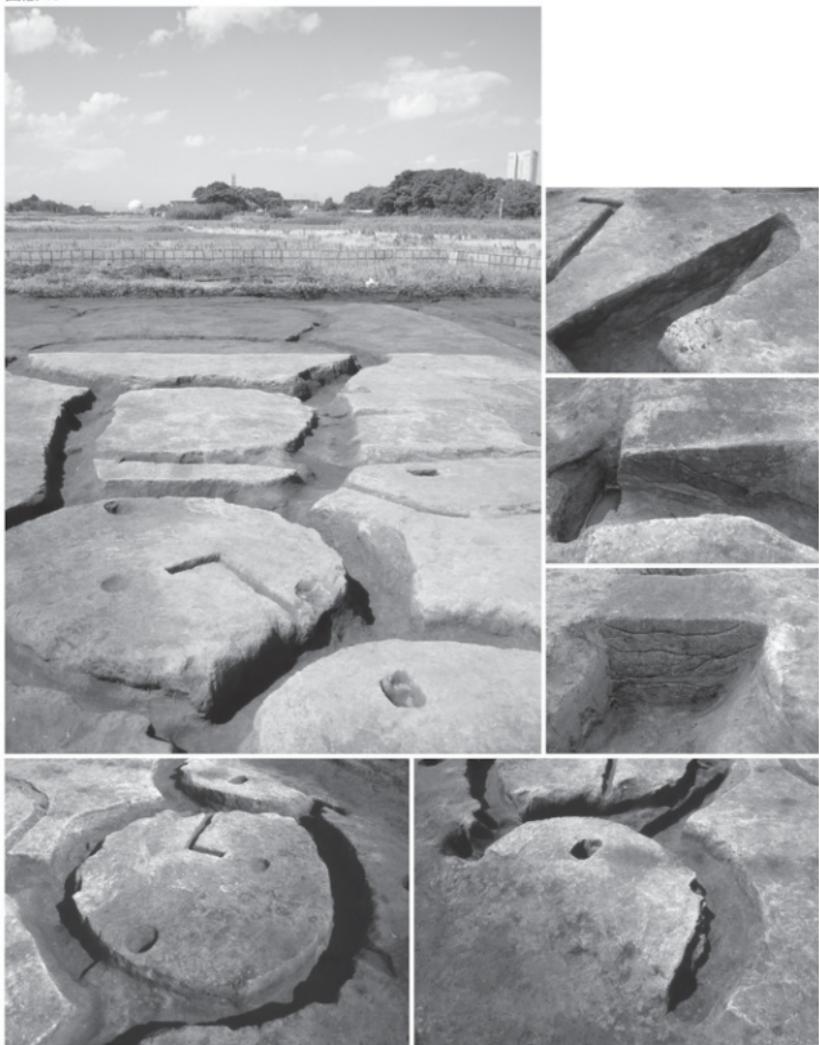


上段：周溝状遺構調査状況（南から）、中断左：周溝状遺構 1 完堀（南から）、中段右：同土層断面（東から）

下段左：同遺物出土状況（北から）、下段右：周溝状遺構 2 完堀（西から）



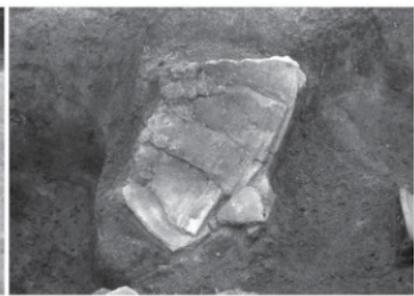
図版 13



上段左：周溝状遺構 6～10 全景（南から）、上段右 1 段目：周溝状遺構 6・7 連結部（東から）

上段右 2 段目：周溝状遺構 6 土層断面（東から）、上段右 3 段目：周溝状遺構 7 土層断面（東から）

下段左：周溝状遺構 6 全景（南から）、下段右：周溝状遺構 7 全景（北から）



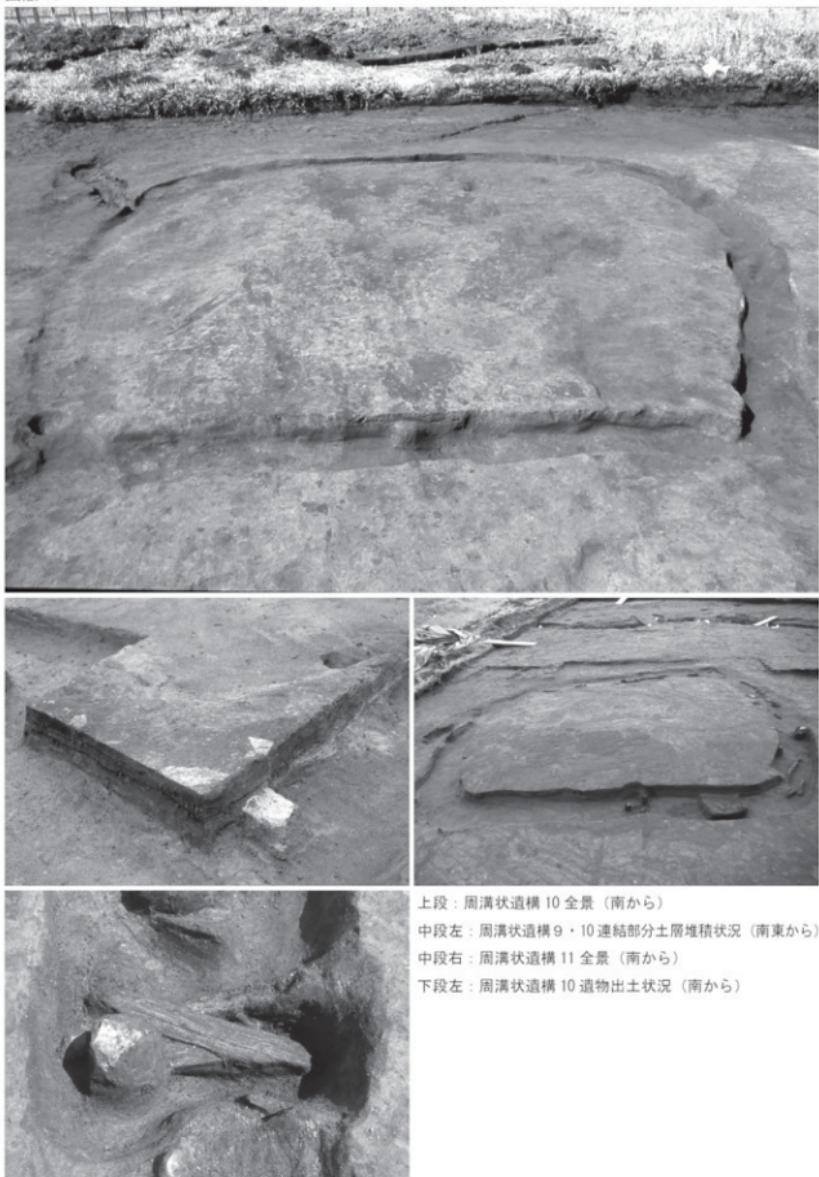
上段：周溝状遺構 8 全景（南から）

中段左：周溝状遺構 9 遺物出土状況（南から）

中段右：同詳細（東から）

下段左：周溝状遺構 8・9 東側連結部（南西から）





上段：周溝状遺構 10 全景（南から）

中段左：周溝状遺構 9・10 連結部分土層堆積状況（南東から）

中段右：周溝状遺構 11 全景（南から）

下段左：周溝状遺構 10 遺物出土状況（南から）



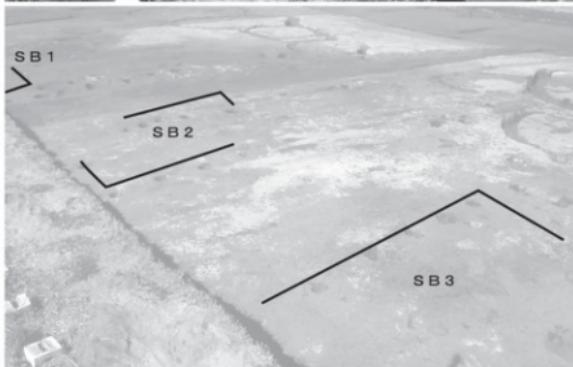
上：周溝状遺構 1 出土遺物

中：周溝状遺構 9 出土遺物

下：周溝状遺構出土石器・木器

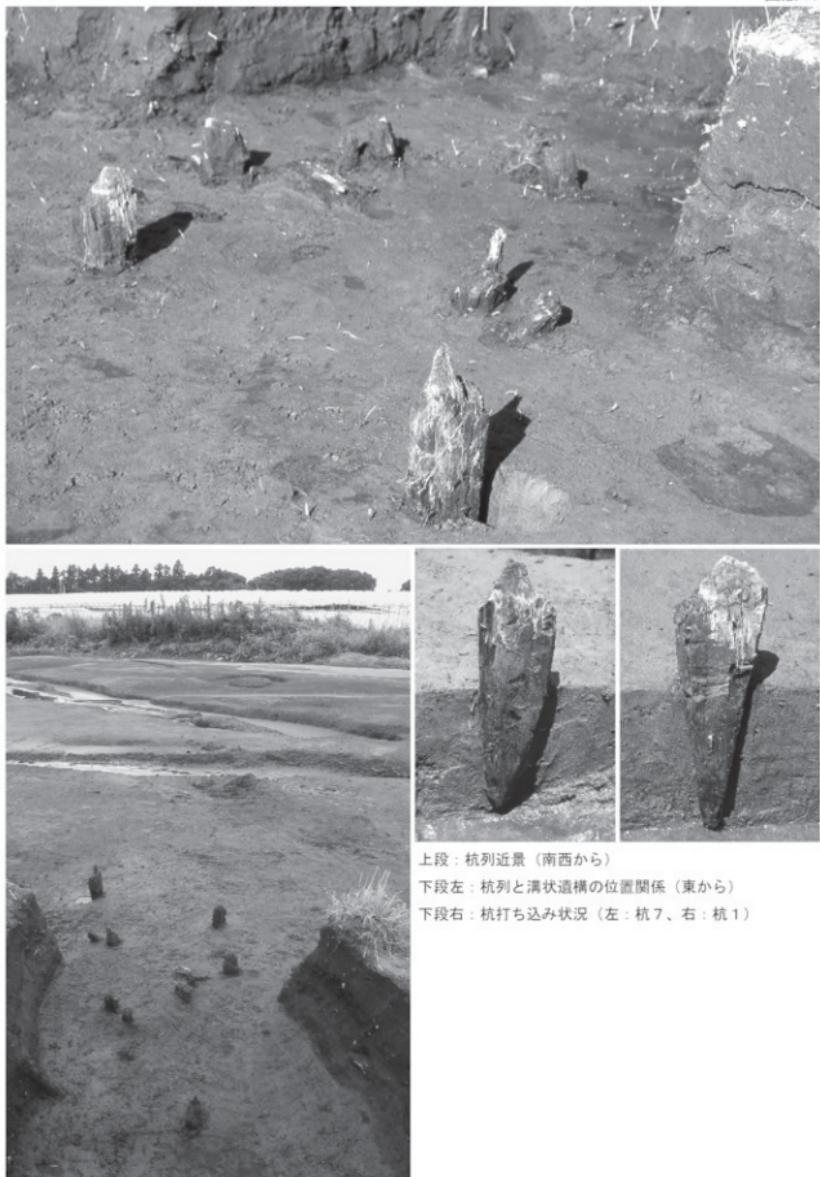


図版 17



上段：堀立柱建物 1～3（南西から）

下段：堀立柱建物 1～3 の位置



上段：杭列近景（南西から）

下段左：杭列と溝状造構の位置関係（東から）

下段右：杭打ち込み状況（左：杭7、右：杭1）



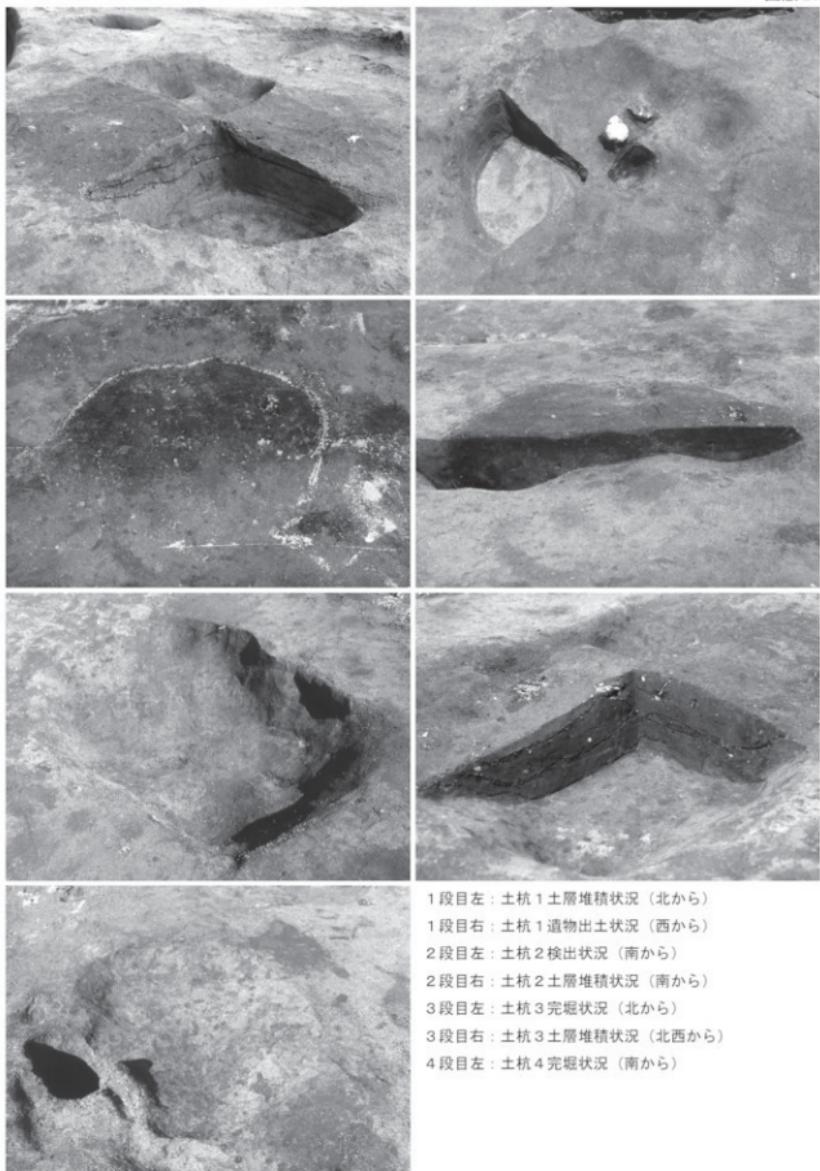
上段左：杭列出土遺物

上段右：杭 1 の加工痕跡

下段左：杭 11 先端

下段右：杭 11 扱り部分





1段目左：土杭 1 土層堆積状況（北から）

1段目右：土杭 1 遺物出土状況（西から）

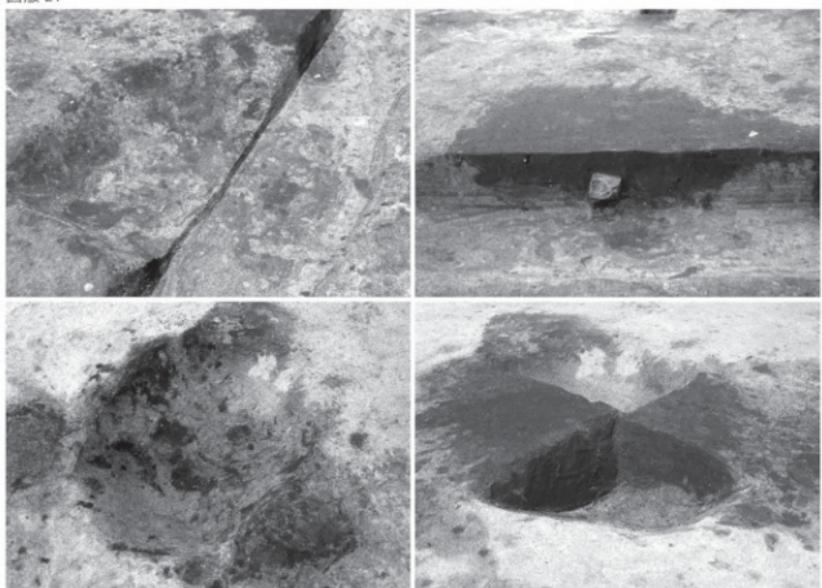
2段目左：土杭 2 検出状況（南から）

2段目右：土杭 2 土層堆積状況（南から）

3段目左：土杭 3 完堀状況（北から）

3段目右：土杭 3 土層堆積状況（北西から）

4段目左：土杭 4 完堀状況（南から）



1段目左：土杭5完掘状況（東から）  
1段目右：土杭5土層堆積状況（北から）  
2段目左：土杭6完掘状況（南から）  
2段目右：土杭6土層堆積状況（南西から）  
3段目：土杭2・3出土遺物（石器のみ土杭2）





遗構外出土遺物（土器）





上段左上：樹皮

上段左下：鑄造鐵斧片

上段右：磨製石礫と未製品

下段：石器



## 報告書抄録

ふりがな	なかすいせき						
書名	中須遺跡						
副書名	産母川河川改修事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第102集						
編著者名	西嶋 剛広・渕内 美智子 下線が編集者						
発行機関	宮崎市教育委員会						
所在地	〒880-0805 宮崎市橘通東1丁目14番20号				TEL0985-21-1836		
発行年月日	2015年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北 緯	東 経	調査期間	調査面積
なかす いせき 中須遺跡	みやざきしあわきがはらちょうなかす 宮崎市阿波岐原町中須588 ほか	45201	21-143	31°56'47"	131°27'24"	H23.4.25 ～ H23.7.29	2022m <sup>2</sup>
調査原因	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項		
河川改修	散布地	弥生	周溝状遺構 溝状遺構	弥生土器 木製品	周溝状遺構を検出 溝状遺構から木柄付石斧が出土した		
要約	調査地は砂丘間低地の微高地上に位置している。主な時代は弥生時代中期であり、溝状遺構で区画された中に、周溝状遺構や掘立柱建物などの遺構が確認された。出土遺物などの特徴から、生活用品の生産の場であったものと考えられる。						

宮崎市文化財調査報告書第102集

中須遺跡

産母川河川改修事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書

2015年3月

発行 宮崎市教育委員会